
DC × CG 2

ふるーつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DC × CG 2

【Nコード】

N0028L

【作者名】

ふるーつ

【あらすじ】

あるかどうかわからないご期待に込めて（苦笑）、2期のコラボをやってみる事にしました。正直計画性もなく、書きながら次を考える感じの連載になります。

「DC×CG」を読んでいない方の閲覧はご遠慮下さい。訳わからないこと必至です。ギアスを知らない方はまず世界観がわからないでしょうし、ご存知の方も主役同士の関係性などわからない事が多々あると思われます。

1 再びの世界（前書き）

繰り返しますが、前作を読んでいない方はまず読んでから閲覧願います。

前作より飛ばされ方がいきなりです。それについては、後々こじつけていきたいと思います（笑）。

1 再びの世界

——薄暗い洞窟。

そこは、なぜかとても見覚えのある場所のような気が、コナンにはした。

（こんなところ、来るつもりなかったのに）

どうしてオレは、こんな所まで追ってきてるんだ……？

「……コナン君？どうかしたの？」

見上げると、そこには気遣わしげな蘭の顔。

「あ、ううん。何でもないよ」

笑顔で答えておく。実際、別に大した事じゃなかった。

——今朝、妙な夢をみた。ただ、それだけのことだったのだ。

「それで？依頼人の人、どこなんだっけ？」

「角のイタリアンレストランだって……あ、あれかな」

そう呟いて歩き出した蘭について行きかけたコナンの視界の端に、妙なものがちらついた。

「……え？」

目に留まったのはなんでもないアスファルト——のはずだった。強いていえば、随分と黒っぽく変色しているくらい。

——そう、まるで……薄暗い洞窟のような。

（——何っ！？）

何かの光景が頭の中を駆けめくった瞬間、……コナンの視界は反転した。

……何かの影がふっと過った気がした。この場所のことを知っているのはごく少数の人間だけのはずだが（既に「人間」といって

い状態なのかわからない者も含めて）。

彼は、首を軽くふってその考えを打ち消した。

——『その時』がもうすぐそこに迫っていることは、間違いないのだ。そこに多少余計な『駒^{コマ}』が加わったところで、何かが変わるということはない。

この煩^{わづ}わしい至高の椅子とも、もうすぐ——。
彼は、ゆっくりと踵を返した。

突然振り返ったＣＣに、側にいたカレンは怪訝な顔をした。

「どうしたの？」

それには答えず、ＣＣは深くため息をついた。

「…どうやら、厄介な駒が増えてしまったようだ」

そうして、また歩き出す。総領事館という、政治色の濃い建物の中を。

1 再びの世界（後書き）

リクエストを下さった方々も、とくに忘れてるんじゃないかと戦々恐々しつつ、自己満足のためにまた始めてしまいました。頂いたご要望は出来る限り取り入れていきたいと思いますが、サテどうなることやら・・・。

正直、舞台がデカすぎて、煮詰まったら全話削除して雲隠れするかも・・・と、自信のなさが情けないです。

いつもなら2、3話投稿しておくんですが、今日は色々と余裕がないので、更新はあさってぐらいになるかと思っています。

2 再会（前書き）

予告より更新遅れまして、すみません。

2 再会

「……ここ……は……」

目の前の光景に、コナンはしばし呆然とした。

まったく目覚えのない建物と、庭園。

——いや。「見覚えのなかった」建物、だ。少なくとも今は、それが何なのかわかる。正確には、「何という建物なのか」が。

それが一層はつきりしたのは、どこから近づいてくる少女の声が聞こえたからだった。

「あれ？もしかして、……コナン君？」

たまたま通りかかったその少女は、コナンの記憶にある姿とほとんど変わっていないかった。

「……シャーリー、さん」

途端、彼女の顔が輝いた。

「わ、ほんとにコナン君！？生きてたんだね！良かった！」

一気にテンションを上げ、コナンの体をあちこち触るやら抱き上げるやらしたシャーリーは、最後に両手でコナンの顔をはさみ、心なしか潤んでいるように思える明るい色の瞳を震わせた。

「……元気そうだね。ほんとに良かった。あんな混乱してる時にいなくなっちゃうから、私でつきり……」

そのまま言葉を失ったシャーリーは、それでも口許をほころばせると、コナンをぎゅっと抱きしめた。

あの混乱から随分たつたらしい学園は、すっかりコナンの知る、賑やかな場所に帰っていた。

シャーリーに連れられてクラブハウスに入ったコナンは、懐かしい、とはいいいづらい建物を見渡していた。

生徒会室に到着した彼女が扉を開ける。

「みんなー、ビッグニユース！コナン君、無事だったよー！」

現れた光景はコナンがかつてそこにいた時とほとんど何も変わりがなく、コナンは無意識に張っていた力を抜いた。

何やらよくわからない書類とにらめっこしていたその部屋の面々は、その声に顔を上げ、ほぼ同じ反応をした。

「おー、無事だったのか君！つーか、生還遅くねえ！？」

「おやおやコナン君！生きてたか！」

真っ先に歓迎してくれたリヴァルと生徒会長（今もそうなのは不明だが）ミレイが、コナンに駆け寄ってもみくちやにする。半分ありがた迷惑にも感じながら、部屋を見渡すと。

「……なんで」

椅子に座ったまま固まった男子生徒と、その横で困惑した表情の、別の男子生徒が目に入った。

思わず口に出してしまったのは、仕方ないと思う。

見知らぬ顔混じっているが、固まっている方は面識がある。

——しかし、問題は『彼』がここにいるという事実そのものだった。

2 再会（後書き）

実は、これを書き始めたときは、前作読んでなくてもいいように書こうと思っていたんです。が、ここから2話ほど書いて、その無謀さに気付きました。・・・無理だ。

説明することが多すぎてやってらんねえ。

今週はあと2、3回更新できるかと思います（アバウトでごめんなさい）。

3 新しい人物

「……じゃあ、あれからもう1年も経ってるの？」

「そうよー。大変だったんだから。もう混乱しまくって、先生も生徒も、私達以外はみーんな本国に帰っちゃってね。ねールルーシュ？」

不意に話を振られた彼は、少し戸惑ったようにしながらも言葉を続けた。

「…そうですね。ロロは、実際に親に1度、呼び戻されたし。なあロロ？」

「あ……う、うん」

さらに話を振られたその彼は、ルルーシュ以上に戸惑った様子で答えた。ロロ——それが彼の名前らしい。が。

「えつと、……お兄さん誰？」

コナンの素朴な疑問に、当のロロはびくつとして視線をそらしたが、もつと驚いたのは、他の面々の反応だった。

「え？コナン君忘れちゃったの？このクラブハウスで、ブラックリベリオンまで一緒に暮らしてたロロじゃない。ルルーシュの弟の——は！??」

ミレイの説明に、コナンは思わず素っ頓狂な声をあげてしまった。「どうしたんだ？あの騒動で頭でも打って、記憶でも混乱してんのか？」

「え？……ええ？」

ミレイの言葉を当然のように受けるリヴァルに言葉に、コナンは今度こそ驚愕した。色々ツツコミたいことがありすぎて言葉にならない。

それを見かねた様子でため息をついたのはルルーシュだった。おもむろに席を立つと、『弟』といわれた彼を伴い、他の面々に言う。「すみません、とりあえずコイツを部屋に連れて行って落ち着かせ

てきます。どうも、色々混乱してるみたいですし。ロロ、一緒に行こう。久しぶりに積もる話もあるだろう」

「え？……う、うん……」

やっぱり戸惑った様子のロロと一緒に、コナンはルルーシュに連れられてその部屋を出た。

「——どーなってるんだよ一体。なんでオメー、ここに普通にいんだよ？しかも弟？いつの間に兄弟増えたんだ？」

かつてコナンが使っていた部屋に着くなり、我慢できなくなったコナンはまくしたてた。ロロはやっぱり不安そうに『兄』にちらちら目配せし、当のルルーシュはうつとうしそくに息をついた。

「落ち着け。まず、あの騒乱——ブラックリベリオンからはもう1年経っている。黒の騎士団はほぼ壊滅状態で、俺はあいつに捕らえられ、今は監視されている身だ。その監視者だったのは、こいつ——ロロだ」

話しながら、彼は若干和らげた視線をロロに向けた。ロロは視線をあちこち彷徨わせ、ためらった後、ようやく自発的に口を開いた。「あの、兄さん。この子は何？どうして、兄さんの秘密を……？」
「それを説明するのがまた面倒なんだがな。さしあたって、こいつは俺が皇子だったことも、ゼロであることも知っている。……それだけ知っていれば十分だ。すまない」

最後の一言はそれまでに比べて随分と優しい響きだった。

3 新しい人物（後書き）

修正してから投稿するつもりでしたが、話が込み合いすぎて無理でした。

構成にも不自然なところが多々あると思いますが、すみません、順序だてていかないと、話が混乱してとてもじゃないけど書けませんでした。文才があればフォローできるなら今すぐほしい・・・。

4 変遷

「……今の話で、引つかかった事が2つある」

眼光を鋭くして、ようやくいつものペースを取り戻してきたコナンの言葉に、ルルーシュはわずかに頬をゆるめて応じた。

「言うと思った。そうだな、答えられるところは答えてやる」

ベッドに腰掛けたコナンの向かいにデスクの椅子を移動させて座ると、ルルーシュは脚を組んだ。

「捕まったオメーが、なんでまたここにいる？つつか、いられるんだ？てつきり、処刑でもされたのかと思ったぜ？」

「別に、温情をかけられた訳ではない。俺は餌として放されたただだよ、皇帝にな」

「……餌？」

顔をしかめるコナンに、ルルーシュは憎々しそうな表情で答えた。

「俺は、あの魔女——^{シー}CCを捕まえるための餌なんだよ。だから放され、監視をつけられた。今のこの学園の、あの生徒会メンバー以外の人間は全てそのための駒だ。教師も、ほとんどが監視役の人間だ」

「……そーいや、彼女がいねえな。にしてもその皇帝さんが、なんで彼女を欲しがるんだ？」

「さあな。それは俺にもわからない」

言いながら肩をすくめた彼は、傍らの口口に話をふった。

「お前も知らされていないんだな、口口？」

やっと落ち着いてきたらしい口口が、黙ってうなずく。

「じゃ、二つ目の質問だ。オメー、さつき『自分がゼロである』つつったよな？捕まったのは1年も前だったのに、なんで現在進行形で話してたんだ？」

「ああ、……相変わらず耳聡いな」

呆れの入った苦笑をもらして、ルルーシュは彼のものだろうパソコンの前に移動した。カタカタと操作したそれを、コナンも覗き込む。

——再生されたのは、見覚えのある衣装と、聞き覚えのある変声機越しの声だった。

『日本人よ——私は帰ってきた！』

偉そうな口調と大仰なポーズで、両手を広げたその姿は、まさにコナンも知っていた『ゼロ』だった。

相変わらずカメラ目線（と思われる姿勢）で語る彼は、ブリタニアの統治を痛烈に批判し、「弱者の味方」演説を繰り返し、そして――。

『これより、この部屋が合衆国日本の最初の領土となる。人種も、過去も、宗教も問わない。国民たる資格は唯1つ……正義を行うことだ！』

「……というわけだ」

済まして再生を終えたルルーシュに、コナンは目を細めて応じた。
「……つまり、1度は捕まったけど、餌として放され——それを隠れ蓑に復活した、ってわけか……。ゼロが仮面かぶってんの、都合だったな。うまくすれば、別人と思わせられる」

「話が早くて助かる」

どこか満足げなルルーシュに、コナンは新たな疑問をぶつけた。

「で？この部屋はどこだ？かなり良い部屋に見えるけど」

ゼロの背景に見えるのは、赤い壁に白い翼のような模様。どうもブリタニアの国旗やなんかの類じゃなかった。

「ああ、それは中華連邦の総領事館だよ。ついこの間まで、黒の騎士団はそこに潜伏していた」

さらっと答えながらパソコンを元に場所に戻すルルーシュに、コナンは一瞬、理解が遅れた。

「……は？中華って、例の巨大国家か？結局、巻き込んだのか」

「いずれは巻き込むことになったさ」

罪悪感のかけらもなさそうなルルーシュは、そこでニヤリとした笑みを浮かべた。

「なにせ、お前が消えてからのこの世界は、ますますブリタニアが勢力を伸ばしているからな。前の時点でも中華連邦の協力が必要だったけど、今ではもう不可欠な要素になっている。……中華連邦のシステムにも、付け入る隙はあるしな」

最後の一言は、どこか彼自身に語るような口調だった。

4 変遷（後書き）

。最近謝ってばかりですが、すみません、状況説明まだ続きます・・・

5 もうひとりのキーパーソン

これまでの情報を咀嚼^{そしゃく}するコナンに、ルルーシュは初めて自分から声をかけた。

「……しかし意外だな。お前からされる質問は、もうひとつあると思っていたが？」

どこか皮肉がかったその台詞に、コナンはため息を1つついて応じた。

「……いきなりまた飛ばされて、しかもガラツと状況が変わってて混乱してる人間に無茶言うなよ。——じゃあ、今日最後の質問だ」「今日、というところを見ると、明日以降はまた増えるということだな。……聞こう」

コナンはその言葉にもうひとつ息をつき、そして——。

「ナナリーさんはどこ行った？おめーのその余裕を見ると、あのまま殺された訳じゃねーんだろ？それに、みんななんでその彼——口口さん？を当然のようにおめーの弟としてみてたんだ？」

予想どおりの質問に、ルルーシュはふつと微笑^{わらい}い、そして、……苦い顔になった。

「みんなは、記憶を書き換えられたんだ。俺にはナナリーという妹はいなかった、いるのは口口という弟だけだ、とな。——皇帝のギアスによって。俺自身、このあいだまでは自分の出生も過去も全て忘れさせられ、普通の学生として生きていた。

ナナリーは……恐らく、皇帝の下^{もと}にいる。みんなからナナリーの記憶を奪ったということは——」

「——彼女をここに戻すつもりはねーって事だな。じゃあ、もしかしてナナリーさん、皇室に戻ったのか？……つか、戻れたのか？」
そこで、ルルーシュの表情がひどく、悔しそくにゆがんだ。

「……無事でいる、はずだ。俺が生きている以上、ナナリーのこと
は人質として使えるからな。恐らく、今はブリタニア本国にいる。
正式に皇室に戻っているわけではないだろうが……」

コナンはため息をついた。……なんだろうこの脱力感。

「……7年も隠れ住んでたわりに、あっさり戻せるのか。その推測
が事実なら、情報統制国家ってのはマジで、恐ろしいな……」

国の都合で友好国とはいえない国に送り込み、あまつさえ救出も
せずにその国に侵攻して死亡発表までしておいて、生きていたら万
歳して迎えればそれで完結、なのか——なんだか、人をバカにして
いる気がものすごくするのは気のせいかな。

そんな事も含めた思考の海に潜るコナンを見てわずかに目をすが
めたルルーシュだが、1つ息をつくと、座っていた椅子から立ち上
がった。

「とりあえず、お前の部屋を用意してやる。少し待っている。――」

ロロ、お前は下に行つて、みんなの所に戻っていてくれ。こいつの
話をされたら、適当に相槌をうつておけばいい」

「……うん、わかった」

「また、ここに厄介になるわけか。……明日から、しっかり尋問し
てやつからな」

眼光を強めたコナンだが、まさか明日、もっと大きな爆弾に遭遇
するとは思っていなかった。

5 もつひとりのキーパーソン（後書き）

いつもは文章見返して書き直したりするんですけど、・・・今回無理でした。

いや、まるまる消して直したこと2回ぐらいありますけど！一度それなりにまとまったら、とてもじゃないけど手を加えられなかったです。これは。

ちよつと言葉や反応を間違うとたちまち脱線しそうで怖くて（涙）。前作のコナンとスザクシーン以上の書きにくさでした。

いっそ本文とは別にして状況説明で1話入れようかとも思いましたが、それだと物語としてしっくりこないんですよね。私が好みとして嫌で、なんとか思いつきり不自然ながらも語らせてみました。

ここでグチグチ言っても不快でしょうから、このへんでやめときます。

ここで終わったと見せかけて、あと1話状況説明です。

6 まだ続く『現実』（前書き）

サブタイトルが間違ってる、というツツコミはナシの方向で。

6 まだ続く『現実』

「あ、コナン君！」

部屋の準備ができるまでクラブハウス内を適当にぶらついていたコナンに、声をかけたのはミレイだった。

「ミレイさん、お仕事は終わったの？」

何気なく尋ねたコナンに、ミレイは輝かしいばかりの笑顔で答えた。

「だーいじょうぶよ、後でルルーシュに全部押し付けるから！今計画してるのは、校舎の屋上いっぱい花壇を作ってね——」

「あ、そ、それより、僕に何か用？」

何やら長くなりそうなミレイの話には興味のないコナンの問いに、少々ムスツとしたミレイは、突如真剣な顔になって手をたいた。

「そうそう！君、しばらく租界からは出ないほうがいいわよ。今本当に治安が悪いから」

「……ああ、黒の騎士団の話？さっきルルーシュさんからちらっと聞いたけど、でも捕まっただんでしょ？」

ルルーシュから聞いた話の、「コナンが今知っていても不思議じゃない部分」を振ってみると、ミレイからは少々意外な言葉が返ってきた。

「それがね、彼ら脱走したのよ！」

「………脱走？」

いぶか

訝しげに問い返すコナンに、ミレイは真剣な表情のまま続けた。

「そうなのよ。つい先週のことよ。ギルフォード卿が黒の騎士団の人間を処刑しようとしたんだけど、そこにゼロが現れて………あ、ゼロってあの混乱のときに捕まって処刑されたって話だったんだけど、なぜか復活してね？囚人たちを解放しちゃったの。それで、今

租界には厳戒態勢が敷かれてるわ」

ギルフォード……その名前には覚えがあった。総督である皇女コーネリアがメディアに顔を出した数少ない時、常にいっしょに映っていた彼女の側近だったはずだ。

コーネリア———そういえば。

「ねえミレイさん、コーネリアさんはあれからどうなったの？」

あれだけの騒乱を起こされては、総督である彼女の面子は丸つぶれだったはずだ。

コナンの疑問に、ミレイはああ、と首をひねった。

「確かあの後すぐ、総督位を返上されてね。今は本国に戻られてるんじゃないかな？それで新しくカラレス総督が来たんだけど、……この間の戦闘で負傷したってニュースで言ってたわね。それから出てこないから、もしかしてもう亡くなってるんじゃないかって話もあるみたい」

ここまで話してから、ミレイはたと口を閉じた。そして再び口を開く。

「やだ、変な話になっちゃったわ。とにかく、外はなるべく出歩かないようにね。まあ、コナン君ならクラブハウスで十分生活できるから、大丈夫だとは思っけど……」

どうやら、当初の目的を思い出したらしく、ミレイは念を押してから去っていった。その後姿を見送りながら、コナンは新たな情報の整理に、頭を忙しく働かせた。

——皇女である総督コーネリアは、あのあとこのエリア11から去った。まあ、可愛い妹があんな最期を遂げたら意気消沈もするだろう。そして、あの直後に新たにやってきたカラレスという総督は、負傷もしくは戦死。……ゼロが復活して間もないということは、カラレスという男は軍人としてはともかく、戦略家としてはルルーシュに比肩しなかつたのだろう。

——さて。これらのピースから、まずは何が導き出されるか。
コナンは、いつもの推理ポーズのまま、クラブハウスの階段を上
っていった。

6 まだ続く『現実』（後書き）

カラレスさんって、いつ死亡発表されたんだろう、とふと思いました。

本編で明確にされていなかったのも、まだという事にしました。

次から本編に割り込みます。

7 自然で不自然（前書き）

なんか、良いサブタイトル思いつく方法ってないもんなあ。

7 自然で不自然

翌日、コナンはさっそく情報収集に取り掛かった。幸いルルーシュもロロも授業に出ていて、彼のパソコンは使いたい放題だ。

——昨夜、コナンはもうひとつの違和感に気付いた。

いつもこのクラブハウスにいて、たいていナナリーの世話をしていたあの日本人の女性——確か咲世子といったか。彼女もいなくなっていた。ルルーシュに尋ねてみると、「ブラックリベリオン終結後にブリタニアの手を逃れ、現在は中華連邦に潜伏中」なんていうびつくりな事実を明かされた。

前はルルーシュとユーフェミアの動きに気をとられていたが、彼女までもこの騒乱に関わっていたらしい。

……が、彼女がこの後、意外なかたちでコナンの前にまた姿を現すとは、さすがに予測することは不可能だった。

不意に部屋のドアがノックされ、コナンは振り向いた。

「あ、コナン君？ちよつといい？」

シャーリーの声だった。コナンは慌ててパソコンをシャットダウンし、ドアを開ける。

そこには、妙に弾んだ表情のシャーリーが立っていた。

「……なんか嬉しそうだね。良い事でもあったの？」

からかいがてら尋ねると、返事は意外なものだった。

「実はね……スザク君が復学したの！」

「——え？」

コナンの戸惑った顔にも気付かないようで、シャーリーは嬉しそうに続けた。

「会長なんて、興奮してクラスに乱入しちゃったよ！ラウンズになつてから、全然学校来てなかったから」

「……ラウンズって？」

初めて、シャーリーは冷静になったようだった。

「あ、そっか。コナン君は知らないんだっけ。スザク君ね、例のブラックリベリオンでゼロを捕まえたって言って、皇帝陛下直属のナイトオブラウンズになったのよ！」

「——っ！!?」

コナンは目を剥いた。どうしてそんなことに——と思う反面、そうか、予想できたことだ——と納得もする。

（……そうか。ルルーシュはさっき『捕らえられ』って言った。なら、それを足がかりに彼が出世してた道は十分にある）

「……それ、いつぐらいのこと？」

どうも自分と同じように喜ばないコナンに、シャーリーは首をかしげる。

「あのブラックリベリオンのすぐ後だけど、……どうしたのコナン君？　なんか怖い顔してるけど」

言われてやっと、コナンは「子供モード」をすっかり忘れていたことに気付いた。

「あ、いや、ごめんなさい。僕、スザクさんが無事だったって全然知らなかったから……驚いちゃって」

「ふーん？……まあ、それはコナン君もだけだね。それで、一緒にお昼食べない？　生徒会の人々と！」

「みんなって、ルルーシュさんやロロさんも？」

「そうだけど。……どうかしたの？」

不思議そうに首をかしげるシャーリーに、コナンはあわてて「何でもないよ」とごまかして、彼女のあとに続いた。

その昼食は中庭でやっていた。コナンにとっては、同じ敷地内とはいえ馴染みは薄い場所。そこにあるベンチのそばに椅子を置き、生徒会の面々は座っていた。

全員の顔が見えるところまで近づいてから、コナンは不意に立ち

止まった。

「——どうかした？」

さっきと同じようにシャーリーが声をかけるが、残念ながらコナンには届かなかった。

丁度向かい合わせになる位置に座り、談笑するルルーシュと、スザクの姿に。

「……シャーリーさん。やっぱり僕はいいや」

「え？」

「ごめん、ちょっと気が変わった。お昼は何か適当に作って、クラブハウスで食べるよ」

返事を待つことなく、コナンは踵きびすを返した。シャーリーには悪かったが、正直そのまま「子供モード」を保てる自信なんかなかった。

残酷な現実が続いているという予測ができなかった、自分の甘さに苛いられた。

7 自然で不自然（後書き）

えーっと、これも半分以上説明話です。ほんとに状況説明が多すぎる・・・。

最後のは、コナンをあのティータイムに乱入させないために考えた展開です。なんかすごくコナンが感傷的になりますが、ご容赦いただけたら幸いです。

8 対話（前書き）

遅くなりました。

8 対話

勝手にルルーシュの部屋に上がり、彼のパソコンを拝借して再び起動させながら、コナンは自分の予測の甘さを呪った。

（そうだ……ああいう状況になるためのキーワードは、もう手に入れたじゃないか）

ルルーシュは今もって記憶が改変されたままのふりをしている。それは聞いていた。スザクは十中八九、探りを入れにきたんだろう。なら、あのふたりが会えばどうなるかは、わかっていた。わかっていたのだ——頭では。

向かい合って笑っていた二人。そう、それは以前はよく目にした光景だった。彼の妹ナナリーを挟んでよく談笑していたルルーシュ。……その微笑ましい光景が、気味悪く写る日がくるなんて。

とてもじゃないが、あのまま輪に入ることはできなかった。シャーリーに一言言っておくべきだったかと思ったが、考え直した。——多分、何も知らないシャーリーはスザクにコナンのことを言うだろう。スザクはコナンの所に来る。間違いなく。その時までには、感情を落ち着けておけばいい。

案の定、部屋のドアがノックされた。時間は——あれから30分。「はい」と返事をする、予想通りの声が聞こえた。

「コナン君？ 僕だけど。……ちょっといい？」

「来ると思ってたよ。鍵はかけてないから、どうぞ」

カチャツと軽く音がして、記憶より少しだけ大人びた顔が近づいてきた。彼が口を開く前に、パソコンの前で振り向いたコナンが口を開いた。

「……いいの？ 場所を移さなくて」

ここではマズインじゃないのか、と暗に問うと、彼は首を振った。
「いいよ。この学園内では、どこにいたって同じだからね」

「……同じって？」

スザクは少しだけためらうように沈黙したが、やがてまた口を開いた。

「この学園には、監視網が張り巡らしてある。カメラの有効範囲が
いいからね」

「——それが、彼を『籠の中の鳥』にするためのトラップ？」

スザクが、ゆっくりと目を眇める。

「……どこでそれを？『彼』から聞いたのかい？」

「そんなこと、聞かなくなつて想像はつくけどね。スザクさんに捕
まつたはずの彼がなぜか生きてこの学校に戻つて、しかもナナリ
ーさんがいなくて、代わりのように口口さんがいてさ。しかも、み
んなそれが当たり前つて顔してるし。最初は何がなんだかわからな
かった。……でも、一つ一つ組み立てていけば、多少の想像はでき
るよ。」

スザクさんは彼を捕まえたけど、ブリタニア側の何かの事情で彼
は殺さずに戻された。ただ、そのまま反逆者の彼をここに戻すのは
危険すぎる。そこで、彼からそもそもの反逆の理由——ナナリーさ
んの記憶を消す。それが不自然じゃないように、彼と親しかったみ
んなも。……まあ、これが事実なら、新たにビックリなことが浮か
び上がってくるけどね。

「……それで？『他人の記憶を操る』なんてぶつとんだギアスが使
えるのは誰？スザクさんの知り合い？」

ルルーシュから説明されたことを、自分の推理として話しておく。
正直、今すぐに彼の『復活』をスザクに教えていいと思えるだけの
材料がなかった。

彼が、ひとつ息をつく。

「皇帝陛下だ。陛下がお決めになった。あいつを生かしてここに戻

すことも、ここに厳重な監視網を敷くことも」

「厳重な監視網……？」

顔をしかめて繰り返したのは無意識だった。ルルーシュからも、さすがにどれだけ細かく監視されているのかまでは聞いてない。

思わず部屋を見渡す。しかし、スザクの言葉で探索は打ち切られた。

「心配しなくても、この部屋にはないよ。元々使ってなかった部屋のようだし。……とはいえ、君がいる以上、つけさせた方がいいか」
つけさせる——ごく自然にこぼれたその言葉に、コナンは思っていた以上のショックを受けた。

（彼はもう——オレが知ってる彼じゃねーのか）

目の前にいる男は、自分を友人としてくれたあのスザクじゃない。それを、思い知らされた。

『つけさせる』——自分じゃなく、誰か他人にさせることを当たり前のように考えるスザクは、もう、何かを捨ててしまったんだろう。いや……あの少女を奪われたことで、そうなってしまったのか。

スザクは、まっすぐにコナンに視線を合わせた。

「……君がもっている情報を、出してくれる気はないかい？ 君ならわかるはずだ。彼が記憶を取り戻しているのかいないのか」

「そしたら、僕には何か良い事ある？」

コナンは机から離れ、ベッドにぽすんと腰かけた。

「僕が協力することで、誰かを助けられる？ 救える？——もちろん、差別万歳、侵略万歳の軍人さん達以外で、だけど」

沈黙で返すスザクに、コナンは続けた。

「悪いけど、協力するかどうかは自分で判断するよ。僕がこの目で見て、この耳で聞いたことだね」

8 対話（後書き）

お叱りは甘んじて受ける所存。

・・・いやもうね、書きにくいတာなんですよ。狐と狸の化かし合いに、探偵がどうやって割り込むんだよってな感じです。コナンの言動に「？」になる読者様、前作以上になりそうな予感満載です。ただ、作者としては精一杯「コナンらしさ」を出しつつ、ギアスのストーリーに沿うよう、暇を見つけては妄想しまくりたいと思っております。

1つ注意しておきますが、この2期では結構スザクに辛くあたる予定であります。（s作者のスザク嫌いがコナンフィルターで薄まった状態になるかと）個人的な嫌悪感情はできるだけ出さないようにしますが、「人道的にみたスザクへの批判」は入ると思います。

9 出てきた名前（前書き）

ギアスきょう団が「教団」となっています。ご注意ください。

9 出てきた名前

「……あー…やっぱりね。そうくるよね……」

机いっぱいに広げられた書類の山を見て、コナンはボヤいた。

「だって、生徒会の一員のスザク君の歓迎会よ？ 派手にぶち上げなくっちゃ！」

息巻いているのはミレイだ。広げられたのは、歓迎会にかこつけて各所から寄せられた、イベントや屋台の企画書だった。

決まってからまだ間もないはずなのに、即行でよくこんなに書けるものだ。帝丹高校ならありえない。

嬉しそうにうなずくのが、シャーリーとリヴァル、苦笑しつつも見守るのはルルーシュ。そのそばに、やや心配そうな口口がいる。スザクはあれから軍務があると、早速早退していった。

彼はさりげなくコナンに近寄ってきた。

「……スザクに、余計なことを言わなかっただろうな？」

「やだなー、そんな状況見て察してよ。それより、また面白そうな話いっぱい聞きたいな」

「子供モード」で応じる。ルルーシュは1つため息をつく、他の生徒達に向き直った。机の上から企画書の数枚を手に取った。

「会長。俺、このあたりの位置関係を確認してきます。ついでに、こいつに久々に校舎を見せてきますね。口口、行こうか」

「あ、うん」

「……このあたりか？ 口口」

「そうだね」

意外にも、校舎の正面からやや外れた校庭でふたりは足を止めた。主語のない『兄弟』のやり取りだったが、コナンには十分だった。

「——ここが、監視カメラの隙か？」

ルルーシュに尋ねた質問だったが、彼は仕草で口口に振った。

「……完全にカメラから外れてる訳ではないけど、1番映りにくい場所。…とはいえ、もう監視員はほとんど――」

「口口。そこまでいい」

「あ、……うん」

穏やかに、しかしはつきりと弟の口をふさぐ彼の様子から、監視員には既に何かしているらしい。

「――で。今現在、黒の騎士団の人間はどこにいるんだ？」

「ああ、現在は中華連邦の総領事館にいる。先日から使わせてもらっている」

何でもないように話す彼だが、それってすごいことじゃないだろうか。

「先方の……その中華連邦の責任者にはどうやって……。――まさか」

「そのまさかだ。……どうする？スザクに密告するか？」

笑みさえ浮かべて尋ねるルルーシュは余裕だ。コナンが現時点では「イエス」と言えないことを見越している。

「……オメーのことが今ばれたら、ナナリーさんの身が危ねーんだろ。そのへんはつきりしたら、オレはオレとして行動させてもらうぜ」

「どうかな。お前とて、今のスザクをあまり信用してはいないのだろう？でなければ、あいつがお前の部屋に行った時点で、教えているはずだからな」

「……」

――その通りだった。

彼がルルーシュを捕まえたことまでは別に責める気はない。むしろ、あれだけの騒乱を起こした以上当然だ。彼がやっていなければ、コナンがやりたかつたくらいだ。

ただ、その後の彼の行動が理解不能だった。ルルーシュを皇帝に

差し出し、その代わりに皇帝直属の部隊にまで入る。そして、あれから1年弱のあいだ、侵略戦争の先頭に立ちつづけているらしい。

……彼が敬愛していたユーフェミアが、そんなことを望むと本気で思っているのか彼は。

それに、あれだけ「間違った方法で得た結果は価値がない」と繰り返していたのに。たとえユーフェミアのことで激昂していたとしても、そんな裏取引のような方法で得た地位に彼はなんとも思わないのか。

「……あの、兄さん。僕、先に戻っていいようか？」

どうも会話に入れない様子のロロの言葉で、コナンは思考の海から引き上げられた。

「その子は兄さんと話したいようだし、先生のこともあるし」

彼の視線には少々棘がある気がしたが、コナンは別の話を優先させた。

「——いや。悪いけど、1つだけ確認させてくれる？」

改めて見据えたロロの顔はやっぱり少し幼くて、けれど綺麗な欧米人の顔だ。

「ロロさんは、皇帝さんの命令でここにいるんだよね？」

彼は兄の顔を少し伺ってから答えた。

「……正確には違う。僕の元いた教団の当主が、皇帝の依頼で僕をここに派遣したから」

「教団……？」

耳慣れない言葉に首をかしげたコナンは、その瞬間ルーシュが剣呑に目を眇めたことに気付かなかった。

9 出てきた名前（後書き）

更新が遅くなったことをまずお詫びします。そして、今後もしばらくはこのくらいの頻度になります。最近忙しくて・・・（汗）

しかも、まだ色々確定していないことが多いので、予告？通りの手探り連載です。

「だったら始めるなよ」というお叱りはごもっともです。自分が一番感じております。

長い目で見てもらえたら幸いです。

10 もうひとりの『能力者』（前書き）

原作でキャラがいつ知ったか明確にされていない事については、作者の解釈で出しています。

後書きにちよつとしたお知らせあります。

10 もつひとりの『能力者』

「……その響団っていうのと、皇帝さんの関係は？」

「……わからない。親密な様子だけど」

無言でルルーシュに振ったが、彼もため息をついた。

「残念ながら俺もよくは知らない。あの魔女はよく知っているようだが」

「魔女、って……」

「……」

「CCだよ。この学園にはいられないから、別行動をとっているが」

「……」

考え込むコナンを、ルルーシュはどこか冷めたような目で見つめていた。

「……で、その響団ってのはどういう組織なんだ？何の意味もなく、子供を集めてはあちこち派遣してる訳じゃないんだろ？」

「……」

ルルーシュはしばしコナンから目を外し、何やら考えている様子だったが、わずかに目を細めると肩をすくめた。

「あの魔女の言葉を借りれば、『ギアスの使い手を生み出し、研究している組織』だそうだ。そして、このロロもギアスの使い手だ。だからこそ、俺の最も身近な監視役選ばれたのだからな」

「——！」

その事実がちょっとした衝撃だった。……が、考えてみれば当然だった。いずれ力が戻るかもしれないギアスを持った男に、『なんの力もないただの少年』を監視役につけるのは無策すぎる。その状況を作り出した本人がギアスを持っていれば、なおさら。

「……ロロさんの能力は？」

ルルーシュは口許に笑みを浮かべた。

「『他人の体感時間を止める能力』だ。俺のギアスで効果があつた

お前になら、効くだろうな」

コナンは目を細めた。

「……使用条件は？建物や被り物をしてても有効なの？」

口口のほうをまっすぐに見て尋ねると、彼はやはり兄を窺^{うかが}ったあと、戸惑いつつ答えた。

「ほとんどない。有効範囲は自分で調整できるし、建物の壁ごしでもナイトメアの装甲ごしでも効く」

「——ただし、落ちてくる瓦礫とか、撃たれた銃弾とかは止められない——ってトコロ？」

沈黙で返された返答に、コナンはうなずいた。

「やっぱりな。だから『体感時間』なんて言葉を使ったわけか。にしても、『有効範囲』か……。ギアスの特徴つてのは、人によってまったく違うってことか？」

「そういうことだ。俺が以前会った能力者のギアスは、一定範囲内にいる人間の思考がすべて読める、というものだった。もっとも、それが暴走していたせいで精神に異常をきたしていたがな」

（異常——そうだ）

突然弾かれたように視線を向けられた口口は、明らかに戸惑った様子だった。

「口口さんは、ギアスが暴走するって事は知ってるの？」

「……知ってるよ。響団には、たくさんギアス能力者がいるし、それが暴走した人もいたから」

「……………」

複雑な心境が表情に出てしまったのは、仕方ないことだと思う。

「……人間……人間……か」

それからひととおり校舎を見て回ったあと、とりあえずコナンたちは生徒会室へ向かっていた。というか、ルルーシュがコナンを連れ出すための口実だった『屋台の位置関係』なんて、彼の頭脳なら実際に確認するまでもない。学園にしても、事件現場で部屋の間取

りなんかを把握し慣れているコナンにしてみれば、ざっと見ればだいたい覚えられるのだった。あまり長く出ている、変に思われるのは避けたほうがいい。

（響団の噂、黒の騎士団の動向、ブリタニアの動き、ナナリーさんの所在……やべ、一気にキーワードが増えた）

クラブハウスに戻ったら、また色々調べなければならない。とはいえ、今回ばかりは、ネットで調べられることだけだと不十分でもあった。——ブリタニアと黒の騎士団内部に、それぞれ別にコネがつかめれば——。

この話は、まだ広がりきっていないことを、コナンはひしひしと感じていた。

10 もうひとりの『能力者』（後書き）

更新トロくてすみません。前回と今回は、「コナンにロロのギアスを教える」ただけに書きました。弱点は、ロロがコナンを信用してないので教えません。それがいずれ生かせればいいな、と思っております。

そして、楽しみにして下さっている方には本当に申し訳ないんですが、しばらく執筆休止します。ちよつと個人的な事情がたてこんであります、ここに割ける余裕がなくなっております。

7月末〜8月あたりで復活したいと考えています。気長にお待ち頂ければ嬉しいです。

11 新たな登場人物（前書き）

えーっと・・・長らくお待ち下さった方（・・・がいらっしやるかどうかわかりませんが）、一応執筆再開しました（苦笑）
後書きはただの言い訳と化しておりますので、読まれなくてもまったく問題ありません（笑）

11 新たな登場人物

眼前の建物群を見て、彼女は嘆息した。……なんというか、土地の使い方がすごい。

「ここ、ですか。すごく立派なところですね」

「ええ。経営者は貴族の方ですから。とはいえ、皆気さくで優しい人たちだから、すぐに仲良くなれると思いますよ」

微笑んで歩き出した少年に、彼女は少しだけ表情を和らげてしまった。

「おー！さすがアツシユフォードの生徒、モノがわかってるわね」

上機嫌で屋台を見て回るミレイに、コナン達は苦笑した。

とても生徒一人の歓迎会とは思えない、町内夏祭りでも準備しているのかと思う風景が目の前にあった。屋台骨を組んでいる最中のチームもいれば、もう組みあがって、簡単な機器を取り付けている所もある。ちなみに、メインステージとなる予定地は屋台の比ではなく、「どんな有名歌手のライブ？」と思うほどの豪勢な足場を、せつせと作っている最中だった。

「すごいね。たった2日で、こんなにたくさん準備できちゃうなんてさ」

「会長のイベント好きには、しょっちゅう付き合ってるからね。みんな学習済みよ」

コナンの感嘆に、楽しそうに応じるのはシャーリーだ。男性陣は思い思いの表情で、目の前の光景を見つめている。

1番に反応したのはリヴァルだった。

「あれ？あれってうちの生徒か？」

校門近くでキョロキョロする、見慣れない服を着た人影に、全員

が気付いた。

「——っ!？」

コナンが凍りつく。——しかし、他の面々が反応したのは、むしろその人物のあとに入ってきた少年にだった。

「あつれー？スザクじゃない」

「あいつ、今日軍ないのか」

「あの女の子、誰だろう？」

約2名の男子を除いて、それぞれの反応をする面々。しかし、ミレイはすぐに表情を改めた。

「ちよつとリヴァル、スザクを足止めしてきなさい！主役にこんな準備風景を見せるのはよろしくないわ！」

「……会長、今さらそれですか」

ツッコむルル―シュにも動じず、朗らかに返す。

「当然よ！なんたつて、相手はナイトオブラウンス様になったんだから！それ相応の対応にしくちや！」

（——とかなんとか言つて、本当は事態をもっと引っ掻き回したいだけなんじゃねーか？）

そんなコナンの心中の声なんて聞こえるわけもなく、リヴァルが校門に向かう。シャーリーがそれに続くが、複雑な表情のルル―シュとロロは別に急ぐ様子もなく、てくてくと後に続く。

そしてコナンは、別の意味で焦つて、そこに走り出した。

——あの少女が本当に『彼女』だったら、ややこしいことになる。

「……お祭りでもするんですか？」

「あー…明日僕の歓迎会があるから、その準備だと思います。会長さん、お祭り好きで」

「歓迎会？…でもスザクさん、この人たちのこと、よく知ってるみたいですけど」

「事情があつて、休学してたんです。このあいだ復学したばかり

で」

「……大変ですね、私と年違わないのに」
純粹に興味を示すその少女に、校内を本格的に案内しようとした
その時。

「あー、ダメダメ！主役は当日まで立ち入り禁止！」

覚えのある声がしたかと思うと、肩をひつつかまれ、スザクは強
引に校門のほうに押しやられた。

「あ、あれ、えつと……？」

いきなりのことに戸惑っていると、同じく戸惑った彼女が割って
入った。

「ちょ、ちょっと！いきなり何するんですか！？」

日本語で吐かれたその台詞は残念ながら相手には通じなかったよ
うで、「は？」という疑問符だけが返される。その反応を誤解した
らしく、彼女が身構えたその時。

「ストップ！！」

これまた、覚えのある声が響いた。

11 新たな登場人物（後書き）

予定ではもう少し早く復活できるつもりだったんですが・・・でも更新に踏み切れませんでした。それもこれも、性懲りもなくコナンキャラ投入を妄想してみたら止まらなくなり、でもうまく捌ける自信もなく、悶々としていたからです（汗）

この話自体は月頭にできていたんですが、「これやっちゃったら戻れないよな」と思うとなかなか決心できず、感想下さった方々にも随分お待たせしてしまった気がします。

と言いつつ、未だに自信がついたわけでもないのですが、「やらなきゃ後悔する」という思いのもと、がんばってみる事にしました。

12 思わぬ再会

その声に振り向いた彼女は、駆けてくる姿に驚いた。
焦った顔で近寄ってくるのは――。

「コナン君!？」

「……や、やっぱり蘭姉ちゃん、だったんだ……」

膝に手について息を整えるコナンに、蘭はいつもの癖で仁王立ちになった。

「どこ行ってたの?心配したのよ!」

「ご、ごめんなさい。――じゃなくて!」

これまた、いつもの癖で謝ってしまったコナンだが、すぐに状況を思い出す。

「蘭姉ちゃん、なんでこんな所に……」

その表情から、コナンのいわんとする意味を察したらしい。蘭は顎をつまみ、首をひねった。

「……わからないよ。いきなりコナン君が消えちゃったと思ったら、わたしも気を失って……。気がついたら、スザクさんがいて――」

蘭が示した人物に、コナンため息をついた。

(……よりによって……!)

「……元気そうだね、コナン君」

「……スザクさんもね」

「あれ、知り合いなの?」

ふたりの間の妙な空気に戸惑いつつも、意外な展開に蘭が尋ねる。
「まあね。彼の友達のところ、今厄介になってるから」

その言葉の意味するところを察したのか、スザクが目をすがる。
別の声加わったのは、そのときだった。

「なんだ、知り合いだったのか」

やっと追いついてきたルルーシュと口口に、コナンとスザクはそれぞれ別の意味で表情を引き締める。

いきなり大勢の外国人に囲まれて困惑する蘭をよそに、ルルーシュはコナンに言った。

「……お前、姉がいたのか？」

「あ、違います」

ブリタニア語——もとい英語での質問だったが、簡単な日常会話ぐらいなら蘭にもわかる。

「この子は知り合いの親戚の子で、わたしの家でしばらく預かっていたんです」

「……それで蘭姉ちゃん、今はどこに？」

かなり省略した質問だったが、意図は通じたようだ。蘭はまたスザクを示した。

「ああ、ここって人によつては、すごく住みにくい所みたいね。今はスザクさんが世話してくれてて、とっても助かってるよ」

その発言がどれだけ危ういものかまではさすがにわからないらしい。ようやくブリタニア語で話してくれた蘭に、ミレイが息をついた。

「うーん、あなたスザク君の知り合いなのよね？ だったら、こんな所にいなくて、生徒会室にいらつしやい。話もしやすいから」

生徒会長の言葉で、それは決まった。——数名の、あまり賛同できないメンバーも含めて。

12 思わぬ再会（後書き）

はい、新キャラは蘭でした。本当は生徒会メンバーに空手技かましてからコナンに止めさせたかったんですが、さすがに不憫に思い寸止めで（笑）

蘭の登場は「ちゃんと立ち回らせるの難しそう」とずっと迷っていたんですが、この後の会話をどーしてもさせてみたくて突っ走りしました。

前作で哀ちゃん出したときは抵抗なかったんですけどね。哀ちゃんはコナンの「良き協力者」であり、「頼れる存在」でしたが、コナンの「守るべき存在」である蘭は、下手すると足手まといにしてみうんではなかるうか、と（汗）あと、コナンと哀ちゃんには「幼児化」という摩訶不思議共通点があるので、ギアスとひっかけやすい、というのもありましたね。

そのへんの悩みはまだ解決しておりませんが（おい）、最近蘭を絡めたトンデモ展開を思いついてしまい、それをどーにかやりたくなつたのもありますが。

もし実現できました暁には、また感想など頂きたいと思います（気が早いなあ自分）。

13 思わず出た・・・（前書き）

後書きはただの愚痴です。

13 思わず出た・・・

「へー……じゃああなた、コナン君と一緒に住んでたの？」

一通り自己紹介が済んだあと、ミレイが蘭に尋ねた。他の面々は興味津々に聞き入っている。——なにせ、彼らは米花町でのコナンのことをまったく知らない。

蘭は苦笑しつつうなずいた。

「ええ、まあ。でもこの子、歳のわりにすごくしっかりしてて、助かってます」

「……でも、血は繋がってないの？」

これはシャーリー。

「はい。知り合いの博士に、しばらく預かっててくれて言われて預かった子ですから」

「……では、こいつの両親は何をしているんだ？」

不意に口を開いたのはルルーシュだった。彼の表情に変化はないが、コナンが少し顔を固くする。

可愛い弟のようなコナンを「こいつ」呼ばわりされたことに少しムツとするも、どうやら他のメンバーも気になるようなので、蘭は少ない情報を明かした。

「さあ、よく知りません。お母さんと一度お会いしただけで、その時もあまり話はしてませんから。……それが何か？」

蘭の様子から、とりあえず嘘ではないと判断した彼は、「いや」と答えて続けた。

「君の言うとおり、随分しっかりしているからな。この歳で、両親を恋しがりもしない」

後半は皮肉も込めているんだろうが、コナンには反論もできない。

——コナンの実年齢を知ったうえでの台詞だ。

そんな事情を知るはずもない蘭が、ルルーシュの言葉に反応した。「そうなんですよ。こんなに小さいのに、すごくしっかりしてて。」

逆に、わたしの方がしょっちゅう元気づけられてるんです。いつもそばにいてくれて、わたしが落ち込んでると気付いてくれて――」

「……そんなに落ち込むことがあるの？」

何気ない蘭の言葉尻をとらえたシャーリーが、首をかしげた。「やべっ」というコナンの心の声なんて聞こえるはずもなく、蘭が答える。

「……幼馴染みが、ずっと行方不明なんです。時々連絡はあつて、元気だつていう事はわかるんですけど、……どこで何してるか、全然わからなくて」

せつなげに細められる瞳に、一同戸惑った。慌てたコナンが場をとりつくるう前に、ミレイがいぶかしげに尋ねる。

「何してるかわからないって……仕事か何か？その子、働いてるの？」

「あ、いえ。わたしと同級生なんですけど、探偵やつてるんです。それで、今も多分それで……」

(――!!――)

――息を呑んだのは、はたして誰だったか。

「……忘れちゃえばいいのに」

ポツリと呟いたその言葉は、はじめ、何を言っているかわからなかった。

「……コナン君？」

呼びかける蘭に、コナンはうつむいていた顔を上げた。そのつらそうな表情に、皆が息を呑む。

「忘れちゃえばいいじゃない。蘭姉ちゃんほっぽって、どっか行っちゃってる人のことなんか！蘭姉ちゃんが、どれだけ新一兄ちゃんを心配してるか、わかって……」

言葉は最後まで続かなかった。途中で我に返ったコナンは、「ごめんなさい」と小さく言い置いて、生徒会室を出て行った。

——まるで、叱られた本当の子供のようだ。

13 思わず出た・・・（後書き）

・・・おかしいなあ。このへん3話ぐらいで終わる予定だったのに・・・。

これでも、コンパクトにしようと文章まとめてるんですけど。もちよつと会話させたいペアいるところを削ってるんですけど。ぬゝ

ゝゝ（汗）

あ、ちなみに次からギアスキャラ視点で何話かいく予定です。できるだけあっさり終われるようにがんばります（汗）

14 change the angle for LeIouch (前書き)

続編ということで、ギアスキャラ視点のサブタイトルもちよつと変えてみました。

「……妙なことを言うものだな」

声をかけると、少年は少しだけ反応した。とはいえ、自分と『弟』の存在を認めただけで、すぐに視線をそらす。

「……なんで来たんだ？あいつに色々聞けばいいじゃねーか。オレの弱みを握れば、牽制されることもなくなんだろ」

ルルーシュは、軽く肩をすくめて答えた。

「それも方法ではあるが——どうやらスザクが、お前たちの世界のことには気付きはじめたようだな。それに、お前に直接聞いたほうが面倒が少ない」

「どうだか。——何しに来たんだよ」

明らかに普段と違うコナンの様子に、ルルーシュは一つ息をついて答えた。

「不思議に思ってたな。あの女が言っていたのはお前のことだろう？そして、お前もあの女を大切に思っている——ならば、なぜあんなことを言った？『自分のことを忘れればいい』などと」

コナンはルルーシュを目線だけで睨むと、あたりを見渡した。自分たちのほかには誰もいない。

「……フン。本当に相手の記憶を消しちまったオメーに不思議がれるとはな」

「——！」

彼の顔色がわずかに変わったことを確認して、コナンはやっと顔を上げた。

「あいつを泣かせるのはいつもオレなんだ。一番、笑ってほしい相手なのに……あいつの涙を見るくらいなら、忘れられたほうがマシだよ。……なのに、結局オレはあいつを巻き込んで、危険な目にあわせて、そして泣かせちゃうんだ」

——もし生まれ変わることができたら、君に——。

——俺のせいで、シャーリーは記憶を……。

——いつまでも、ここままだいいけない。すべてが終わったら、きつと君を——。

「……………」

かつて自分自身が心中でつぶやいた言葉がよみがえる。……確か
に、おそらく同じ思いから、実際に相手の記憶を奪ったのは、間違
いなく自分だった。

それを感じとったらしい。コナンはもたれていた壁から体を離す
と、ルルーシュに向かって歩き始めた。

すれ違いざま、大人びたままの声で言った。

「女を泣かせて喜ぶ趣味がねーんなら、あいつには言うな。今の状
況だと、あいつ一人が泣くだけだ」

「……………」

ルルーシュをどもらせる、という偉業を成し遂げた少年は、その
まま来た道を戻っていった。

「あ、コナン君……………」

生徒会室に戻ったコナンは、すっかり子供の仮面をかぶり直して
いた。器用なものだ、と思う。

「ごめんなさい、蘭姉ちゃん」

開口一番、明るく言い放ったコナンに、逆に他の面々が戸惑った。
「僕、蘭姉ちゃんのこと大好きだから、ちょっと新一兄ちゃんに妬
きもちやいちゃってさ。でも、もう変なこと言わないから、大丈夫
だよ」

そついつて笑う少年に、蘭は少し安心したように微笑み、どこか
気まづくなっていた空気は氷解していった。

「コナン君、少しいいかな？」

和んだ空気に乗じて、少年に声をかけたのはスザクだった。以前のような、人の好い笑顔のまま。

一瞬だけ眼光を強めたコナンだが、それはすぐに消え去った。笑顔でうなずくと、少女に一言言っ出て行く。

「……あの、コナン君とスザクさんって、仲良いんですか？」

不思議そうに尋ねるその少女に、一番近くにいたシャーリーが答えた。

「うん、前もよくこのメンバーに混じって、みんなでハチャメチャやってたよ。……まあ、コナン君はスザク君より、ルルの方が好きだったみたいけど」

「……シャーリー、それは誤解だ。単にあいつが俺の住居に住んでいたから、必然的に関わることになっただけだ」

さすがに言い返すルル・シュだが、シャーリーは無邪気に人の弱点(?)をつく。

「あれ?でも、よく仲よさそうに話してたよね?まるで兄弟みたいだって思ったことあるよ」

「……………」

仲良く見えていたのは、互いに牽制しあっているのを気付かれないうちに、お互い誤魔化していたからなのだが。しかし、それをここで言えるわけもないので、ルル・シュは沈黙でもって返した。

「ふーん……………」

どこに納得したのかわからない蘭の相槌は、この際無視して、部屋を出て行ったふたりの動向にしばし思いを馳せる。

——まあ、おそらくはあちらも、牽制のしあいで終わるだろうが――。

自分があの子を思いのほか信頼していることに、ルル・シュはまだ気付いていなかった。

14 c h a n g e t h e a n g l e f o r L e l o u c h (後書き)

執筆復活しといてこの更新のトロさ・・・いつそ、もうちょっと話数ためてから復活したほうがよかったんじゃないかと思いつつ、そんなにためてると作者自身がどこまで書いたかわからなくなるこのアホさ。なんかもう、情けない限りです。

この話を書きたいがために蘭を登場させたといっても過言ではないです。あ、前の後書きで言ってたネタはまた別物です。でもこの書きにくさからいって、もしかしたら出せないかも・・・(涙)

15 change the angle for Suzaku (前書き)

今度はスザク視点です。

「一つ、聞いておきたい事があるんだけど」

開口一番、コナンはいやに鋭い視線をスザクに向けた。

「——ナナリーさんは、今どこにいるの？少なくとも……」

「……………」

万一の事態をも想定しているらしいコナンに、スザクは一つ息をついた。

「ご無事だよ。今は本国にいらっしゃる。とはいえ——もうすぐ、君自身も姿を見られるだろうけどね」

どうやら随分と息をつめていたらしく、安堵のため息をもらすと、コナンは思わずといった風に呟いた。

「そう……か。敬語を使つてるところからして、皇室に戻ったの？」

「ああ、あの後すぐに皇族に復帰されたよ。公表はされていなかったけどね」

「……しかも、もうすぐこの『エリア11』に派遣されるみたいだね」
段々、視線がまた鋭くなってきたコナンに、スザクも緩んだ口許を締める。

「それは——おいおいわかるよ。残念ながら、まだ公表されていないから。君だけに教えることはできないな」

「ふーん。それで？彼女はゼロの正体知ってるの？」

適当な椅子を出して座るコナンに、スザクも反対側に腰掛ける。

「いや、彼女は何も知らないよ。ゼロの正体も、その理由も。ついでに、彼女にとって彼は今、音信不通の生死不明だ」

「……………」

一気にしかめっ面になったコナンは、足を組むと、わざとらしくスザクから視線をそらした。

「つまり、彼女もまた『籠の中の鳥』ってわけだ。兄を奪われて、知らないうちに人質にされて、一番信頼してた人には嘘ばかりつ

かれて——なんか、散々だね。彼女自身は、何もしてないのに」

そして、まっすぐな視線をスザクに戻す。

「そして——兄がまた反逆者になったとわかった日には、理由もわからず殺されるのかな。それも、兄の友人として信じてた人に——ホント、兄を恨めってレベルじゃないね」

スザクは無意識にコナンから顔をそらし、話題を変えた。

「……教えてくれるかい？君がいた世界のことを」

コナンは表情を和らげると、肩をすくめた。

「……さすがに、蘭姉ちゃんの話で不審に思ったよね。」

——僕たちがいたのは、ことは違う『東京』。日本は第二次大戦の後は一応どことも戦争はしてなくて、植民地にもなっていない。ブリタニアっていう名前の国はなくて、アメリカっていう名前のその超大国は、別に侵略主義でもなんでもない。少なくとも、表立ってどこかを支配下にはしてないし、最近は友好路線になってる」

他にも、ブリタニア人とそれ以外を差別するような事もないし、日本人は日本人として自由に電話も旅行もできる……、コナンの口から語られる『日本』の話は、にわかには信じがたいことだった。「……じゃあ、君が前にもってた携帯電話は——」

「真正正銘、僕のだよ。まあ、あのときは信じてもらえとは思えなかったからばかしてたけど。蘭姉ちゃんも持ってるし」

しばし言葉を失っていたスザクだが、とある事実思い至り、顔をしかめた。

「彼は……ルルーシュは、君の世界のことを……」

「知ってるよ。あっちにはギアスっていうありえない力があるから、意外にすんなり信じてもらえた」

ついでに、もう一つのありえない現象も——と、コナンが心中だけつぶやいたことをスザクは知らない。

「——スザクさん、蘭姉ちゃんを守ってくれる？」

ふいに真剣な眼差しになったコナンに、スザクも目を細める。

「……君は、ここに残るのか？」

言外に、蘭は連れて帰れ、というコナンに、少々意外な気持ちで問い返す。ひどくつらそうな表情のまま、コナンはうなずいた。

「僕は、これから自分にできる事をする。それは、スザクさんの助けにもなるかもしれない。そのためには、政府側の傘下さんかにいると不都合が起きると思うんだ。でも…蘭姉ちゃんには——」

話すコナンは、さつき蘭本人の前でみせたと同じ顔をしていた。

……叱られた子供の顔。

「危ないことはしてほしくない、安全な所にいてほしい…か。気持ちわかるけど……」

そこで、スザクはすいと目を細めた。

「——君はまさか、黒の騎士団に入るつもりかい？」

予想範囲内の質問だったらしく、コナンは驚くこともなく答えた。「可能性はあるね。完全に彼らの味方になるつもりはないけど。場合によっては、スパイにもなると思うよ」

スザクに協力する可能性はある。だから、邪魔はするな——。

「……君は一体……」

年齢不相応のその提案に、スザクは無意識につぶやいていた。少年は苦笑して答えた。

「いつか、話すよ。話せるときが来たら」

いやもうほんとトロトロ更新……。昨日とかもページのぞいて下さった方々、ごめんなさいです。

仕事関係のゴタゴタ(という程でもないが)に、介護問題まで持ち上がり、昨日も帰宅したの9時半で……。眠いよ。家族いるから執筆しづらいし。

お年寄りが体調を崩す様は釣瓶落としのようですね。先週まで自力でトイレ行ってたのに、今はオムツ大活躍ですよ。年末には豪勢な年越し料理を作っていた人が……。

脱線しましたが、これも書き直しまくりました。まるまる書き直したのが2回、プラス前半2回、後半1回ぐらい。もうこの2人が対決(?)していると、本編丸無視で話が進んでしまうので「こりやアカン」が何度あったか。なにせ、ナナリーの安否についての話をすっかり忘れておりましたからね……。 (汗) 話が所々ぶった切れているのはそういう訳です。

次からは、場面ぶつとびまくりの歓迎会入ります。

16 change the angle for Rolo (前書き)

ギアスキャラ視点での話が続けております。

後書きは執筆裏話・・・とは言えない拙い徒然草です（↑失礼にも程がある）

『お待たせしましたっ！只今より、ナイトオブセブン歓迎会を始めます！——主賓、挨拶』

いつも通りの騒がしい挨拶とともに、ミレイがスザクにマイクをふるのを、ロロはかなり冷めた気持ちで見ている。

——もはや、彼はロロにとってただの上司ではない。

スザクが、なぜか猫の鳴き真似で自らの歓迎会を始めるのを見届け、ロロは兄とともにステージを下りた。

もちろん、この歓迎会での仕事のためだ。

「世界一のピザ」などという、どこか滑稽なイベントのために、兄と一緒にジャガイモを運ぶ。向かう先は、まな板が用意してある校舎はずれのコンテナだ。

——すると。

「……なんで、オメーがイモ運び係？」

現段階でロロがもっとも苦手とする少年は、自分たちの姿を見つめるなり、呆気にとられたような顔になった。対する兄は動揺するふうもなく。

「この歓迎会で1番のイベントのために、副会長である俺が手伝うのは当然だろう。料理なら、昔から慣れているしな」

「ふーん。……それだけか？」

いきなり探るような視線になった少年に、ロロは内心逃げ出したくなった。

「他に何があるんだ？今この学園にはスザクがいる。一応おまえもな。ここで仕掛けても、あいつに望む答えをやる結果になるだけだ」

「……」

「では行くぞ。これを全部切らなければならぬからな。——ロロ」

「……うん」

兄に促されて、ロロは歩を進めた。後ろから鋭い視線を感じる。ただ、それは殺気とは無縁のものだった。

——そう、あの少年はいつも探るような鋭い目でこちらを見るが、殺意の類はまったくない。それは、ロロにはひどく不自然なものだった。

「——そうか。話してくれてありがとう、ロロ」

自分のギアスが抱える弱点を聞かされ、わずかに顔をしかめた兄は、すぐにいつもの優しい顔に戻ってロロの頭をなでた。

「そんなものを抱えて、よく今までがんばってきたな。……でも、もう心配ない。俺は、お前にもう危ない真似はさせない。お前の未来は、必ず守ってやる」

「……うん」

うなずきながら、わずかに呟く。こんな反応しかできない自分が恨めしい。

そう、ナナリーなら——あの少女なら、華やかに笑ってみせる事ができるだろうに。……しかし、今ここにいるのはあの少女ではない。兄をこれから支えるのは、自分だ。

「じゃあ、俺は少し打ち合わせをしてくるから、お前は歓迎会を楽しんでいてくれ」

そういつて立ち去りぎわに携帯電話を取り出したルルーシュは、おそらくは騎士団の誰かに電話するのだろう。それを複雑な気持ちで眺めながら、ロロは歩き出した。

といって、特に見たいものもない。とりあえず司令部の様子を見てこようか、と思ったその時。

「あ、丁度良かった」

斜め後ろからかった声に、ロロはぎくりとした。

——そこに立っていたのは、思ったとおり、あのコナンとかいう少年だった。

16 c h a n g e t h e a n g l e f o r R o l o (後書き)

今度は口口視点での話です。書いたのが随分前なので、投稿前の確認で作者自身ビックリしたという情けなさ(笑)

いやね、実はギアスキャラ視点での話はもうちょつと後から始まるはずだったんですけどね。前2話も、最初はコナン視点で書き始めたんですよ。それが、書いてるうちに「・・・これってこっちの視点にした方が面白くないか?」と思い立ち、今に至る、というわけで。そのギアスキャラ視点第一話になるはずだった話は、もう書いて保存してあるんですけどね。多分5話くらい先の話になるんじゃないかと。

しかし、あの歓迎会もシーンが飛びすぎてすごい書きづらいです(苦笑) 現在、あの10秒くらいの水泳部シーンをこねくり回しております。さて、どうなることやら(笑)

17 籠絡された少年（前書き）

サブタイトルが本気で難しい・・・（汗）
後書きは、ギアスご存知の方でないといわからなさそうな部分あります。

17 籠絡された少年

「お仕事してた？だったら、後でもいいけど」

「……いや、もう終わったから。兄さんなら——」

「ああ、違う違う」

即座にルルーシュの話にしようとするロロに、コナンは苦笑した。……まあ、今まで彼を通してしかロロと接していないので、当然といえは当然かもしれない。

「一度、お兄さんのいない所でお話したくてさ」

動揺が面白いくらいに表情に現れた彼に、少し気まずさも感じながらも、コナンは去ろうとはしなかった。

——彼には、確かめておかなければならないことがある。

「……話って何？」

祭りの喧騒から少し離れたある校舎の脇で、なぜか携帯電話を取り出して見つめるロロに、コナンは切り出した。

「……ロロさんは、彼の——ルルーシュの味方？」

静かな声で問いかける。多分、ロロにはただ尋ねているのか問いつめているのか、わからないはずだ。彼は困惑そのものの顔で、どう答えるか迷っているようだった。

「……それは……」

言葉を濁らせるのは、ルルーシュに黙って話すことへの不安や罪悪感か、それとも——。

「……じゃあ、質問を変えようか。彼は、ロロさんのことを何て言うてた？」

「え？」

初めて、ロロがまっすぐにコナンを見た。純粹に驚いている、といった表情だ。

「記憶が戻って、妹さん^{ナナリー}のことを思い出したとき、ロロさんのこと

はどう思ってるって言った？」

「……僕を、弟だって」

今度は、割とすんなり答えが返ってきた。その表情は、母親に褒められた子供のようだ。

「僕と過ごした時間に、嘘はなかったって。僕を、守る、って」

「———そっか……」

（……予想はしてたけど、これは……）

どこかの映画かと思ってしまうその展開に、コナンは内心頭をかかえた。

ルルーシュは、ロロを甘い言葉で籠絡ろうらくしたんだろう。少なくともコナンの知るルルーシュなら、ナナリーを自分から隠し、しかもずっと監視していた人間に、わだかまりこそあれ、好意を持つとは考えにくい。

「———結論から言っとくけど、それ、多分嘘だよ」

「……っ！」

一瞬で顔を強張らせたロロに、コナンは多少安心しながらも続けた。

「ロロさんは、立場からも能力からも、あいつにとって使い勝手が良い。その様子からすると、他の監視の人たちは、もうギアスをかけるなりなんなりしてるんだろうね」

「……」

ロロに浮かんだ微妙な表情が少し気になったが、コナンは話を続けた。

「彼がゼロになった経緯やブラックリベリオンのこと、聞いてるよね。彼は、特に大切な人物以外は、守るどころか利用する対象だろうからね。スザクさんが彼を追い詰めた時も、まだ租界は交戦中だったろうに、彼は部下を見捨てた。その結果が、今のこの状況でも

あるしね。

……僕の言葉を信じるのは難しいかもしれないけど、あいつのこともあんまり信用しないほうが良いよ」

「……っ違う。兄さんは……」

「そうやって彼を無意識に兄さんとか呼んじやう事自体、術中にはまってるって事なんだけどね。とにかく、自分でよく考えて、何でもすることだよ。彼を信用しすぎないこと……それがロロさんのためだよ」

強い口調で言い放った言葉に、ロロはやっぱり戸惑った表情で沈黙を貫いたが、コナンは構わず踵^{きびす}を返した。——今は、彼がこれ以上洗脳されないことが重要だ。

ただ、この言葉が、後にコナンの知らないところで暴走したのかもしれない。——『自分で考えろ』というには、ロロは『当たり前前の教育』をされていなさすぎた。

17 籠絡された少年（後書き）

コナンと口口の掛け合いは結構好きだったりします。でも、思い込んでる人に「それは違うよ」と言うのは、本当に大変なんですよね。コナンがあんまり強く出られない理由は、作者としては当然「展開に影響してしまうから」ですが、コナンとしては「確たる証拠が示せないから」です。「あなたは籠絡されているんだよ」というのを証明するのは、とても難しいと思うのです。ましてや、コナンは「ルルーシュが一度は口口を殺そうと、グラストンナイツを使って画策した」ことも知りませんからね。こればかりは物的証拠があるわけでもないのです、コナンは説得止まりです。

そーいや、グラストンナイツは気の毒だったなあ。憎い敵に利用されまくり（哀）

18 仕掛け

その2人を見つけたのは、偶然だった。

校舎のまわりをぶらぶら（一応警戒して）歩いていたら、妙に目を引く光景が視界に引っかけた。

——目だけをくり抜かれた紙袋（？）をかぶせられた少女。それだけでも十分目立つが、コナンがもっと驚いたのは、その少女の同伴者だった。

（——ルルーシュ！？あいつ何して……）

一瞬かなり混乱したコナンだが、その少女の長い髪を見て納得した。新緑の髪——。

「……なんで、CCさんがここにいるんだ？」

こっそり近づいてジト目で睨んでみれば、ふたりはかなりわかりやすい反応を示した。ルルーシュはかなり鬱陶^{うつとう}しそうに目をすがめ、CCは面白そうにふっと一笑した。

「やはり来ていたか。あのとき感じた気配は、お前のものだったわけだ」

「あのとき……？」

「中華連邦の総領事館に潜伏中、妙な気配を感じてな。覚えのある感覚だったから、予想はしていた」

「……で、今日はどうしてここに？確か皇帝さんに追われてるって……」

「その話をしようと思ってな。この女、立場もわきまえずにのこのこやって来たらしい」

不機嫌な顔のまま、ルルーシュが言葉を続ける。コナンは一つ息をつく。

「じゃ、オレは他のところ見てくるよ。CCさん、また、ね」

ふたりは目を丸くした。コナンはズレかけた眼鏡をおさえつつ、言葉を続けた。

「ついてたつて、どーせ詳しい話はしてくんねーだろ。だったら、情報は自分で集めるよ。ここにはスザクさんもいるしな」

ポンと、彼の制服を軽くたたくと、コナンは背を向けた。そのまま去っていく様子をふたりは、怪訝そうな顔で見つめていた。

『——お前、自分の立場をわかっているのか』

『皇帝が私を狙っている。……お前を餌にして』

「よし……感度良好」

クラブハウスに戻ったコナンは、眼鏡の縁についているボタンをいじっていた。さつき、さりげなくルルーシュの制服のポケットに滑り込ませた盗聴器。

『それにスザクもいるし、それにもう一人、ギアスの効かない女が』

『——』

「……ん？誰だ？……後で、カマかけた方がいいかな」

『……で？皇帝にギアスを与え、スザクに教えたのは同じ人間なのか？』

『……そうだ。しかし、これ以上知ると——』

『もう巻き込まれている』

聞こえてきた会話は、ずいぶんと意外なものだった。

（てつきり、もっとお互い信頼してるのかと思ってたけど……。待てよ、確かCCさんはあのとき——）

言っていた。「自分は共犯者だ」と。つまり、仲間でも同志でもない——お互い、そういう認識なのか。とはいえ。

（オレが知ってる「共犯者」たちより、よっぽどうまくいつてる感じだな）

コナンも、探偵として「共犯」して罪を犯した人間達はたくさん見てきた。しかし、あの2人はもっと……。

『……VV』
フイツー

続いた会話に、コナンの思考は戻される。

(……CCさんと同じ系統の、イニシャルの名前……?)

『スザクにもギアスを?』

恐ろしいことを尋ねるルルーシュにコナンは顔をしかめる。けれど、それは恐らく……。

『いや、それはないようだ』

「だろうな……。彼がギアスを使えるんなら、オレにあんなカマかける必要ねーし」

カマをかけるということは、心を読むような類の力じゃない。それなら、コナンでも何とかなる。

『ルルー!』

唐突に聞こえてきたシャーリーの声に、コナンは盗聴器のスイッチを切った。これ以上、今は聞いても仕方ない。

『ギアスの効かない女』——それが、さしあたっての手掛かりになるはずだ。

18 仕掛け（後書き）

このへん、本気で場面すっ飛びすぎです。どーつなげりゃいいんだ
よ状態です。

最近またDVD借りたんですが、覚えてらんねー（汗）
アッシュフォードの校舎の配置とか見取り図とかが本編に出てない
のがせめてもの救いか……。設定画とかはありそうですが、気に
しない気にしない（笑）

歓迎会編（？）すみませんがまだまだ続きます。

19 ハブニング

何事もなかったようにクラブハウスを出ると、外はさっきまでと違った賑やかさになっていた。どうも、予定されていた「巨大ピザ」作りに使うナイトメア（ここでナイトメアを使うところにカルチャーギャップを感じる）が走り出したらしい。

何気なくその光景を目にしたコナンは仰天した。猛スピードで走るナイトメアの行く手に……猫が走っている！

「な、何やってんだあの猫！」

（つていうかあの柄、どつかで見たような……）

なんて事を考えながら走り出したコナンだが、走るナイトメアを止めるような道具はあいにく持っていない。

『さあ、パレードのルートに出たようです。校舎を回ったあと、こちらにやって来ますよ』

のんきなリヴァルのアナウンスに顔がひきつるが、幸い猫に気付いた人は他にもいたらしい。今までどこにいたのか、スザク、ミレイ、シャーリー、なぜかルルーシュが追いかける。途中でバテたらしいルルーシュを他所に、コナンも全力で走り出した。

猫に気付いていないらしいナイトメアは、持ち上げたコンテナをぶんぶん振り回している。「シェイクタイム！」とか聞こえる声は、コナンには聞き覚えのないものだった。

すっ飛んできたのは、スザクだった。ステージに到着寸前で横から猫を抱え飛ぶその反射神経は、軍人の域を微妙に超えている気がする。ついには司会（？）に立っていたリヴァルまでも押しつけたそのナイトメアの主は、決まっていただろう段取りをすっ飛ばす勢いでコンテナの中身をぶちまけた（どうやら、大量のトマトだったらしい）。

しかし、（何のために用意したのか）タイミングよく立ち上ったガスに、ステージは結局はスモークに包まれた。ピザはどうなった

んだ、と思った人間は、コナンを含め多いはずだ。

「あーあ……」

大事そうに猫を抱え、木に登っていたスザクに、コナンはゆっくりと近づいた。

「……誰だったの？あれ。ナイトメアをあんな猛スピードで動かす人なんて——」

「ああ、僕の同僚。どうも、遊びに来てたみたいだ」

スザクの同僚ということは、例の『ナイトオブブラウズ』というやつか。ずいぶんと大胆な性格の持ち主らしい。

スザクは呆れ顔のまま、腕の中の猫をなでながら答えるが、次の瞬間うめいた。そして、その元凶の猫はそのままひとつ飛び、スザクを残して地上に戻っていった。

「なんで無用心に指なんか噛まれるかな……。あの猫、スザクさんの？」

「ああ——君はアーサーを知らないのか。生徒会で世話してた猫なんだけど。……ところで」

彼は木から下りると歩き出したが、不意にコナンを振り返ると、続けた。

「これから、彼に確認するよ」

「……お好きなように」

コナンの返事に眼光を強めた彼だが、それ以上は何も言わずに去っていった。

クラブハウスに戻る道を歩くコナンだが、不意に何かにぶつかってよろめいた。

「ごめんなさい、僕——」

見上げた先にいた彼女はふっと笑うと、何かを放り投げる。慌てて受け取ったコナンが何か言う間もなく。

「『これ』は返しておくぞ。手際はよかったがな」

それは、さつき仕掛けた盗聴器だった。

「……なんだ、バレちゃったのか」

素直に悪態をつく、CCは「残念だったな」と皮肉っぽく笑った。

「これからどうすんだ？」

「総領事館に戻るさ。私がここにいることは、ルルーシュには都合が悪いからな」

いや、アイツだけじゃねーだろ——というコナンの心中の声を尻目に、彼女はさっさとコナンに背を向けた。どうやって戻るんだ、とまた心中ツツコンだが、それには解決策があるようだった。

本校舎の脇を通りがけると、およそこの場に似つかわしくない光景があった。

褐色の肌にシルバーの髪を束ねた。おそろしくスタイルのいい女性。年恰好からして教師だろうが、何やら深刻な顔で考え込んでいた。

「どうしたの？」

英語で話しかけてみる。女性ははつとして振り返ったが、出てきた言葉は意外なものだった。

「なっ、お前イレブン！？——黒の騎士団か！？」

「……そういうお姉さんは、軍の関係の人？」

凶星だったらしい。彼女は言葉につまると、目をそらした。

「……何故わかった？あの男……ルルーシュから聞いたのか」

「いや？ただ、この場に日本人がいるってだけで『黒の騎士団』を連想するのって、ちょっと変でしょ。僕の歳からしても、普通は、まず『迷子か』とか思うところだから。」

そういう発想をするのは、この学校に騎士団の関係者がいることを知っている人——つまり、彼を監視してるグループの人かなって思ってたさ」

「……………」

19 ハプニング（後書き）

いつもよりかなり長くなりました。とりあえずCCとは会ったという
ヴィレッタとも面識は持たせたいと思っただけになりました。

ヴィレッタとは後々ちよつと書きたいシーンがあるので、とりあえず
会わせようと思ってたんですが、「面識がある」程度の関係にする
のは難しそうだ・・・。

なんかこのへん、すぐRPG風味全開な感じですね。あの人と会
ってこの人と話して、と。もっと物語的な流れをつくりたいんです
が、やっぱり簡単にはいかんなあ（汗）

20 次への電話

陽もすっかり落ちた頃、なぜか屋外ダンスパーティーが始まった。グリム童話の王子王女のような格好の生徒たちが集まり、思い思いに体を揺らしている。なぜか上機嫌で金髪の長身の少年と踊るミレイと、それを残念そうに見ながら踊るリヴァルに苦笑しながら、コナンは学園のあちこちを回っていた。

（アイツ、どこ行きやがったんだ？）

——そう、さっきからルルーシュが行方不明なのだ。ロロもいない。

眼鏡に内臓された「赤外線望遠機能」であちこちをクローズアツプしながら探しているうちに、「もしかして」と思い、目を向けた先に、「彼ら」はいた。

ダンスパーティーをしているすぐそばの建物の屋上に、ルルーシュがいた。その後ろにはスザクも。しかし、なぜかルルーシュは驚愕したような表情を浮かべたあと唇を噛み、後ろにいるスザクを横目で睨みつけた。

（……何かあったな）

コナンでなくてもすぐにわかる。だいたい、2人で話しているなら、ルルーシュがスザクに背を向けていることがおかしい。

しかし、状況はすぐに変わった。ルルーシュが背後——恐らく屋上への階段がある方を向いて何か話したあと、手にしていた携帯電話で必死に話しかけ始めたのだ。

コナンは顔をしかめた。どうも様子がおかしい。

（アイツがあんなに必死になるような相手……ってことは、まさかナナリーさんか？）

しかし、これも妙なことに、少しの間そうやって話したあとは、何事もなかったように普通に話し始めた。そして通話を終え、その

電話をスザクに渡した。——いや、元々スザクのもので、返したのか。

それから、2人は「普通の友人」のように戻り、やがてそこから姿を消した。

コナンは眼鏡の機能を消し、クラブハウスに戻った。どうせ、待っていればあの2人は戻ってくるだろう。

彼が戻ってきたことは予想通りだった。……まあ、ここに住んでいるんだから当然だ。

ただ、その表情はまったく予想外だった。

今にも暴れだしそうな、怒り狂ったような表情。……正直、初めて見る顔だった。

「……何かあったのか？おめーが取り繕えないくらいのことか」

一応尋ねてみる。しかし彼は顔をさらに強張らせただけで、コナンから顔をそむけて答えた。

「……ナナリーだ」

「え？」

彼はぎりつと音が聞こえるほどに歯を食いしばり。

「次の総督は、ナナリーだった」

ただそれだけを言って、自室へと入っていった。

20 次への電話（後書き）

やっと夜になりました（苦笑）。1話の、それもBパートだけで何話使ってるんだって話ですよ、ホント……。でも、あれは本編もふっ飛ばしすぎだと思っんですよ。普通のアニメなら、あれだけで1話は使ってたと思っんですよ。

・・・とまあ、愚痴はこれくらいにして、もう一つ投稿しますね。毎日たくさんアクセス、本当にありがたいです。

（―――まただ）

壁でも殴りつけたいのを何とかこらえ、ルルーシュはベッドに勢いよく腰かけた。スプリングが嫌な音をたてる。

膝の上で手を組み、顔をうずめる。その手は、激情に震えていた。

また、あの男は踏みにじった。利用した。自分の大切なものを。

最初はある時―――8年前だった。母を亡くした直後、謁見した自分に父……皇帝が言い放ったあの言葉。

『お前は生きたことが一度もないのだ。然るに、何たる愚かしさ！』

『死んでおるお前に権利などない。ナナリーと共に日本へ渡れ』

今ではもう信じられないくらいだが、父のことは尊敬していた。慕っていた。

けれど、父は自分たちを―――自分と母と妹を、切り捨てた。使えなくなった駒として。そして、ただ捨てるだけでは飽き足らず、外交の道具として利用した。

それを実感したのは、日本でようやくと落ち着いた後―――あの日本侵攻のときだった。なんの前触れもなく、気付いたら空を染めていた母国の戦闘機群に、感じた怒りはその軍隊に対してではなく。

―――母国そのもの。父が君臨するブリタニアそのものを心から憎んだ。

そして、今度はナナリーだ。愛しい妹を、あの男はまた利用した。目も足も使えないナナリーなら日本人の同情をひける。恐らく、騎士団の人間はそう思う。けれど、それだけではない。

この自分への人質。自分の一番のアキレス腱であるナナリーを、今度は総督として送り込んだ。

（また、あの男は俺の大事なものを奪って―――）

母やナナリーの記憶を奪い、生きる理由を奪ったあの男は、今度はそれを取り戻したかどうかを探るためにナナリーを使ったのだ。

「……一体、どれだけ俺の大事なものを踏みにじれば……っ」
気が済むのか。あの男は。

時間にして数分、過去に思いを馳せたルルーシュは、立ち上がった。迷いのない足取りでパソコンへ向かうと、起動して操作を始めた。

ナナリーをこの手に取り戻す。絶対に、あの男の思うようになどさせない。

（必要なのは、その正確な日取りと、こちらに来る航路と——）
カタカタとパソコンを操作するその端正な横顔…その紫色の瞳には、すでに普段どおりの光が戻りつつあった。

これは結構前に書いて、投稿を楽しみにしてた話です。

かなり前にやってた爆笑問題司会のバラエティの、「一度はやってみたかった」というすっげー下らないコーナー好きだったんですけど、そんな気分です。いや、そんな大それた挑戦じゃありませんけど。

にしても、2期は場面が超特急で、こういうのを書きやすいといえは書きやすいです。本編であんまり細かく出されるとコナンが入る隙もなくなっちゃいますし（笑）

22 Change the angle - under water - (前)

コナンの知らないところで、何やら動きが。

他に誰もいないその空間で、彼はふいに口を開いた。

「——妙な子供？確かお前、前にもそんなことを言っておったな」
言葉の反響の余韻よゐんが消えたころ、また彼は口を開いた。

「……そうだ。ブラックリベリオンのとき、『兄さん』が言っておった。妙な気配のする少女に会ったとか……。関係があるのか？」
答えはない。が、しばしの沈黙の後、彼はふつと笑った。

「ほう、仲間と。……それで？それが、わし達の計画に、なんの関係がある？」

またしても、沈黙がおりた後、彼はふいに、元々いかつい顔をし
かめた。

「ギアスも持たぬただの子供が、わしらの邪魔をし得ると思えん
が……まあ、出る杭を打っておくに越したことはないな。それで？
お前によい案でもあるのか？」

今度は少し長めの沈黙の後、「ん？」と声をもらした後で。

——神聖ブリタニア帝国代98代皇帝、シャルル・ジ・ブリタ
ニアはまた、顔をしかめた。

「……あの子供が、どうかしたのか？」

ただひとりしかないその部屋で、CCはお気に入りのぬいぐる
みを抱え、髪を一房ひと房もてあそびながら呟いた。無表情だった秀麗な
顔が、わずかに不機嫌そうなものになる。

「——そんなわけがないだろう？あいつの望みは、せいぜいが今起
こっている戦争を止めることだ。お前達の計画に感づくような余裕
はないぞ」

CCはしばらく沈黙したが、その表情は誰かの言葉を聞いている

かのようなだった。

そして、彼女は小さくため息をついて、その『誰か』に応じた。胸の中のぬいぐるみをぼんぽんと叩いてから。

「そんなに心配ならば、好きにするがいいさ。ただし、忠告しておいてやる。ギアスを使ってあの子供に何か仕掛ければ、目下ルルーシュと枢木スザク（くわぎ すざく）に向いているあいつの警戒が、一直線（ストレート）にお前たちに向くことになる。わざわざ相手を増やすことになるのは、お前たちだ。あの子供——敵に回すとなかなか厄介だぞ」

色々な意味でな——とは、彼女は声に出さないでおいた。

誰かが笑ったような気配が消えたあと、CCはもう一つため息をつき、瞳を閉じた。

だいが前に書いたっきりのシャルルパパ、ほぼ初登場です。このへんは、本当に手探りの執筆になります。当初は、もっとはっきり伏線張る予定だったんですが、突き詰めて考えていくとなにやら「こまけーこたぁいいんだよ」状態になりそうなので、一応保険かけてます（笑）

どうも、思いついた通りの展開ではいけなさそうな気がしてきました・・・。またDVDレンタルする必要があるそうです（2、3枚持ってるんですけどね。さすがに全巻買う度胸はないです。コナンですら全部持っていないんです汗）

23 安全、保障

『新総督の名前や経歴は、依然伏せられたままです』

代わり映えのしないニュースに、コナンは一つ息をついてテレビのチャンネルを変えた。

ここ2、3日、ニュースは「もうすぐ赴任する新総督」「黒の騎士団をかくまっている中華連邦の総領事」というふたつの話題で占拠されていた。とはいえ、別に目新しい情報があるわけでもなく、識者が推測や憶測を語るだけで、中身のあるものではなかった。

「どんな人なのかな、新しい総督って」

シャーリーの何気ない言葉に、ふと思ったコナンは尋ねてみた。

「そういえば、前の総督さんって、どんな人だったの？コーネリア皇女さんの後、ずーっといたんだったよね？」

答えたのはミレイだった。

「すごく厳しい人よ。毎週のように、テロリストを捕まえては公開処刑してね。まあ、テロリストが悪いにはかわりないんだけど、あれもう治安がどうっていうより、趣味嗜好しゅみこうじょうの域だったと思うわ」

「結局、あの人もゼロに敗れて、戦死したらしいですね」

平然と言ったのけるのは、おそらく殺した本人であろうルルーシュだ。いつぞやの激怒はとりあえず静まったのか、割と冷静にニュースも見ている。むしろ、その様子を不安そうに見つめる口口のほうが不審だ。

「――で？どーすんだ？ゼロとしては」

コナンの部屋の椅子に座るルルーシュに、とりあえず尋ねる。：

「まあ、答えはわかりきっているが。」

「無論、助け出す。わざわざ、向こうからナナリーを差し出してくれるんだ。このチャンスに逃す手はないさ。今度ばかりは、縛り付けてでも邪魔はさせない」

コナンは一つ息をついた。

「『今度ばかりは』、邪魔する気はねーよ。どう考えても、ナナリーさんはオメーが保護したほうが安全だ。ブリタニア側は、スザクさんですら、ナナリーさんの命は保証できねーだろーからな……」

いつゼロの正体が軍に知られ、彼女が危険にさらされても不思議じゃない。そして、今現在、スザクがナナリーを傷つけないという確証もない。なにせ、あれだけ平和を愛していた主君ユーフェミアを亡くし、軍を辞めるどころか出世して、以前よりさらに強力なナイトメアを駆っている彼だ。

ルルーシュはわずかに沈黙したが、話を続ける。

「では、口口と共にここに残れ。留守番を頼む」

おそろしく違和感のある台詞に慄然とするコナンだが、あることに思い至って首をかしげた。

「……あれ？ そういや、この学校に付けられたカメラは全部切ったのか」

ルルーシュは涼しい顔で返す。

「いや、まだついているさ。外すとスザクに気付かれる。とはいえ、機密情報局の人間は全員掌握しているから、意味はないがな」

「……………」

「お陰で、そのコントロールルームをこちらの地下司令部として使える。スザクへの目くらましにもなって、一石二鳥というやつだな」

「あの女の人もか？ 褐色の肌に銀髪の……………」

「……ヴィレッタに会ったのか」

チツと舌打ちするルルーシュ。しかし、すぐに涼しい顔に戻った。

「あの女には、一度ギアスをかけているから、二度は通じない。かわりに、決定的な弱みを握ってやってからな。問題はない」

それは、彼女の話とも一致していた。

「なんなんだ？ その弱みって」

ルルーシュはしばし沈黙考したが、やがて口を開いた。口許には笑みを浮かべている。

「あの女は、黒の騎士団の幹部と通じていたのさ。本人にはそのつもりはなかったようだが、関係ない。軍やスザクにそのことが知られれば、まず破滅だ」

「……へえ。そんな人には見えなかったけど」

呟くコナンには構わず、ルルーシュは立ち上がり、コナンに背を向けた。

「とにかく、このクラブハウスのことはお前に任せる。せいぜい、うまくやってくれ」

わりと無責任な言葉を残し、彼は部屋から出て行った。

23 安全、保障（後書き）

毎日誰かしらこれをチェックして下さる方々がいて、有り難い反面、申し訳ないです……。今回なんぞ2週間も空けてしまいました（汗）

今は私事でもちよつといっぱいっぱいなので（これも私事には違いないが）、更新頻度はなかなか上げられませんが、暖かく見ていて頂けたら幸いです。

気が向いたら、感想の一つも送ってやって下さい（あんまりズバツと言われると凹みますが。笑）

24 人形ではいけない（前書き）

更新遅くてすみません。毎回アクセス数を見るたびに、申し訳ない気持ちでいっぱいです（汗）えっと、更新は基本週末と想っていただければいいかと思ひます。ペースはなかなか上げられませんが、いつもアクセスして下さって本当にありがとうございます。

あ、スザク好きな方は後書き読まれないほうが賢明です。

24 人形ではいけない

インターホンが鳴ったのは、明け方のことだった。

眠ってはいなかったものの、コナンは不審に思いつつ玄関に向かう。同じように起きていたらしい口口が階下に降りてくるのを見つ、扉を開けると。

「——カレンさん……一体どうし」

言葉は途中で途切れた。カレンが背負ってきたのは、ゼロ衣装のままのルルーシュだった。どうやら、意識はないらしい。

「……何がどうなったの？どこか怪我は？」

動揺したのは一瞬だった。即座に尋ねつつ、適当なソファに寝かせた彼の状態をチェックする。見たところ、打ち身や擦り傷はあちこちにあるが、大した怪我はないらしい。

「新総督を捕虜にするって作戦で、……失敗したのよ。ルルーシュは主力艦に潜入したんだけど、救出に手間取って……」

「新総督」という言い方をしているところを見ると、カレンはそれがナナリーだとは知らないらしい。

「……とりあえず、呼吸も脈も正常。傷はこっちで手当できるから、カレンさんはもう行きなよ。ここにあんまり長居するの、ヤバいんじゃない？」

冷静に提案するコナンに、カレンは沈黙する。やがて。

「……君が、ほんとうにまた、ここにいるとはね。CCから聞いたときは、まさかって思ったわ」

「そっちこそ、よく彼にまたついてく気になったね。知ってるの？彼の正体」

ルルーシュの体を調べる手を止めて、コナンはカレンを見据えた。彼女は、まっすぐにコナンを見返した。

「……私達のリーダーは、彼しかないのよ」

「……さて、こんなところか」

ロロの協力を得て（時には伸縮サスペンダーを使って）、ルルーシュを自室に運び、ベッドに寝かせる。

大丈夫だろうと思ったが、ロロは付き添うといって聞かなかった。

「君は、よくこんな手際よく手当てできるね」

「まあね。昔からケガはよくしてたし、それなりに医学知識もあるから」

「……いいな」

ポツリともらしたその一言に振り返るも、ロロは兄から目を離していなかった。

「僕も、暗殺以外のなにかを身につけられたらよかったのに。そうしたら、こんな時……兄さんの役に立てたのに」

「……」

返事を期待しての言葉ではなかったらしい。ロロはやっぱり彼から目を離さず、続けた。

「兄さんは僕がみているから。君はもう休んだほうがいいよ」

気になるのは、ロロのルルーシュへの依存度だった。

（……これは、良い兆候だと思っただけなのか？）

相手を心配し、役に立ちたいと考える。良い事だ。けれど、「絡された」状態には変わらない。

——暗殺以外のなにかを身につけられたらよかったのに。

ギアスの能力を使つての暗殺……それがロロの過去だったのか。なるほど、初めて「家族」として接したのがルルーシュだったのなら、依存し寄りかかるのも無理はない。

けれど、「自分」としてものを見られなければ、結局は「人形」だ。皇帝の人形から、ルルーシュの人形になるだけ。それでは、だめだ。

24 人形ではいけない（後書き）

このへん、本編のシーンはぶったぎりです。基本コナン目線なので、コナンが関われない部分はほとんどカットしております。本編と違った視線でギアスの物語を見たらどうなるか、がこの話の主軸ですので。なんか夢小説っぽいのは気のせい気のせい（笑）

ちなみにここの本編の話は、スザク嫌いな私が比較的見ていられる部分（笑）です。多分、自分棚上げ他人批判がまだない回だからでしょう。

唯一「お前な（怒）」と思ったのは「許しは乞わないよ」ですかね。スザクが言う「許しを乞わないからしたいことは何でもしちゃうよ」としか聞こえない。それはただの自己中です枢木さん。

25 爆弾会見（前書き）

今回のサブタイトルは割とするつと出てきました。

どーも熟語のほうが（造語だけど）考えやすいです。漢字好きだからかな。

後書きで、ユフィ批判、というか特区批判をつらつら書いております。ご注意ください。

25 爆弾会見

「皆さん、初めまして。私はブリタニア皇位継承第87位、ナナリー・ヴィ・ブリタニアです」

そう切り出されたのは、新総督の就任挨拶だった。全チャンネルがこれを生中継しているので、テレビをつけている人間は、必然的にこれを観ることになるだろう。……まあ、日本人なら皆、つけなはずがないが。前の総督は相当な人だったらしいし、それに代わる彼女がどんな人間なのか、知りたがらないわけがない。

「元気そうだな、良かった……。そして、^{ボディガード}護衛はスザクさん、か」
リビングにいるのは、コナン一人だった。生徒は全員、これを見るために講堂に集まっている。このあたりも、専制君主制らしいことだった。

「先日亡くなられたカラレス総督に代わり、この度総督に任じられました」

語るナナリーは、当然ながらコナンが見慣れた服じゃなく、かわいらしいピンクのドレスに身を包み、髪も所々編んでいた。車椅子もグレードアップしているんだろう。絶えず手元が動いていることから、点字の原稿を読んでいることがうかがえる。こういう場で演説することは多くなかったはずだが、そんなことを察する必要もないくらい、堂々とした様子だった。

「私は、見ることも、歩くこともできません。ですから、皆さんに力をお借りすると思います。どうか、よろしくお願いします」

そこまで言ってから、ナナリーは頭を下げた。

（黒の騎士団の人たち、動揺してるだろうな……）

今まで、差別主義者の豪腕総督としか相対していない彼らだ。画面越しとはいえ頭を下げられては、さぞ調子も狂うだろう。実は、これを観ていた団員のなかには、ナナリーを観て頬を染めていた人

間も何人かいたのだが、コナンには知る由もない。

と、ナナリーが演説を再開した。

「——早々ではありますが、皆さんに協力していただきたいことがあります。」

私は——行政特区日本を、再建したいと考えています」

「何っ!？」

思わず声を上げたのは、コナンだけじゃなかったはずだ。日本人もブリタニア人も、色々な意味で驚愕しただろう。

「特区では、ブリタニア人と日本人は平等に扱われ、イレブンは日本人という名前を取り戻します」

いつかに聞いたのと同じ、甘い言葉。——しかし、今現在、その言葉を額面どおりに受け取れる人間はほとんどいない。

ナナリーが言葉を続ける。

「かつては、不幸な行き違いがありました。が、目指すところは間違っていないと思います。等しく、優しい世界を——」

(彼女らしい、といえば、らしい、か——けど)

コナンは、無意識に顔をしかめた。かつて、似たような理想を語っていた少女を思い出す。そしてナナリーがさらに続けた言葉は、やっぱりその少女——ユーフェミアと同じものだった。

「黒の騎士団の皆さんも、どうかこの特区日本に参加して下さい。過ちを認めれば、きっとやり直せる。私はそう信じています」

本気でそう思っているらしい、きりつとした顔。相変わらず、目は閉じられている。

「……でも、短絡的なところが一緒、か。さすが、血の繋がった姉妹ってトコロか？」

その場に誰かがいれば、皇族への侮辱罪にもなりそうな台詞を、コナンは独りこぼした。

しかし、コナンにはわかっている。これは同じ親から生まれたから、というより、同じように『守られてきたことによる共通項』のほうが強いだろう。

ユーフェミアは皇族という育ちに加えて、姉コーネリアから常に守られてきた。それはおそらく、物質的にも立場的にも。だから、当時の「ゼロを赦す」なんていう（ブリタニアとして）暴挙ともいえることが、認められると思っていた。

ナナリーも、同じなのかもしれない。皇族としては不遇だったが、それでも兄ルルーシュからは常に守られ、このアッシュフォードでも、見たところ不自由のない生活だった。人の悪意や恨み——そういうものに、直に宛てられたことは少なかったのかもしれない。

（あの時と同じ、か……………）

また、ブリタニア側の人間に接触する必要が出てきたようだった。

25 爆弾会見（後書き）

前作でも散々書いておりましたが、私は特区案は「絶対に失敗する愚策」だと思っていますし、コナンにも終始「やらないほうがいいもの」扱いさせます。

私自身の意見とコナンに言わせることはズレることが多いですが（コナンはこんなことは言いそうにない、と思っただけで言わず、こうして後書きにします）、これに関しては一貫します。たいして優秀な頭でもない私ですら、考えるまでもなく欠陥が次々見えますから、「やらないほうがいい」程度にするのは、「コナンやルルーシュの頭なら、もしかしたら特区をなんとか活かす妙案を思いつくかもしれない」と思うからです。でも残念ながら私はそこまで頭よくないので、この話では特区以外の道を模索するコナンを描くつもりです。

なんだかコフィ批判のようになってしまいました。気分を悪くされたらごめんなさい。

なんだかんだでアクセス4万超・・・有り難い限りです。

26 放浪その頃（前書き）

原作（決まったストーリー）があると、サブタイトルに迷った時こういう抜け道があるのが助かります（苦笑）。
後書きに、ちょっとしたギアス考察を書いています。

26 放浪その頃

中継が終わり、生徒会室に置かれた、パーティーグッズが無造作に詰め込まれたダンボールをのぞいていたら、生徒会のメンバーが戻ってきた。――2人を除いて。

「ねえ、これ何?……っていうか、ルルーシュさんとロロさんは?」
その問いに、驚いたのはシャーリーだった。

「あれ?総督の就任挨拶はいっしょに聞いてたはずだけど……」
そういえば、とミレイが付け足す。

「ルルーシュ、今朝なんか様子がおかしかったわね。心ここに在らず、っていうか」

「ああ、言われてみれば、そうだね」

相槌をうちながらも、コナンにはその理由の見当はついていなかったし、違和感もある。

(ナナリーさんを騎士団陣営に連れてくるのに失敗したから、ってのもなんか妙だな。あいつの性格なら逆に、次こそは!って、リベンジに燃えても不思議じゃねーのに)

「そうそう、総督の到着をパソコンで生中継で観てたよね。といっても、タイプって様子でもなかったけどなあ」

言葉の途中で一瞬だけ青くなったシャーリーの顔色は、後半を聞いてまた瞬間戻った。

それを一応微笑ましく見ながら、コナンはもうひとつ気になっていたことを切り出す。

「……で、この色々なものは何?」

ダンボールを覗き込みながら尋ねると、俄然^{がぜん}ミレイのテンションが上がった。

「修学旅行の荷物よ!明日出発だから」

「——明日！？僕聞いてないけど！」

「今言ったわよ」

別にコナンに報告する義務なんて彼らにないことはわかっているが、あまりに唐突な話に思わず突っ込んだ。

「まあでも、コナン君には口口といっしょに留守番頼むつもりだったから、ちよつと遅くはなったわね。ゴメンゴメン」

どこまで悪いと思っているのかわからない謝罪（？）に、コナンは脱力した。思わず、米花町在住の某友人を思い出してしまう。

「……わかった今聞いたよ。何泊？」

「2泊！」

わざわざピースサインまで付け足すのがミレイだ。修学旅行にだけは控えめだな、と思いつつ、彼女なら絶対にとんでもないサプライズを企画しているとも思える。確実に。間違いなく、コナンが知っている修学旅行よりも濃い日程になるんだろう。

（……まあいいや。オレは関係ねーし）

いくら敷地内に住んでいるとはいえ、学園自体とは関係ないコナンだ。さすがに巻き込まれる恐れは少ない。

——しかし、深夜になっても、ルルーシュも口口も戻ってはいなかった。

一応彼のパソコンで何かしら動きはないか情報は調べてみるものの、めぼしいものはなかった。

「ルルーシュさんは欠席、かな？」

夜も明けようという頃、コナンは起き出したメンバーに尋ねてみる。間違いなくイエスの答えが返ってくると思ったが――。

「ルルーシュが行かないなら、私達もキャンセルよ」

ミレイの言葉に、その場の全員がはっとする。しかし、沈黙は一瞬だった。

「……そうですね。ルルがないのに、行っても楽しくないだろうし」

ぼつりとシャーリーがこぼせば、リヴァルも続く。

「……だな。つまらないよな。それにあいつ、このまま俺らだけで行っちゃったら泣くよな」

半分は冗談だろう、女生徒2人はくすくすと笑う。

——コナンは、何か脱力した。というか……力が抜けた。

ずっと、戦争や国のことばかり考えていた。どうやって犠牲者を減らすか、止めるべき人々を止めるか。それは、探偵の域を越しているほどに。

そう——この世界にも、こんな「穏やかな日常」がある。「当たり前の友情」も。彼らは、少年探偵団や蘭や園子たち、米花町の人々と何も変わらない。……そんなことすら忘れ去ってしまうほど、コナンの視界は狭まっていたのだろうか。

（あいつは……どうなんだろうな……）

「コナン君も、もう寝たほうがいいんじゃない？ ルルのことは、私たちがちゃんと待ってるから」

「……わかった。ありがとう、シャーリーさん」

もう少し待ってみようかとも思ったが、彼らが待っているなら大丈夫だろう。戻ってきたら報^しせてくれるはずだ。コナンは、念のためルルーシユのパソコンを拝借して、部屋に戻った。

——そして、翌朝のニュースでは、『ゼロ、「特区日本」への黒の騎士団の参加を表明』という、驚くべき事態が伝えられた。

26 放浪その頃（後書き）

あんまり話が進まなくて、申し訳ないです（汗）これからre特区の騒動まで、多分5話くらいいく予定（↑「多分」と「予定」をいっしょに使うな）

いつもは、連載だと5話分くらいストックを書いてから投稿するんですけど、この連載は平均で3話です。めちゃくちゃ書きにくい（↑好きで始めといて何言ってるかな）

最近、某ギアス考察ssサイトがお気に入りで、毎日のように入り浸っております。

視点と切り口が斬新で、「そういえばそうじゃん」が盛りたくさんです。

その中で目からうろこだったのが、「スザクはユフィの濡れ衣があるーだこーだ最後まで言ってるけど、日本人にとって虐殺犯がユフィでもルルーシュでも、ブリタニア皇族であることに変わりはない」という意見でした。そのサイトでは、コーネリアに向かって「『虐殺犯はユフィではない、親族の誰かだ』と言うのか？それは、君以外にとつては同じことだ」と言っていますが、確かに・・・！！まーそもそも、埼玉で虐殺命令出したコーネリアが、特区で虐殺命令を出させたルルーシュを「妹の手を汚した」以外で憤るのって筋違いだと思っんですけどね。

更新頻度は相変わらずですが（汗）、のんびり次をお待ちくだされば幸いです。

27 夜が明けて

目の前の男を見ながら、コナンはため息をついた。

「……で？昨夜、何があったんだよ？」

「何のことだ？」

会話しているのは朝食の席である。涼しい顔でパンをつまむルルーシュと、それをどこか不満そうに窺^{うかが}いながらスープを飲む口を一瞥し、コナンはまたため息をつく。

「とぼけんなよ。昨日のオメーのあの落ち込みようは、ただ計画が失敗したつてもんじゃないかったぜ。それが、昨日の今日でそんなすつきりした顔になるなんて、何かあったとしか思えねえだろ」

「別に、特別なことがあった訳ではない」

やっぱり涼しい顔で答えながら、最後の一切れを飲み込んで、ルルーシュは一言だけ付け足した。

「……『優しい世界』というものを、再認識しただけだよ」

「……………」

そのルルーシュの顔が思いがけず、優しげな表情だったことに少々意表をつかれたコナンだが、どうやら彼に話す気はないようだった。まあいい……またいずれ、それとなく探ってみるか——と自答する。

「——で？特区日本への参加を表明したんだって？騎士団の人たちはどう説得したんだ？」

優雅に紅茶を一口飲んでから、ルルーシュは答えた。

「説得する必要はない。ゼロとして、決定事項を伝えただけだ。まあ、必要な準備が済んだら指示する事もあるだろうが」

感づきそうな男はいるが——なんて、独り言のように付け加えた

ルルーシュは、紅茶を飲み干す。

「必要な準備……ねえ。つまり、やっぱり素直に参加する気はねーって事だな？」

「ほう、意外だな。素直に参加してほしかったのか？」

「……………」

逆に返された質問に、コナンは少々言葉に詰まる。

実を言うと、あの特区の案はまったく賛成できるものじゃない。

むしろ、ユーフェミアが提唱したときよりよっぽど状況が悪いのが、幸運に見えてくるくらいだった。

——あの特区は成功しない。それはもう、人がどれだけ入るか、という問題ではなく。

思考の海に沈みそうになって、コナンはわざとらしく咳払いした。

「とにかく、まあオメーのことだから、ナナリーさんに宣戦布告させるような真似はしねーだろ」

「そうだな。あの子の手を汚すようなことはしない」

嘘はないだろうその台詞に一応は満足しておいて、コナンは自室に戻るため踵を返して——振り返った。

「そーいや、スザクさんは次いつ登校するんだ？」

ルルーシュは、さして興味もなさそうに答えた。あくまで表面上は。

「俺の動向を探るために、近々顔を出すだろうな。おそらく、一いち両日中には来るだろう」

27 夜が明けて（後書き）

すみません、待たせたわりに短めになってしまいました。

お詫びというか、もう一話載せておきます。

毎日アクセスして下さる方々、本当にありがとうございます。

28 ひとつの答え（前書き）

スザクに厳しめの説教しております。ご注意ください。

28 ひとつの答え

彼の言葉は過たず、スザクは次の日に登校してきた。生徒会室でゆっくり話をするのかと思いきや、メンバーは集まるなり、そろって生徒会室を出て行ったしまった。

いわく、次のミレイの計画は屋上に花壇を作るのだそうで、コナンに重い農具は使わせたくないから待っていてくれ、だそうだ。まあ、確かにコナンは頭脳はともかく体力は外見年齢相応だし、筋力もシューズなしではさほどない。他の手伝いをしようにも、コナンは元々、生徒会メンバーでもなんでもないので場違いだ。「……そっか。じゃあ、テレビでも見ながら待ってるよ。がんばってね」

そうして生徒会室を去る間際、スザクが振り向いて言った。

「後で、また相談があるんだ。いいかな？」

予想通りの言葉に、コナンは笑顔で「うん、いいよ」と答えておく。ルルーシュの視線を感じた気がしたが、コナンはあえてそつちを向こうとはしなかった。

小一時間ほどして戻ってきた彼らを出迎えたコナンは、予告通りスザクに呼び出された。場所は、普段行かないどこかの校舎の裏。「……別に、みんなの前で言えればいい話だと思うんだけどな」

「わかってるのか、話を」
相変わらず堅苦しい空気を崩さないスザクに、コナンはため息をついた。

「特区に参加してくれ、って言いたいんでしょ？ 僕の無事を知らせる意味も込めて。このまま特区つくっても、ガラガラの遊園地みたいになるのがオチだからね」

「……………」

沈黙で返すスザクに、コナンはずっと思っていたことを言っていた。

「……僕さ、スザクさんは学校辞めると思ってたんだ。あの、ブラツクリベリオン？じゃなく、ユフィさんの騎士になったときに。言ったよね？騎士叙勲前に会いたかったって」

「どうして？」

疑問文で返したスザクに、コナンは一泊おいて、口調を変えた。

「本気でわからないなら——スザクさんはあの兄妹のことなんて、まったく考えてなかったって事だよ。あの時のあの兄妹にとって、軍上層部と強力な伝手ができたスザクさんなんて、友情と秤^{はかり}にかけても勝っちゃうくらいの脅威だったはずだ。

——僕は、スザクさんが選ぶと思ったんだよ。主への忠義として、主の血縁である彼らを皇室に戻すか、友情を優先させて、主と関わらないように彼らと縁を切るか」

そしてスザクの様子からみて、選ぶのは後者だと思っていた。――

けれど、スザクはどちらも選ばず、騎士になりながらも学生を続けた。

「結局、スザクさんは手放すことができなかったんだよね。心地いい居場所をさ。自分を認めてくれるユフィさんの傍にもいたい、でも自分を友人として受け入れてくれるあの人たちとも離れたくないってさ」

それによつて、その1番近くにいた友人がどんな危ない立場に立たされるのか……彼はそこに気づくことができなかった。

「……っ僕は……」

言葉を濁らせる彼に、コナンはもうひとつ、とどめの一撃を食らわせた。

「……とはいえ、あの人たちもスザクさんにとっては、ただの『都合のいい人たち』だったって事かな。僕なんて、あの人たちがギア

スにかかってるって気づいたときは、その張本人をぶっ飛ばしてやるうかと思っただけ——スザクさんは、その張本人に忠誠なんて誓ってるんだからね」

スザクには悪いが、友人をそんな風に『使う』人間を信頼して、国を揺るがすような情報を提供するなんて芸当は、コナンにはできない。

何か言いたそうな、しかし言葉が出てこないスザクにため息をついて、コナンはその場を去るべく体の向きを変えた。

そういえば、という様子で振り返る。

「特区には参加しないよ。ただ、『遊びにいく』くらいはするかもしれないけどね」

28 ひとつの答え（後書き）

あまり特定キャラに厳しくならないように注意して書いてはいるんですが、どーしても言っておきたかった事を今更書きました（汗）あれですね、自分のHPとかブログとか持っていないので、偉そうな批評のはけ口の一つになってますね。今後も某日本人たちとかに厳しくなっていくと思いますので、ちょっとアンテナ張って、反応したら即行で読み飛ばして頂けるといいかと思います。

「そんなに言うなら書くなよ」と言われそうですし、もっともだとは思いますが、「言いたいことを書かない」のではここで執筆している意味の大半がなくなりますし、ある種の考察として、精一杯客観的に考えた結果を載せることに意味があるかと思っています。

29 予防線（前書き）

ブリタニア皇族ズに少し厳しい内容が入っているのでご注意ください。

29 予防線

『行政特区日本への参加者は、未だ現れていないようです。ゼロからの連絡も途絶えたままで、黒の騎士団内での意見調整に手間取っているのではないかとというのが、政庁関係者の見方ですが――』
そこまで聞いて、コナンはニュースを消した。

――やっぱり。あの虐殺の記憶は根深い。もう一度信じてみよう、なんていう人間は今の「日本人」にはいない。数年前ならいたかもしれないが、そういう前向きな人間はとくに市民権を獲得し、「特区に入らなくても、とりあえず生活には困らない」状況になっているんだろう。

とはいえ、ブリタニア側に同情する気にも、コナンはなれなかった。ユーフェミアには気の毒だが、あの虐殺は「これから起こったであろう事態」の前倒しにすぎない。あの特区は遠からず運営に行き詰まり、大量のホームレスを生み出し、彼らは犯罪に走り、結局は処刑されていた可能性が高い。しかも、ユーフェミアには不幸なことに、「ブリタニアの皇族がブリタニア人以外を虐殺してもまったく不思議ではない」土台を、彼女の兄や姉は作り出していた。義兄のクロヴィス皇子は新宿を壊滅させ、実姉のコーネリアは埼玉で虐殺を囫にしてゼロをおびき出そうとした前例がある。

――義兄や実姉がそうなんだから、ユーフェミアだって自分の意思でやったんだろう。

そう思われても仕方ない……。

「……コナン君？」

思考の海に沈んでいたコナンは、かけられた声にはっとして振り向いた。

「ミレイさん。どうしたの？」

ミレイは、少しためらった後で口を開いた。

「……コナン君、もしかして特区に参加したいの？ 確か、前の特区のときは『入らない』って言ってたよね？」

熱心に特区関連のニュースを見ているコナンに、彼女は誤解したらしい。

以前の特区のとき、「入りたいのか」と同じように聞かれて、コナンは「否」と答えた。今の環境で十分だから、と。それが、今回の風向きの悪い特区にも興味があるようだから、もしかしたら、と思っただけ。

「ううん、違うよ。——ただ、この特区の関係者さんに、もしかしたら知り合いがいるかもしれないから、ちょっと気になってね」
笑顔で告げられたちよつとした爆弾発言に、ミレイはさすがに驚いた。

「え！？ ブリタニアの政庁に？ ラウンズのスザク君？ だったらそんな言い方しないよね？ 誰？」

当然の質問だが、コナンは苦笑して言葉をにこした。

「んー……多分みんな知らないと思うから、それは秘密。ただ、場合によってはその人の伝手で、近いうちに引越すかもしれないな」
半分は嘘だが、半分は本当だ。コナンは関係者どころか、総督と顔見知りである。ただ、彼女はナナリーとこのことを覚えていない——知らない。

この方便は、後々黒の騎士団に潜入することになった時のための予防線だった。まさか反政府組織に潜りこむからここを出ます、とは言えないので、政庁関係者の紹介で引越すことにしておけば、心配もあまりかけない。

あの対話以来、スザクはコナンと話をしなかった。……というより、以前のように特区の準備で忙しいらしく、登校すること自体が極端に減った。せつかく復学したのに、とは生徒会メンバー

の言だが、コナンやルルーシュなどはむしろ「復学したこと自体が不自然だ」思っている。

——再びの『行政特区日本』式典まで、半月。

29 予防線（後書き）

もつと色んなキャラ動かして色んなドラマ書いてみたいんだけど・
・これ以上話の進みが遅くなっちゃだめですよー。ただでさえ遅筆なのに。

いや、時間は一応あるんです。ただ、私以外も時間が増えて家にいることが増えて書きにくいんです。整合性をもたせるためにDVDとか観るのも気を遣う・・・。

姉は資格試験の勉強始めて（学校は自由登校）仕事辞めたもんだから暇が増えてるし、母は半日休みが増えた＋祖母の介護が一段落したからリビングでパッチワークの時間が延びて（パソコンはリビングの隣）、2時間もパソコンやってると「遊びすぎ」と言われてあえなくシャットダウン・・・。

いや、なんでもありません。最近、携帯でブログを始めようか悩み中です。自分のサイトってものがないと、こういう所でどーでもいい話しちゃうんですかね。

30 出てきた可能性（前書き）

えー、あまり進んでません。お叱りを受ける前に予防線（苦笑）
あと、後書きはギアスファンの方にぜひ読んでいただきたいです。

30 出てきた可能性

「ゼロが、極秘会談を申し込んできたよ」

珍しく登校してきたスザクはコナンをつかまえると、単刀直入に言った。ずいぶんと不機嫌だ。

「……つまりは司法取引？ 特区に参加する代わりに何かしろって？」
スザクは眼差しだけで肯定すると、眉間にしわ寄せて続ける。

「『ゼロを国外追放処分にしろ』と言ってきた。あいつは、自分だけ逃げるつもりだ」

「……ゼロだけ？」

怪訝に思いつつ返すと、彼は不機嫌まなうなずく。

「妙だね——」

顎をつまんで推理ポーズになるコナン。スザクが、その様子を意味ありげに見つめてきていたのは、気付かないふりをした。

「……わからないか。君でも……」

「……悪かったね」

心底がっかりしたような様子のスザクに、コナンはジト目になった。

「……で？ そっちはどう対応するの？ 前の特区るときなら、突っぱねられただろうけど——」

「残念だけど、呑む方向で動いている。彼の言葉通りなら、このエリアでのテロ組織は、リーダーに逃げられて空中分解するはずだ」
「ふーん。それでいいの？」

その提案は、普通に考えれば「部下たちを見捨ててリーダーだけが逃げ、政府側もそれを容認する」という意味だ。その道義的見地はともかく、政府側にとっては悪くない提案だろう。実際、過去の特区るときも政府側は妥協した。——まあ、あのときは黒の騎士団の勢力は脅威になっていて、それを根絶させられる可能性があった

ので、関係者はゼロの罪を問うよりもそっちを優先したんだろう。今の場合は少し状況が違うが、政策の実現を優先し、かつ反政府組織のリーダーが自滅してくれるなら、悪い取引じゃない。

しかし、気になるのはスザクの反応だった。他の皇族を殺したことはともかく、ユーフェミアを殺したゼロを、あっさり国外に見逃すのか――？

スザクは、割合冷静にコナンの疑問に答えた。

「総督がお決めたことなら、僕に異論を唱える筋合いはないよ」

「……………」

さつきとは違う意味でジト目になったコナンに、スザクは怪訝そうな顔をした。

「そんなにおかしいかい？僕がナナリーに従うのは」

「おかしい、というか――変わってないな、と思って」

「え？」

意外な言葉だったらしく、スザクは不思議そうな顔になった。

しかし、コナンはそこは詳しく語らず、話題を変えた。

「――まあ、彼もバカじゃないから、二の舞を踏むようなことはさせないはずだけど。式典、スザクさんも出るんだっけ？がんばってね」

「あ、ああ。……といっても、僕は軍事の責任者だから、式典自体のことは文官に任せているけどね」

彼が去ってから、コナンは思考の海にしばし潜った。

――ゼロが……ルルーシュが、「一人で海外逃亡」なんて選択するわけがない。これは何かの策だ。しかし、いったい何の……？

（ゼロ……国外追放……逃亡……司法取引……仮面――まさか）

ふと思いついたことにコナンは一瞬愕然としたが、頭を振って思考を切り替える。

（いや、さすがにそれは突拍子がなさすぎる）

しかし、そこでルルーシュが言っていたことが思い出される。

『必要な準備が済んだら、指示することもあるだろう』

（……確かに、これだったら準備がいる。それも、ものすごい大量の）

そして、またコナンは首を振った。可能性はほかにもある。断定はできない。何より、突拍子がない。そして、それはブリタニアが同意しないとできないはず。

（……こればかりは、あいつを問いつめても吐いてくれねーだろーな……）

ナナリーに手は汚させない——あの言葉は信じられるはずだ。それを信じよう。

自分に言い聞かせるように、コナンは窓の外の青空に視線を移した。

30 出てきた可能性（後書き）

とりあえず平伏。いや、更新しようと思っていたうちになんと3週間が過ぎていた（汗）・・まあ、いつも1週間2週間更新ではありませんが。

ちなみに、このへんの策は、一応コナンも思いつくと思うんですよ。発想としてはね。でも、「さすがにそれはぶっ飛びすぎる」という理由で却下されるものだと思います。普通の感覚として。つつかさ、あれ用意すんのにどれだけかかったんだよ？とツツコンではためでしょうか？たまたまこの回のDVDを買ったのでオーディオコメントリーを観てみたら、声優さんが大盛り上がりでした（笑）

そうそう、読者様の中に「DVD全部持つてるよ」というギアスファンの方がみえましたら、ぜひともオススメのオーディオコメントリーを教えてくださいと嬉しいです。今持っているのは1期4巻（かな？騎士団の回）、7巻、2期2巻、4巻なのですが。コナンのDVDすら（劇場版以外）持ってないのにねー。

ナナリーのつづり大丈夫かしら。いつぞや特集本で見たつづりです
が(曖昧だぁ・・・)
いよいよ特区式典始まります。

その日、政庁は朝からてんやわんやの様子だった。

おぞましい悲劇の記憶が色濃い、ブリタニアにとつて思い出したくない政策だったことは知っている。しかし、それでも何とかしたかった。してあげたかった。かつて姉妹として共に笑い、誰より輝いていたあの人。自分たちの生存^{こと}を知っても、表沙汰にしないでくれた。

その姉が、自分と同じ理想を描いて始めようとしたはずの——
『行政特区・日本』。

式典での演説の原稿（点字だが）の最終チェックをしたナナリーは、車椅子を動かした。——自分は、壇の中央に座っていなければならない。

補佐や警備を勤めてくれるラウンズの人たちは、すでに持ち場へ向かった。

これは、自分が総督として初めて為す役目——。

『日本人のみなさん、行政特区・日本へようこそ。沢山集まって下さって、私は今とても嬉しいです。新しい歴史のために、どうか力を貸してください』

自分の声が反響するのを聞きながら、ナナリーは大過なく挨拶を述べていった。

式典は、順調に進んだ。来場者は暴れるどころか、野次のひとつも飛ばさない。それを吉兆とみるか凶兆とみるかの判断は、ナナリーにはつかなかったが。

『それでは——ここで、我々がゼロと交わした確認事項を伝えます。帝国臣民として特区に参加する者は、玉赦^{たまへく}として罪一等を減じ——』

ゼロを形だけでも許すための対外措置として、事務方が出した案を読み上げるのはナナリーの傍らにいる女性だ。そして、その言葉の番がきた。

『——エリア特法第88条に従い、ゼロだけは、国外追放処分とする』

実は、この減免措置をテレビ越しに見た視聴者は相当首をひねっている。コナンが訝^{いぶか}ったのと同じ理由だ。もっとも罪が重いはずのゼロだけを逃がすとは、どういうことかと。

——その時。

『ありがとう！ブリタニアの諸君。寛大なるご措置、いたみいる』
どこからか——というより、明らかに今までナナリーの声が聞こえていたスピーカーから、覚えのあるゼロの変声機越しの音が響いた。もっとも、ナナリー自身はべつにそんなことは気にしない。

「来てくれたのですね！」

この瞬間に緊張の糸をぴんと張らせた軍人にしてみれば、少々陽気すぎるとも言える声だ。

それを証明するように、ナナリーの前にひとりの軍人がさつと進みでた。

「姿を現せ、ゼロ！自分が安全に、君を国外に追放してやる！」

スザクの声には緊迫感があり、「何かある」と警戒していることをナナリーはいやでも覚った。

ゼロは『人の手は借りない』とそっけなくしつつ、『それより——』と言葉を続けた。

『枢木スザク。君に聞きたいことがある。日本人とは、民族とは何だ？』

いきなりな質問に「なに？」と口に出すスザク同様、ナナリーも小さく「え？」とこぼした。

『言語か、土地か。…血のつながりか』

背後のパネルを振り返る形でいたスザクが、体ごとパネルに向か

い合ったのを、ナナリーはなんとなく覺った。

「違う。それは――心だ！」

『私もそう思う』

言葉と同時に、画面に映る仮面が小さくうなずいたことはナナリーにはわからなかった。

『自覚、規範、矜持……民族の根底たる心さえあれば、どこにいうと、それは日本人なのだ』

意外な話の展開に戸惑っていると、唐突に客席から音が聞こえてきた。

――密閉された袋から空気が抜ける音……いや、どこからか空気が噴射される音だ。それも大量の。

壇上^{にわか}が俄に騒がしくなり、自分と呼ぶ声が聞こえたかと思うと、ナナリーの車椅子は有無を言わさず、その場から退避させられた。

……その少し前、会場からひとりの少年が姿を消したことに、当然のことながら、ナナリーは気付かなかった。

やっとこさ進められるようになりまして、今日のうちに更新しておきます。

理由は、明日は祝日だから（笑。家族が家にいるとゆったり執筆できないのです）

最近ほんとに家族が誰かいる日ばかりなので、なかなか執筆できません（筆が遅い言い訳ではありません。多分）こないだ受けた面接（自分の）の結果次第で、もう少しペースを上げられるかなー？という所です。

そうそう、ナナリー視点は一応書いてみたかった部類ですが（実はもう1話ナナリー視点だったりする）、正直書きにくいです。というのも、ナナリーは内面描写や独白が極端に少ないので、いくつかある要素のどれをとって発言しているのかがとってもわかりにくい・・・。スザクより少ないですよ。スザクもカオスなキャラですが、ナナリーはお面かぶったキャラって感じです。何をさしている台詞かが本当にわからない。なおかつ、所々にブーメラン発言が・・・（嫌いじゃないんだけどなあナナリー）。

ちなみに、これからぶつとび展開が来る可能性アリです。一つバラしますと、コナンはナイトメアに乗る予定です。

本編が「そんなんありか」の連続だから、まーいっか、なノリです（笑）作者の知能同様、残念なことになっても怒らないで読んでいただけたら嬉しいです。

何が起こったのかもわからないまま、ナナリーはただ車椅子を押されていた。

「何が起きたのですか？」

誰にともなく尋ねるが、答えたのはお付きの文官の一人だった。

「確認中です。ミス・ローマイヤが残っています」

「任せると言われるのですか？」

思わず聞き返してしまったのも無理はなかった。補佐官のその女性性は、優秀だが断固とした差別主義者だ。

そんなナナリーの心中を見透かしたように、横からアーニヤの声が加わった。

「大丈夫。——スザクもいるから」

「……」

——こういうとき、自分は何もできない。なけなしの自信が、いとも簡単に萎んでいく。

うつむきかけたナナリーは、ふと小さな音に気付き、見えない視線を前方に戻した。

足音だ。——しかも、聞き覚えのある。

（まさか……）

「誰だっ!？」

遅れてその存在に気付き、銃を構えるまわりの人間を、ナナリーは制した。

「待ってください！私の知り合いです」

すると、ふっと笑うような気配のあと、彼は口を開いた。

「さすが。よくわかったね、ナナリーさん」

「やはり、コナン君ですね」

懐かしい声に、ナナリーの顔は自然とほころんだ。

「無事だったんですね。心配していました」

あのブラックリベリオンのときにクラブハウスを飛び出して以来、コナンも行方不明になっていた。最悪の結果を、何度考えたことか
「ごめんなさい。こっちも色々あってさ」

そんな微笑ましい会話をしながら、ナナリーの頭には素朴な疑問が浮かんでいた。

そうだ。そもそも――。

「……コナン君は、どうやってここまで……」

コナンの声の調子が、微妙に変わった。

「外があれだからね。子供一人入り込んでも、あんまり気付かれな
いよ」

そしてこの式典では、ゼロがナナリーに危害を加えることはあまり想定されていない。いくらナナリーに信用がないとはいえ、曲がりなりにも「日本人のため」と銘打った政策を始めようとしている体の不自由な少女を害することは、ゼロにとってもマイナスになるだろうとの見方からだった。かつての式典のときほど警備は厳しくないし、子供ならなおさら警戒の対象になりにくいのだ。

言いながらコナンが肩をすくめたのは見えなかったが、ナナリーはその台詞に飛びついた。

「知っているんですか！？会場で何が起きているのか」

思わず声を荒げるナナリーのそばで、護衛たちが目つきを鋭くする。――場合によっては、このまま返すわけにはいなくなる。

しかし、予想したような答えはなかった。

「詳しくは知らないよ。――でも、今回は恐らく誰も死なない。大丈夫」

自信をもって言い切るコナンに、ずっと黙っていたアーニヤが口を開いた。

「……どうして言い切れるの？」

わずかにあいた間は、コナンがアーニヤに気付き、そちらを向い

たせいだろう。

「お姉さんは？」

ある意味失礼ともとれる質問に、アーニヤは淡々と答える。

「アーニヤ・アールストレイム。ナイトオブシックス」

すると、感心したような声が響いた。

「『第六の騎士』さんかあ。すごいね、若いのに」

「——どうして言い切れるの？誰も死なないって」

アーニヤがズレかけた話を戻す。コナンは数瞬の沈黙のあと、やや声音を落とした。

「……あの男は、そんなにバカじゃないよ。また暴動なんか起こしても、日本人は前ほど彼に味方しないだろうしね」

そこでコナンは、少々呆れたように口調を変えた。

「……にしても、思い切ったよね。黒の騎士団から頭だけ取っちゃおう、なんてさ」

「提案してきたのはゼロのほう。自分だけ見逃してくれって」

「その見返りに、特区を成立させてあげるって？」

その口調には、やはりどこか呆れたような響きがある。

「もうちょつと警戒するべきだったね。あの男が、そんなにピンチでもないのに身一つで逃げるような計画立てるわけないって」

「……コナン君？」

ここまできて、ナナリーは違和感を覚えた。

「……コナン君、私に何か用があつてきたんですか？」

ここでまた、コナンはわずかに沈黙した。雰囲気は確かに変わる。

「……言つときたいことと、聞いときたいことがあるんだ」

長くなりました・・・これでもあちこち削ったのに。

この話はだいぶ前(数ヶ月単位で前です)に書き始めたもので、かなり書きたかった話でもあります。ただ、「書きたい話」≠「書きやすい話」で、まとめるのに結構時間くった気がする・・・ははは(汗)

33 脱出の裏側で

——彼女には、正直もつと早く会っておきたかった。総督という政治家になった後は、なおさらだった。とはいえ、スザクの手の中にある彼女と彼ぬきで話をするのは、少しばかり骨だ。

ルルーシュにとつて「人質をとられた相手」であるスザクは、コナンにはそのまま「ナナリーの前にいる衝突^{ついたて}」だった。幸い、彼にはナナリーという存在ひとつでルルーシュやコナンと渡り合うような心理的駆け引きの手腕はないようだが、いかんせん今の彼には、無駄に大きな権力がある。

スザクがこの式典の軍事の責任者なら、それを利用すればナナリーに会える——コナンの読みは当たった。

コナンは、さりげなく眼鏡のスピーカーで、会場に置いてきた盗聴器の音声を確認する。

「……言っておきたいことと、聞きたいこと？」

首を傾げるナナリーに、コナンはうなずいて続けた。

「この特区——御姉さんの意思を継ごうとしたんだよね？」

暗にユーフェミアの話をふると、ナナリーははっとした。

「……そうですね。コナン君は、ユフィ姉様に会ったことがあったんですよ」

「実は、ナナリーさんが思ってるより親しかったんだ。でも……だからこそ、あの特区は失敗するっていうのもわかった」

「……………」

「彼女は理想家だった。逆に言えば、理想だけだった。理想を形にするためには現実を動かさなきゃならない。彼女には、その構想も手腕もなかった。彼女のことは好きだったけど、これは事実だよ」

「コナン君……………」

「だから、覚えていてほしいんだ。理想は高く持っていていいと思うけ

ど、現実もちゃんと見なきゃならないって。そうしないと、多分何をやっても上手くいかないから」

しばし沈黙していたナナリーが、ふいに口を開いた。どこか寂しそうに。

「……コナン君、なんだか厳しいんですね。前は、とっても仲良くしてくださったのに」

コナンは苦笑のこもったため息を一つついた。

「そりゃ、あのときは、ナナリーさんは『ただの優しいお姉さん』だったからね。けど、今はそうじゃない。地位のある人には、権力もあるけど、責任もあるんだ」

元の世界では、その責任をきちんと背負って、立派に果たしていた人たちをずっと見てきたコナンだ。それだけでなく、コナン自身自分の推理しゅとによって命を奪ってしまった人もいる。

時間はあまりない。コナンは本題のもう一つを切り出した。

「……あと、聞きたいんだけど」

「はい？」

ナナリーの顔に、心なしに元気がない。しかし、本題の一つだ。

「『ゼロ』のこと、何か聞いている？スザクさんから」

「ゼロなら、この式典で国外追放処分に……」

「ああ、違う違う」

ひらひら手を振って話を遮るコナンに、ナナリーは怪訝そうな顔だった。

「ゼロ自身のことだよ。スザクさん、何か言っていなかった？例えば

——仮面の中身とか」

これに反応したのは、ナナリーよりその周囲の人間だった。それを油断なく見渡しながら、コナンは返事を待つ。

「……いいえ。お父様から口止めされているとかで、私には何も……」

「………そっか」

特大のため息とともにつぶやいたコナンに、ナナリーはまた首を

かしげた。

「コナン君、知っているんですか？彼の正体を」

その言葉に、またアーニヤはじめ警備の人間の視線が鋭くなる。

「んー……悪いけどそれは保留。そう、あの人ナナリーさんにも何も言っていないのか。まったく……」

頭をガリガリかいたが、ここで暴露するわけにもいかない。

会場では、本当にゼロが大都市の人口なみの日本人を引き連れて去ったようだった。スザクもじきに帰ってくるだろう。――潮時だ。

「じゃあ、これ僕の携帯番号」

唐突にメモを差し出され、ナナリーは戸惑った様子だったが、コナンは構わず続ける。

「スザクさんに読んでもらって、スザクさんにも登録してもらって。僕もう行くから」

「あ、あの、コナン君……」

ナナリーの呼ぶ声には構わず、コナンは早足でそこを立ち去った。

33 脱出の裏側で（後書き）

サブタイトルはシンプルが1番だな。うん。元のストーリーあるしな。（と、考えることを放棄し始めている自分）

コナンには、このへんの説教をさせなきゃいけないと思いました。作中で、ユフィやナナリーにそういう説教する人いませんでしたよね。かるうじてコーネリアがユフィに呼び方注意したくらいで。

正義感が強く、視野が広く、「人を助ける」ことに職業意識のあるコナンだったら、言わずにいられないと思ったんです。

ちなみに、内容はそれでもソフトに、簡略化したつもりです。執筆中、收拾つかなくなっただけでさりカッとしたやりとりもあった（汗）

にしても本当に物語進まないなあ・・・楽しみにして下さっている方にはほんとうに申し訳ない気持ちでいっぱいです。

やっと就職が決まったので、3月まではそこその頻度で更新できる・・・予定です。

34 驚愕の再会（前書き）

布石がやっと一つ回収できました・・・。

34 驚愕の再会

「——『蓬萊島』…ねえ」

クラブハウスに戻ったコナンは、テレビを前にして珍しく感心していた。

『ゼロを国外追放処分にしたら、大勢の日本人にゼロの扮装をされ、総督の命令という大義名分のもとに、黒の騎士団の大量亡命を許した』……なんていう、そんなんアリかとツツコミたくなるようなゼロの作戦には、当然ながら続きがあった。

亡命した先の居所はどうなるんだ、という問題だ。大仰に脱出しでも、乗った船の行き先がなければ意味がない。——しかし、ルルーシユは、その行き先に意外なところを用意していた。

中華連邦——。

わかりやすく言うなら、「中東まで国土にした、制度自体は古臭い中国」か。どうも、天子と呼ばれる君主を頂点としたピラミッド国家らしいが、今の天子は幼く、実権は「大宦官」が握っているらしい。いつの時代だ、とこれもツツコミたくなるが、思えば日本も天皇を傀儡かいらいに軍部が好き放題していた時代がわりと最近あるので、これはもう「一つの国家の成り行き」と思ったほうがいいかもしれない。

そして、ちょうど台湾くらいの位置にある島がそれだった。「蓬萊島」。どうも、ただの離島じゃなく、埋め立てでできた人工島らしかった。潮力発電用ちようりょくに造ったらしいが、百万人を収容してしまう広さにしたのはさすが中国。

その島を、彼はあらかじめ借地する算段をつけていたのだ。そういえば、しばらく前までは黒の騎士団は租界内にあるその領事館にいたらしいから、そのあたりの伝手か。

「蓬莱島……確か、仙人が住むという中国の伝説上の島。同時に、台湾の別名でもある。……随分と、ファンタジックな命名だな」

あつちの日本人も少し見習ったほうがいいかも——なんて埒もないことを考えていたら、ふいに声をかけられた。

「そんなニユースばかり見て、楽しいか？」

言葉だけなら、別に普通の台詞だった。が、コナンは思わず、勢いよく振り向いてしまった。

「どうした？」

「……………」

（そついやそつだ。アイツは今、日本にいないはず。ってか、何だこの顔！？）

コナンが素直にパニックを顔に出しても、彼は笑顔のままだった。それがものすごい違和感を与えるということに、どうやら気付いていないらしい。

「お……お兄さん、だれ……？」

かろうじてそれだけを搾り出すと、彼は戸惑ったようにまた笑った。

「誰って……俺はルルーシュだが？」

（いや、ぜってー違うだろ！！）

叫びだしたいのをなんとかこらえて、彼の手を引いてあわてて自室にひっぱりこむ。別にたいした距離でもないのに、心臓がバクバクいうのがわかった。

「……あ、あのさ。事情は、だいたいわかる、から、その変装、やめてくれない？」

変なところで言葉が途切れたのは、仕方ないと思う。

「事情？」

「だから、ルルーシュが今ゼロとして中国行ってるから、スザクさん他の目をこまかすために、影武者してるんでしょ？」

「！」

彼の表情から、それが正解なのがわかった。

（いや、最初に気付くべきだったんだ。アイツが今ここにいるはずがないって。なのに居るってことは影武者だつて。そして、それができるのは、ゼロとルルーシュ、ふたつの顔を知っている人物――」

おそらく、自分のことも知っているだろうから声をかけてきたんだ。……しかし。

「あら、どうしてわかったんです？ 私が影武者だと」

不思議そうにカツラとマスクを取ったのは、コナンも顔なじみだった女性だった。

34 驚愕の再会（後書き）

前に「コナンと咲世子が再会する」と書いた以上、ここは必須かな、
と思いつつ書きました。以前の構想では、このへんでコナンが学園
から騎士団に行く予定もあっただんですが、ちょっと遅らせました。

蓬萊島に関しては、辞書で調べたのでたぶん合ってると思います。

結構あちこちで出てくる言葉なので（某犬漫画の映画版とか）、何
かあるだろうとは思ってましたが、今回初めて知りました。

諦めかけていたオリジナル展開ができそうなのでそっちも進めてい
こうと思いますが、正直書いたら書いたで反応が怖いです・・・（
汗）

温かく見守って下さるとうれしいです。

35 再びの忠告

(……これは、さすがに予想外だったな)

学ランにメイドキャップという、かなり違和感のある格好をしたその女性を前に、コナンはなんとなく頭痛がしていた。

「……咲世子さん、黒の騎士団のメンバーだったんだね。しかも、ゼロの正体まで知ってたの」

「ゼロのことを明かされたのは、つい最近のことです。その上で、君なら影武者を任せられる、とお言葉をいただきました」

「よく、従う気になったね」

多少真顔を取り戻して尋ねるコナンに、彼女は何でもないことのように答えた。

「あの方のことは、多少は存じておりますから。出生や素性に何か秘密があることも薄々感づいておりますし。何より、生半可なお気持ちで、あのようなことをなさる方ではありませんし」

その言葉には迷いも躊躇いもなく、ルルーシュに対する信頼の念が現れていた。少し意外な気分になりつつ、納得もする。——かつてこのクラブハウスで働いていた彼女は、主である兄妹とかなり良い関係を築いていた。

「私こそ驚きました。あんなに早く、変装に気付かれてしまうなんて」

台詞ほどに驚いた様子はなく、またしても何でもないことのように話す彼女に、コナンはさっきと別の意味で頭痛がした。

(あんだだけ別人になってりや気付くだろ。なんだこの人…天然か?)

「……ロロさんは当然知ってるんだよね？ 咲世子さんのこと——！」

言った瞬間に、コナンのまわりで何かが変化した。頭の中がぐにやぐにやになる。どこか覚えのあるその感覚がなくなったと思った

ら、別の声が響いた。

「呼んだ？」

気付いたら、ロロが部屋の中にいた。コナンは瞬間、呆然としたが、すぐに頭を振って思考を取り戻した。

「ああ、そういえば、ロロさんは『体感時間を止める』ギアスだったね」

言いつつ咲世子のほうを見やるが、彼女も別段驚いている様子はない。……ギアスのことまで知っているようだった。

「同じ人間にも、何回でもかけられるんだっけ」

「回数制限はないよ」

ロロも、コナンと会話するのにだいぶ慣れたようだった。彼が人間らしくなっていくのは、どこか微笑ましいものがある。

「で、ロロさんはどうしてここに？」

一応尋ねてみたコナンに、ロロはほとんど無表情のまま答えた。

「君が、咲世子と一緒にいるのを見て、とりあえずつけて来たんだ。そうしたら、僕の名前が聞こえたから」

「……………そっか」

理由になってない、というツツコミはあきらめて、コナンは一息ついた立ち上がった。

「事情はわかったから、ふたりとも戻ってくれる？僕も、まだ色々調べたいし」

その言葉に、ふたりはコナンに背を向けた。コナンは、ふと思いつ出してささやいた。

「………… ホントに、彼を信用してるの？」

言われたロロは思わず振り向いた。咲世子が気付かず去っていったから、コナンは言葉を続ける。

「繰り返すようだけど、彼をあんまり信用しない方がいい。忘れてはいないと思うけど、彼は望みのためなら、戦争だって起こしちゃう人間なんだから」

「……………」

無言のまま去っていく口口に、コナンは複雑な表情を浮かべた。

——その後、また開いたネットのニュースには、『神聖ブリタニア帝国第一皇子、中華連邦の天子とまもなく結婚へ』という非公式情報が掲載されていた。

35 再びの忠告（後書き）

あれ絶対気づくよなー。シャーリーすら気づかないってどうよ？と思います。

個人的に、本編で一番胡散臭い回が「ラブアタック」だと思っています。コナン以上にありえないので、この話では華麗にスルーする予定であります。

にしても、本気で進まないですねー（汗）色々妄想はしてるんですが、話としてつなげるのはむずかしや〜。

36 進展

テレビのニュースを見ながら、メンバーはおのおの言いたいことを言っていた。

「ご結婚かあ……おめでたいね」

夢見る乙女になっているシャーリーは、考えていることがほとんどだだ漏れた。

「……にしても、すごい歳の差婚だよなーこれ。何歳差だよ？」

「親子くらいの差はあるわよねー」

「どうせなら、もうちょっと歳の近い皇子様にすればよかったのにな。いくら大同土で、序列があるって言ってもさ……」

最後の台詞は、コナンの混じりけない本音だった。この結婚によって世界情勢がどうなるという問題以前に、歳の差がありすぎてそっちが犯罪だ。

なにせ、花婿となるオデュッセウス皇子は成人をとくに過ぎ、花嫁となる天子は13歳。米花町のある日本なら、まず間違はなく「ロリ婚」とかいつてはやし立てられるだろう。

そのニュースを不安そうに見ているロロにため息をつきながら、コナンは無言のままのルルーシュ——もとい咲世子に視線を移した。（実はけっこう動揺してるな。まあ当然か。……にしても、なんでみんな気付かねーんだ？）

自分の観察力・勘の鋭さには自信はあるが、それに抜きにしてもみんなも鈍すぎる。

「……これがいつから決まってたかも気になるけど、さすがに騎士団側にも情報はいつてるよね」

「それは確実にいつていますね。黒の騎士団を以前から援助している皇コンツェルンのご当主、神楽^{かぐら}様は、ブラックリベリオンから逃れた先の中華連邦で、食客として天子様の元に滞在しておいで

したし」

「…………それはそれで、バレたら大変そうだけど。ふーん、伝手はあるんだ。だったら、それを使って何か起こすかもね」

こんな会話をしているのは、クラブハウスのテレビの前だ。

報道では、世界有数の大国同士が結婚によって結びつく、という大ニュースとともに、中華では記念のパーティーが盛大に開かれる予定だ、と伝えていた。

「…………君は何もしないのか？兄さんは、確実にこの結婚をつぶす手立てを考えているだろうけど」

気が乗らない様子でコナンに尋ねるのは口口だ。コナンはテレビ画面から視線を外すことなく答えた。

「現実問題、僕がこの件でできることなんてないも同然だよ。スザクさんも、どうやらナイトオブラウンスとして中国に行っちゃうみたいだし。ナナリーさんは、この日本のエリア以外に口を出せる権限はないだろうしね。」

それに、この結婚自体、国同士のことだし、僕は政治家でも外交官でもないしね」

言いながらも、コナンの眉間には軽く皺がよっている。

——中華連邦というこの国は、実は中国と似たような状況にある。情報は規制され、一部の富裕層が富を独占し、それにあやかれなかった一般市民は飢餓に苦しんでいる…。ブリタニアと併合されることによって、それが少しでも改善されるなら、コナンとしてはむしろ歓迎だけれど、そのためには、やっぱりブリタニアの思想を変えていかないといけない。

「…………僕にできることは、情報収集しつつ静観、ってトコロだね」
その台詞とは裏腹に、コナンの表情がずいぶん真剣であることに口口が気づいたのは、短い付き合いの賜物といえるのかもしれない。

36 進展（後書き）

あれ、とっても思っんですが、

他に年頃の皇子いなかったのかな・・・？

まあ、末っ子だろうルルーシュがもう17？18？だから同い年とかは無理にしても、いろいろ差がありすぎだろう・・・。天子も、結婚相手がブリタニアの皇子って以上に、その年齢に抵抗があったと思う。絶対。まあ、そこにニーナを連れて現れるシュナも微妙ですけどね。

ちなみに、中華編にはコナンは直接関与しません。この時点で蓬萊島に飛ばして、裏で何かやらせようと思ったんですが（一応）、前後がつなげそうにありませんでした。

37 Change the angle for Suzaku2 (前書き)

蘭の所は蘭の所で、少々動きがあります。

後書きは地震関連です。自己満足なので読み流して下さい (汗)

「へー……本当に物知りなんですね、コナン君は」

「でしょ？ 新一……私の幼馴染みの推理バカから聞いたっていうんですけど、普通あの歳でそんなこと覚えていないですよ」

笑う蘭は本当に嬉しそうで、聞いているナナリーもくすくすと笑った。

「蘭さんは、本当にコナン君が好きなんですね」

ナナリーが見えない視線を向けた蘭は、少々頬を染めながら「はい」と返した。

「もう、本当の弟のような気持ちです。私が辛いときに、いつもそばにいてくれて……私より辛そうな顔をするんですよ。優しい子です」

「そうですね。……ところで、私には普通の話し方をしてもらえませんか？ 敬語ではなく」

「え？ でも、ナナリーさんは皇女様で……」

戸惑う蘭に、ナナリーは微笑んだ。

「今の私は、ただのナナリーですよ。それに、改まった言葉遣いではない方が、仲良くなれた気がしますません？」

「……じゃあ、ナナリーさんも」

「私はこれが普通なんです。ねえ、スザクさん？」

突然話を振られて少々戸惑ったスザクは、すぐに笑顔をつくって応じた。

「ええ、皇女殿下は誰に対しても、礼儀正しいですよ」

「まあ、スザクさん。今はナナリーですと言ったではありませんか。私も枢木卿とは呼びしていないでしょう？」

少しふくれたナナリーに吹き出してしまった後で、スザクは言葉をなおした。

「わかったよ、ナナリー。悪かった。——それより、もうそろそろ

行かないと。会議の時間だ」

「まあ、もうそんな時間ですか。では蘭さん、またお話ししましょうね」

「はい……うん。じゃあまたね、ナナリー」

「ナナリーの話し相手になってくれて、ありがとう。ここの所、政策のことで少し落ち込んでいたから、本当に助かったよ」

「いえ、そんなこと。……それにしても、まさかコナン君が、この国の皇女様と知り合いだったなんて……。驚いたわ」

まだ少々昂揚している蘭に、スザクは複雑に笑った。

「彼女はわけあって、何年も皇族を離れて一般人として生活していたんだ。その時に、コナン君と同居していてね。とても仲良くしていたんだ」

「へー……コナン君、話してくればよかったのに。全然知らなかったわ」

残念そうに言う蘭だが、その不満に応えられる人物はここにはいない。

「コナン君は、どうして蘭さんの所に？」

さりげなく尋ねるスザクに不信感を抱いた様子もなく、蘭は答えた。

「はじめは、ご両親が入院していて、退院するまで預かってほしいって言われたの。でも一週間くらいしたら、そのご両親が急に海外出張で出発してしまつて、引き続き預かっていてくれって——それから、もう半年近くになるかな」

「その間、電話とかは？」

「電話」という言葉を使つたのは、この間コナンに聞いた、「自分達の世界では電話も旅行も自由にできる」という情報からだつた。「一度だけ、お母さんが引き取りにいらしたんだけど、すぐにまた預けに来られて。お父さんとはお会いしたことはないわね。まあ、

コナン君の養育費につて大金を下さつたし、仕事が忙しくて連絡で
きないんだとは思っただけだ」

「大金を？」

「ええ、一千万も……つて、ここではお金は円じゃないのよね。ごめ
んなさい」

慌ててごまかす蘭に構わず、スザクは話を続けた。

「大金を養育費としてくれたのに、様子を尋ねる連絡は一切なし？
変じゃないか？」

「そう言われてみればそうだけど……正直言つて、私はこのままず
つとコナン君がいてくれた方が——つて、これは私のただのわが
ままね」

寂しそうに付け加える蘭には構わず、スザクはしばし黙考した。

（養育費として大金を預けるくらいには大事に思われているのに、
様子を知らたがる様子はない……？）

家に戻して使用人を雇つたりしたほうが良さそうなものだが——
よほどその両親は、蘭を気に入っているということだろうか……？

「そつといえはスザクさん、私に用があるとか……」

「あ、ああ。実は、会つてほしい人がいてね。すぐに、というわけ
ではないけど」

スザクは、忘れかけていた本題を切り出した。

「もしかして、その人もコナン君を知っている人とか？」

「直接ご存知ではないと思うけど……でもコナン君の関係だといふ
ことは確かだね。とても……偉い人だから」

最後の一言は、蘭に届くことなく消えた。

ちよつと色々ショックなことがあつて、執筆できなくなつていた矢先に地震で日本がえらいことに……。今はまったく集中して執筆できないので、1話だけの更新にさせて下さい。

といつても、我が家はまったく無傷です。11日に少し横揺れした程度で(気のせいかと思つた)、テレビをつけて仰天しました……。被災地の方々には、多分とてもこれを読んでる余裕なんてないと知りつつも、言わずにいられません。

生きて下さい。必ず救助や援助の手が入ります。私も微力ながら募金などさせていただきます。世界中から助けがきています。

・・・大丈夫、とはとも言えない。家も職場も流されてしまった方々に、パソコンの前でのほほんと私小説更新してる小娘が何を言えるでしょうか。

私の住んでる地域も東海大地震、東南海地震の震源域とされる所なので、本当にびくびくしながら家にこもっていますが、本気で怖い。なんでここはこう来ないんだ……。

38 電話（前書き）

半月もあいてしまった・・・。
お待たせしました（汗）

38 電話

不意に震えだした携帯電話の液晶画面に表示されたのは、登録されていらない番号だった。

「もしもし」

「コナン君か？」

やっぱり、と思いながらコナンは返した。

「ナナリーさんに番号聞いたんだね？ナナリーさんの携帯にも登録してくれた？」

「ああ、……君に会ったと聞いたときは驚いたよ。まさかゼロの正体を……ってね」

話すスザクの声はどこか固い。用件をだいたい予想しながら、コナンは笑う。

「僕としては話したかったんだけどね。さすがに、あそこで暴露するのはまずい。……さすがに、混乱に乗じてナナリーさんの前に直接現れるとは思ってなかった？『遊びにいくかも』って言ったけど」
「あれだけで、そんな予想ができる人間はそうそういないよ。――
――ところで」

声の調子が変わったのを、コナンは感じた。

「そこに、ルルーシュはいるかい？」

「ここにはいないよ」

やっぱり、と思いながら答えると、一拍の間があった。

「……それは、その部屋にはいない、という意味か？」

「さあ、どっちでしょう？」

コナンがはぐらかすと、電話機の方こうで溜息が聞こえた。

「……教えてくれないか？このままだと、中華を舞台に内乱が始まってしまうかも……」

「確か、結婚式はまだだったよね。ということは、祝賀パーティー――

にでも彼が現れた？」

「ああ。シュナイゼル殿下とチェス対局なんかして。僕を景品にしようとしたよ」

「景品？……ふーん。それだけ？」

「……対局中に、乱入者がいてね。それで開きになった」

「乱入者？招待客の中に、黒の騎士団やブリタニアに恨みをもつ人でもいたの？」

「ゼロに、だよ。大切な人を殺された被害者だ。彼は、そんな人間をあちこちに生み出しているのに——」

「はいストップ」

スザクの言葉を遮ってから、コナンは続けた。

「言いたいことはわかるけど、スザクさんだってそういう人を量産してることは自覚しててね」

「……違う。僕はただ——」

「『ブリタニアの白い死神』」

スザクが、息をのんで沈黙した。一拍おいて、コナンが続ける。

「すごい呼ばれ方してるんだね。色々わかったよ、スザクさんの武勇伝」

軽く言ってから、コナンは口調を変えた。

「スザクさんの行動次第で……ユフィさんの汚名が少しでも晴れたかもしれないのにね」

返答を待たず、コナンは「じゃあね」とだけ言って通話を切った。その電話機を見ながら、コナンはひどく複雑な気持ちになった。

（彼が、あの後人命救助に奔走していれば……いや、せめて戦場から身を引いていれば、ユフィさんの名誉も少しは回復したかもしれないーのにな……）

もちろん、それは「かもしれない」の話で、それでもユーフェミアの汚名は晴れなかったかもしれない。

——でも、スザクが『死神』なんて呼ばれるようなことをしていたら、『虐殺皇女』の信憑性^{しんぴようせい}を高めてしまう。それは「かもしれない」どころの話じゃない。

(……いったい、今の彼を動かしてるものはなんなんだ?)

そして、中華の国でも気になる情報があつた。さつき、ルルーシユには伝えておいたが——。

(アイツのことだ、オレにつかめる程度の情報ならとくに知っている可能性のほうが高いけどな……)

この事態がどう動くかは、まったくわからなかった。

38 電話（後書き）

この頃、本当に執筆できないです。地震の動揺はだいぶ落ち着いてますが（被災してもいないのに何言ってるんだか・・・）いつも誰かしら家にいて、執筆に集中できない（涙）一人暮らししてた姉がこないだ戻ってきて、4月まで暇人なんですよ。ほぼ一日中家にいるという・・・。私の家は元々共働きで、昼間は誰もいないのが当然だったので、なんかストレスが。どーしたもんですかねー（苦笑）

つか、2期は本当に展開が飛びまくってて、一瞬で数日から数週間過ぎますね。小説で追っていると遅い遅い。

39 思わぬ闖入者（前書き）

お待たせしたわりに、進んでない……。本当にすみません。

39 思わぬ闖入者

厳かな雰囲気が始まったその婚礼の儀は、生中継されていた。

歳の差だけでなく身長差もすごいその二人の表情は、ほとんどカメラアングルに入らない。さっきチラッとだけ流れたが、穏やかな表情のオデュッセウスと不安そうな天子の表情はかなり対照的だった。

（そりゃそうだよなー……）

コナンは独白する。この後は、ブリタニア本土でまた盛大に祝賀会をやるらしい。家に帰る感覚の新郎とは違い、新婦は本格的に郷土を出ることになる。しかも、その目的は政略結婚で、彼女自身のことを重視している人間はブリタニアにそうそういないだろう。

これで不安にならない少女なんて、いやしない。

そんなことをぼんやりと考えていたら、急に画面の中が騒がしくなった。

「……何だ？」

——そして。

『何をもつて、この婚姻を中華連邦の意思とするか！』

カメラマンの——ほとんど反射だろう——向けた先には、長髪の武人の姿があった。すでに刀を抜き、引き連れた部下たちもみんな武装している。

『血迷うたかシンクーー！？』

『黙れジャウハオ！すべての人民を代表し、我はこの婚姻に異議を唱える！！』

優秀すぎる頭は、緊迫の中で交わされた中国語での会話をしっかりと聞き取ってしまった。……とはいえ、状況からいって、内容は簡単に想像できる。

「テ、テロリスト！？」

「いや、これって……クーデターじゃないの!？」

(——ピンゴ)

シャーリーとリヴァルの叫びに、心中だけで相槌をうつたコナンは、眉間に皺をよせた。

映っていた武人は明らかにアジア人。会話の内容からいっても、中華連邦の国内の人間に間違いはない。つまり、これは黒の騎士団とは直接関係ない、国内からのクーデターだろう。

(……これは……例の情報が、反対派にも漏れた、か——)

まあ、コナンですら知ることができた情報だ。関係者が知らなかったわけではない。

情報とは、大宦官とブリタニアの第二皇子——シュナイゼル・エル・ブリタニアとの間で交わされた密約だった。天子を第一皇子と結婚させて、中華の領土を一部ブリタニア領にするかわり、ブリタニアの貴族の位を与えられる……そんな情報を、コナンは割と簡単に手に入れることができた。が、情報統制されているだろう国内でも、すでに確定情報になっていたのか。

そうこうしているうちに、動揺したアナウンサーの声とともに放送が切られた。

「ちよつと……っ、会長は!？」

そうリヴァルが叫んだのは、ミレイが貴族のひとりとして、招待客になっていたからだだった。放送にも映っていた。

「……彼らが、どんな計画を立ててるかにもよるけどね。大丈夫……だとは思うけど……」

さすがに断言はできない。なにしろ、今回の首謀者は、この学園ともミレイとも何も関わりがない中華連邦の人間。その上、自分たちの生活がかかったのクーデターだろうから、黒の騎士団よりも手段を選ばない可能性が大だ。

「……あれ、計画のうち？」

こっそり部屋を出たコナンは、さっそく咲世子を捕まえた。彼女なら、多少なりとも事情を知っているかもしれない。

「……さあ。私は、そこまでは伺っておりません。——ただ……」
「ただ？」

ルルーシュの顔をしかめながら、彼女は続けた。

「『奴らに協力してやろうか』とおっしゃっていた事がありますから、もしかしたら……」

「ふーん……そっか」

それで、胸のつかえがだいぶ取れた。

ルルーシュが関わった上でのこの騒ぎなら、当然、婚儀の参列者にミレイが入っていることも視野に入れているはずだ。それなら、参列者に危害が及ばないなんらかの配慮はしているだろう。

「……見守るしかないね、しばらくは……」

39 思わぬ闖入者（後書き）

ここの所、色々あつて精神的に余裕がなかったせいで、執筆が進みません。

案としては、この時点でコナンを蓬莱島に飛ばして、中華のゴタゴタ中にそつちでもひと騒動起こす、なんてことも考えたのですが、突き詰めていった結果、扱いきれないことが判明しました（汗）前に書きましたコナンがナイトメアに乗る（予定）展開、とても歓迎していただいているようですが、このペースだと相当先になりそうです。といつても、活躍させる気はまったくありません（つい、コナンもそんなところで活躍したくなくろう）。軽〜く考えつつ、気長に待っていていただければいいかと。

40 新たな情勢（前書き）

後書きは、ギアス全然関係ないコナン話です。

40 新たな情勢

黒の騎士団が本格的にこの内乱に参加した——というのは、すぐに確実な情報になった。

ニュース番組に切り替わったテレビでは、反乱軍の式場への乱入から生じた隙をつき、ゼロが天子に銃をつきつけて場を掌握する様子が放送されていた。ただし、そこからは本当にカメラが切られてしまったらしく、状況はまったくわからない。

（妙だな……）

首をかしげながら、コナンは自室に戻った。

ブリタニアと中華連邦の併合を阻止するため、というなら、「天子を人質に婚姻の無効を迫る」なんて、かなり悪い手だ。そんなことをすれば、中華連邦にとって黒の騎士団は完全な悪役となり、たとえ混乱で結婚が破算になっても、その後の渡りがまったくつけられない。その国に何をしようとしても、「でも貴方は天子を略奪したことがある」という疑いの目が常につきまとうことになる。ルルーシュの描くビジョンのためには、黒の騎士団はブリタニア以外の国や組織にとっては悪役であってはならないはずなのに。

（それとも、反乱軍の中に工作員でもいるのか……？）

クーデターの予兆を、彼はつかんでいたらしい。密約のことも考えあわせると、シナリオができなくはない。

と、携帯電話が鳴った。——スザクからだった。

『結婚式が、ゼロのせいであち壊しになったよ』

意外に冷静……というより、冷徹な声に、コナンは多少不審を抱きながらも返した。

「知ってるよ。生中継してたからね。どうやらゼロ以外に、あっち

の国内勢力の動きもあるみたいだね」

『ああ。どうも、ゼロと結託したわけではないらしい。——ただ、電話したのはその件じゃないよ』

「だろうと思った。どうしたの？」

『カレンを捕虜にした』

数拍、沈黙が流れた。コナンの無言をどうとったのか、スザクは続ける。

『中華連邦軍側が捕らえたらしい。エリア11に移送する手続きをとって、僕も追撃する。カレンを失った黒の騎士団はいま敗走している。待機命令が解かれたら、ナイトオブラウンスも出撃する』

「……じゃあ、今が絶好のチャンスってわけだね。彼女から、ゼロの正体を聞き出す気？」

『知っていればね』

「知らないわけないだろ」

語調を強めたコナンの言葉が意外だったのか、スザクは沈黙した。「あの洞窟で、カレンさんが逃げ出したのはゼロの素顔を知ったシヨックからだっただんでしょ？ だったら、復活したゼロが彼なのかどうか、確かめずに従ってるわけないじゃない」

『……そんなことを言ってもいいのか？ もしも、ここでゼロがまた捕まれば……』

「そうなたらそうなたで、別のアプローチを考えるよ。現実問題として、僕がスザクさんにカレンさんを尋問するとか言ったところで、スザクさんはするでしょ。……まあ、問題はナナリーさんだけど、さすがに総督をラウンスが殺すなんて不名誉はないでしょ。もし、殺してもいいようにナナリーさんを解任とかしようとするなら、僕はどんな手を使っても、真実を白日の下にさらすけど」

『……………』

「否定しないんだね。僕にだってナナリーさんとの連絡手段があることは知ってるよね。それに、たとえ噂レベルでも、真実を伝える手段はあるよ。見くびらないでね」

容赦なく言ってから、コナンは口調を変えた。

「そうだ、ミレイさんは無事？ 参列してたのが見えたけど」

『あ、ああ』

突然の話題に、スザクは戸惑ったようだった。

『アヴァロンで保護している。会長からアッシュフォードへの連絡については、今確認中だけど、しばらくすれば会長自身から連絡が入るはずだ』

「そっか。……ありがとう」

久しぶりに掛け値のない謝辞を送り、コナンは微笑んで通話を切った。

40 新たな情勢（後書き）

久々の誰もいない日曜日！・・・ということで、珍しく更新できました。

もうちょっとしたら、オリジナル展開に突っ走る予定です（笑）

映画、いよいよ今週末になりましたね！ただ、15日にまたドラマとかやるみたいですが、私お昼から東京なんですけど・・・（ちなみに自宅は愛知）。全部録画せなアカンやん。

前にもありましたが、映画公開の前日に前作やるのやめてほしいです。あと、金曜ロードショーにするのも。前作の合間に新作の予告編を初めて見て、それから2、3日妄想に耽るのが楽しみなのに・・・（涙）タレント声優の起用といい、最近はコナンも妙な波にのまれまくりですね。

余談ですが、新EDの映像がETに見えて仕方なかった（汗）

4 1 新たな出会い（前書き）

1 か月近く経っていた・・・本当にお待たせしました。
後書きは新作映画関連です。（ネタバレはありませんのでご安心を）

41 新たな出会い

翌朝、事態は意外な方向へ収束していた。

エースを失って敗走した黒の騎士団はしばらく籠城戦をしていたが、彼らは意外なところから援軍を引っ張り出した。

大宦官と極秘回線をつないで密約のことを誘導尋問し、ついでに「主君や民なぞ蟻のようにわいてくる」なんていう、過激な発言までも中華の一般人に流した。もともと、中国の貧困層のように生活が逼迫^{へいふく}していた人民（この言い方がまた中国っぽい）はこれに激怒し、全土で暴動が勃発。黒の騎士団どころではなくなった彼らは風向きが悪いとみたブリタニア軍にすら見捨てられ、結局は反乱軍に粛清された。

注目なのは、そのときに爆撃されて殺されそうになった天子をゼロが自らナイトメアで守り、結婚式中断のときのマイナスイメージを一気に払拭してしまったことだった。つくづく要領のいい男だ。

——ただし、それとはまた別の爆弾が、もうすでに用意されていた。

「もう3日……か。さすがに長いな」

ポツリとつぶやいたコナンの台詞を勘違いしたのか、翌日に戻ってきたミレイが応じた。

「まあ、しょうがないわよ。元々スザク君、特区のときから休学するくらい忙しくなっただもんな」

「でも、もうそろそろ来てもいい頃だと思っただけどねー」

さらに主語を誤解されるのを承知で、コナンはミレイに応じた。正直スザクの事じゃないが、まだ誰も気づいていないようなので、話しても混乱させるだけだ。

——と、ドアをノックする音が聞こえた。ミレイが何かに気づいて「はい」と言うのと同時に開いた扉からは、見覚えのない生徒が2人入ってきた。……いや、顔は知っている。ただ、普通に考えてここにいるはずのない顔だった。

「やあ、生徒会というのはここでいいのか？庶民の学校というのは広いんだな。ところで、私たちの制服はまだないのかい？」

……生徒会メンバーの誰も口を開かないうちに、ここまで喋れる（しかも、問いかけらしきものが2つ）のはある種の才能かもしれない。ちなみに、まったく空気を読まないその青年とは面識は本当にはないが、その横でゲーム機のようなものをピコピコいじっている少女は、最近会ったことがあった。

「えーっと、貴方たちは……」

戸惑ったシャーリーの言葉を誤解したらしく、みなまで言わずに青年がまた口を開いた。

「あれ？私たちのことを知らないのか？いくら庶民の学校だからといっても、ナイトオブブラウンズの顔くらいは知っておいてほしいものだなあ」

嫌味のように聞こえるが、笑顔のままなので本人には悪気はないらしい。

「ごめんごめん、話すの忘れてたわ。私も、昨日おじい様から聞いたばかりなんだけど。」

——ナイトオブスリー、ジノ・ヴァインベルグ卿と、ナイトオブシックス、アーニヤ・アールストレイム卿は、しばらくうちの学校に通うことになったから」

朗らかにミレイが言ってから、リヴァルやシャーリーが反応するまでたつぷり3秒あった。

「……ええええ！？なんだって、ナイトオブブラウンズ様がうちの学校なんかに！？」

学校への侮辱に聞こえなくてもないが、この場合はしょうがないと

思う。コナンがずっと目を細めたことに気づいたのは、別の意味で固まっていた口口くらいのもだった。

「会長！！そういう大事なことを忘れないで下さいよ！こっちにだって、心の準備ってものが……」

「あら、シャーリーは平気でしょ？ルルーシュがいるんだから」

「ルルーシュ……」

なぜか少女——アーニヤが反応したが、そんなことにはほとんど誰も気づかない。勝手に意味を脱線させられて、シャーリーは赤面した。

「なっ、そういう意味じゃないじゃないですか！からかわないで下さい！」

そういう時の反応は、シャーリーは本当に蘭そっくりだった。長らく会っていないせいで、なおさら彼女が恋しくなる。

——しかし、和やかな雰囲気はすぐに消えた。

4 1 新たな出会い（後書き）

気づいたら半月も経っていた・・・恐ろしいです。

実は先週、あのシークレットナイトに行っていました、1週間そればかり考えて執筆が滞っておりまして。久々の東京でしたが、やっぱり節電やら停電やらで明かりは静か目ですね。まあ、田舎者からみれば「こんなもんで十分やん」と思うのですが。それより、たまたま入ったファミレスがオープンカフェな配置で相席上等状態だった事のほうが衝撃でした。ファミリー入りづらそう。

実はシークレットナイトは2回目だったんですが、前回（約5年前）よりもずっと色々な人とお話できました。私のまわりはコナンファンが本当に少なく、イベントなどにも行かない（行けない？）もので、同じファンの方々と話ができるとても嬉しいです。

映画はといえば、1番のクライマックスで会場が爆笑という面白い事態になっておりました。高木さんは、そこで持っていたハンカチをポトツと落としてしまったそうで（笑）アクションはコナン映画随一ですね。ありえなさ加減も随一ですが。

5月4日にもう一度観る（これ恒例です）のが待ち遠しいです。

42 新たな幕開け（前書き）

サブタイトルが思いつきません（涙）

42 新たな幕開け

「君、この生徒なの？」

不意に聞こえたその疑問が誰に向けられたものなのか、最初は、わからなかっただろう。

発した少女アーニヤと、その視線の先にあったコナンの姿に、初めてミレイはじめメンバーは、誰が誰に尋ねたものを察した。

「生徒じゃないよ。ここに居候させてもらってるだけ」

普段通りに答えるコナンだが、それが余計に不審だ。

——どうして、ナイトオブ라운ズの一人が、こんな子供にそんな質問をしているのか、と。

「なんだなんだ、知り合いか？」

やっぱり空気を読まないジノという青年が、アーニヤの肩に手を回した。セクハラだろうそれ、とは誰もツツコめない。アーニヤは無言で首をふった後、答えた。

「ナナリー総督の特区日本の式典のときに、総督に会いに来てた。ずいぶん親しい感じだった」

一瞬の静寂のあと、驚いたのはメンバーだった。

「ええ！？コナン君、皇女様の知り合いだったの！？」

「えー！私、全然知らなかったんだけど、そうなの？」

驚愕の反応を苦笑しつつ聞き流して、コナンは答えた。

「うん。前に一時期、お世話になってた事があってね。あのブラックリベリオンってやつでお互い音信不通になっちゃってたから、チャンスって思ってた無事を知らせに行ってたんだよ」

嘘ではない。いくつか事実を伏せているのは不可抗力だ。

ただし、アーニヤが聞きたいことはこれだけじゃないはずだった。

「あの時の君の言い方、ゼロのことを知ってるみたいだった」

続いたアーニヤの言葉で、部屋の雰囲気さがらつと変わった。メンバーはそんなばかな、という顔で固まり、ジノはさすがにまじめな顔になった。

コナンは少し考えてから、はぐらかすように言った。

「お姉さんがそう思うなら、そうなのかもね」

「ごまかすつもりなら、君も同罪になる」

容赦ないアーニヤの言葉にメンバーは蒼白になるが、コナンの表情はさして変わらない。むしろ、嘲笑ともいえる色が加わった。

「何罪になるの？ 反逆罪？ といっても、僕は黒の騎士団とは関わりがないし、協力したこともないよ？ それとも、僕がああ仮面の下を知ってるって決めつけて、捕まえて拷問でもするの？」

あくまで、ゼロの正体を知っていると名言はしない。このあたりは、多くの犯罪者と渡り合ってきた探偵としての経験がなせる業だった。

「言葉遊びをしている場合ではないぞ。コナン君、だったか？」

さっきまでの鷹揚おつようさとは一転、鋭い眼差しを向けてくるジノ。さすがに、このあたりは軍人だった。

「ゼロは国家反逆罪の大罪人だ。皇族殺しの犯人でもある。かばい立てすると、まずいことになるぞ」

すこむラウンズ達とは対照的に、コナンは少しだけ首をかしげると、指を一本顎につけ、なんとも呑気に返した。

「でもそれ、言っちゃっていいのかなあ？」

急に年相応の表情と口調になったコナンに少々戸惑う一同。しかし、次の言葉にはっとした。

「だって、みんなスザクさんと親しいのに、教えてもらってないんでしょ？ 僕が言っちゃって大丈夫なのかな？」

「――！」

心のすみで感じていた疑問をずばり言われ、ふたりは言葉に詰まった。

——そう。自分たちは、ゼロの正体について、スザクから何も聞いていない。せいぜい、以前のゼロと今のゼロはおそらく同一人物だろう、ぐらいだ。皇帝も宰相も、それについては自分たちの前では触れない。……なのに。

（だったら何でお前が知ってる、とでも言いたげな顔だな）

さてどうやって誤魔化そう、それともヒントの片鱗へんりんくらいは教えてもいいか——そんなことを考えていたコナンの携帯電話が、不意に震えた。

「あ……ちよつとごめんね」

発信者の名前に少々驚いて、コナンはとりあえず廊下に出た。

「どうしたの？スザクさん。尋問うまくいった？」

そして、しばしの間を置いて——。

コナンの表情は、「え？」と怪訝なものになった。

42 新たな幕開け（後書き）

このへんからオリジナル街道に入ります。正直、ビクビクしながら執筆しております（汗）ちゃんと着地できるかしら・・・。

この後の話を書くためにまたDVDレンタルしたんですが、どーも時系列がズレました。問題はシャーリーが死んじやってからののにあのへん借りてきちゃったわ。またレンタルし直さないと。買おうかとも思いますが、すでに4、5本買ってるので「これ以上増やしてもなあ」という感じです。

気が向かれましたら、感想などまた送ってやって下さい。まあ、あんまり辛口だと凹みますが（笑）

43 Change the angle for LeIouch3(前書き

早めに更新できました。
(いつもどんどけトロトロ更新やねん・・・)

43 Change the angle for Le1ouch3

——ナイトオブラウンズがアッシュフォード学園に入り、しかも生徒会に割り込んだ。

これは、ルルーシュにとって予想外の事態だった。

ラウンズが日本に集まることは理解できる。中華で潰れてくれると思っていた黒の騎士団はあろうことか天子を担ぎ上げて逆に連邦内に影響力を強め、大国中華連邦が騎士団に助けられたことで、他の国々の対応も変わりつつある。日本はいま、ブリタニアにとってただの植民地ではなくなってきた。

もつとも、そのこと自体は想定内だし、「やってやろうじゃないか」という気にさせてくれるのでさほど問題ではない。

——問題は、彼らがどこまでゼロのことを知っているか、だった。トーキョー租界に数ある学校の中で、あろうことかアッシュフォードに転入してきた。ゼロの正体を見極めたいスザクの意を受けて、潜入してきたと考えるほうが自然だ。ふたりともラウンズの数字としてはスザクよりも上だが、ラウンズというのはワン以外、序列などはほとんどなく、入れ替わりも激しい。

そして——もう一つ。

「あいつが……いなくなった？」

影武者を任せていた咲世子からの報告を受けて、ルルーシュは首をかしげた。

「正確には、政庁の関係者に親類がいて、その方のところで暮らすことにした、そうですが」

言ってから、咲世子自身も不思議そうな顔をした。

「でも、初めて聞きましたね。あの子に、そんな方がいたなんて。初めてお会いしたとき、孤児だと聞いていましたし」

あの少年——コナンのことだった。ラウンズが転入してきた次の日に、クラブハウスを出て行った、というのだ。急なことでごめんね、と言っていたらしいが、そんな親類がいるという話を少しでも聞いていたのは、ミレイだけだった。

（それは、恐らく後々黒の騎士団に移るための布石……だろうな）

この世界にコナンの親類などいないことは、ルルーシュが1番よく知っている。いや、元の世界でも、『江戸川コナン』に親類などいはしない。そして、クラブハウスを出ていくときは、自分に無理やりついて騎士団に潜入するときだと思っていた。なのに。

（俺にも何の連絡も前触れもなく、どこへ行ったんだ……？）

このクラブハウス以外に、あいつが行ける所があるのだろうか。しかも、ずっと咲世子が影武者だったと知っていながら、本物のルルーシュに会うこともなく。

（そこまで急な用事が入った、ということか？となると、あの、蘭とかいう女がらみか？）

——感じる違和感は、すぐにルルーシュの前に形となって現れることになる。

43 Change the angle for Le1ouch3 (後書き)

とうとうオリジナル街道に突入しました。あー怖い(苦笑)

ちなみに、理不尽ともいえる展開になっております。ちゃんと救済はするつもりですが(誰を、とはあえて言いませんが)一応注意書きとして、書いておきます。

4 4 暗闇の中の目覚め（前書き）

サブタイトルは気にしないで下さい。

44 暗闇の中の目覚め

うつすらと開いた視界には、見覚えのない天井があった。

「……ん……」

起き上がろうとすると、体中がずきずきと痛んだ。気づけば、至るところが包帯などで手当てされている。

「気がついたか」

不意に投げられた台詞にはつと振り向くと、懐かしい顔があった。部屋を見渡すと、やっぱり見覚えはない。しかし――。

「……ここは、黒の騎士団の施設か？」

「ああ、旗艦『斑鳩^{いかるが}』の医務室だ。波間に漂っていたところを、哨^{しよ}戒^{うかい}中の団員が見つけてな。日本人だということで連れてきたそうだ。……運がよかったな、危うく死んでいたところだったぞ」

「……………」

頭がはつきりしてくると、だんだん思い出してきた。何があったのか。

「まったく、なんだってこんなことになったんだ」

CCの、質問なのか独り言なのかよくわからないその台詞にも、コナンは反応しなかった。

できなかった。

包帯に包まれた右手で、くしゃりと前髪をつかむ。CCからは見えなくなった表情は、驚愕に染められていた。

「……どうして……」

――あいつが、あんなことを……。

その様子を見ていたCCは、やがて息をひとつつくと、また口を開いた。

「……それで？これからどうするつもりだ？クラブハウスに戻るならルートはあるが」

すると、コナンの体が一瞬びくりと震えた。口を開こうとして思い直したように少し沈黙し、結局は答える。

「……いや、あの人たちには理由をつけて、クラブハウスは出た。戻ったら不自然だよ。この恰好じゃ特にな。元々、時期をみてこっちに来るつもりだったし。悪いが、しばらく居させてもらっよ」

「……。そうか」

それだけ言つて、ＣＣが立ち去ろうとするのを、コナンの問いが引きとめた。

「オレの携帯は？壊れちまったか？」

「ああ、忘れていた。壊れてはいないぞ。防水機能がかなりしっかりしているようだな」

と言つてＣＣが脇の抽斗^{ひきだし}から取り出した携帯は、意外にもしっかりと動いていた。

それをじつと見つめるコナンに何を思ったか、ＣＣはもうひとつ息をつくつと、

「……まあ、しばらく休んでいる。ルルーシュはしばらく学園のほうで忙しいようだな、連絡がついたらお前のことも話しておこう」
今度こそ、部屋から出て行つた。

それを横目でじつと見ていたコナンは、徐に携帯を手に取ると、大きく息をついた。——体がきついわけじゃない。

メモリーを順々に出していく。どうやら、浸水して消えた番号もアドレスもなさそうだった。……連絡がとれる幸運というべきか、現実を突きつけられる不運というべきか。

（……落ち着け。落ち着いて考えろ。不可能なものを除外していくんだ。一番高い可能性は——）

そうして、しばらく考え込んだあと、コナンは抑えきれず、「くそっ！」と悪態をついた。歯が、ギリツと不快な音をたてる。

「……可能性なんて、一つしかねーじゃねーか……！」

そして、ゆっくりと発信ボタンをプッシュした。

44 暗闇の中の目覚め（後書き）

この展開をやりたいがために、蘭を出したようなものです。

実は、「いつかやってみたいな」と考えていた展開だったんですが、この話で使えそうなのに気づき、急ごしらえで考えました。現在、レンタルDVDを見ながら落しどころを考えていますが、手探りなのでどうなることやら・・・（↑おい）

そうそう、明日はコナンの誕生日記念で映画観に行きます。グッズをどれだけ買えるかな？

45 もつひとつの可能性（前書き）

ちよつとキツイ展開になっております。

45 もうひとつの可能性

「……どうしたんだ？突然……」

電話機の先のスザクは、戸惑ったような声だった。コナンは試しに言ってみる。

「本当に知らないの？あのへんだって、黒の騎士団の警戒範囲には入ってるんだよ」

「あのへん？警戒？どういうことだ？君は今、黒の騎士団にいるのか？」

「運よく拾われたからね。死ぬところだったよ」

「……そんな……まさか」

最後の一言の動揺ぶりで、大体のことは読めた。キレかけていた気持ちだが、だんだん治まってきた。

「ところで聞きたいんだけど、蘭姉ちゃんはどしてる？」

スザクはしばし沈黙した。

「……かなり、情緒不安定になっている。なぜなんだ？今までこんなことは……」

「……………」

語るに落ちすぎて、これ以上カマをかける気にもならない。それに、今はスザクのことよりも蘭のことが心配だ。

「僕と蘭姉ちゃんは、その方面には『特別』なんだよ……。わかった、そこは何か考える。また電話するから、じゃあね！」

スザクの返事も待たずに、コナンは通話を切った。無意識に、溜息がもれる。

——あのと看、スザクに呼び出されて学園を去り、やってきたコナンを海岸から突き落としたのは——蘭だった。

はつきりと思い出せる、赤く縁どられた瞳。それでも、その瞳は揺れていた。おそらく、かつてギアスによって色々と自白させられ

たコナンのように。コナンの世界の人間は、ギアスの効力が不十分になる。正確には、効力自体はあるが、この世界の人間ほど完全に自我がなくなるらない。

——蘭がギアスにかけられ、コナンを突き落としたことは間違いない。それなら、ギアスをかけられてコナンを憎まされる気持ちと、そのことにショックを受ける気持ちが混在して、情緒不安定になるのも当然だ。

「——まったく！オレを殺したいなら、なんで直接……！」

そこで、はつとする。まさか、と唇だけが動いた。

さつき、気が付いたばかりの時のCCの言葉が蘇る。

『まったく、なんだってこんなことになったんだ』

「……そついや、そつちのつながりもあつたな……」

新たな可能性に、携帯電話を戻しながら、コナンは眉間に皺を刻んだ。

と、意外にも人が入ってきた。女性だ。白衣を着ているところからして医者だろうが、煙管きせるをくわえているところからしくない。ちなみに、白い髪に褐色の肌で、明らかに南のほうのアジア人だった。

「あらあ、だめよ、まだ動いちゃあ」

気の抜けるトーンの声でコナンをたしなめると、彼女はコナンが持つ携帯電話に目を止めた。

「あらあ？もしかしてゼロに電話してたの？ボウヤ、ゼロの知り合いだつて言うものねえ。でもゼロもここんど大変そうねえ」

「……えーっと、お姉さんは？」

ためらいがちにコナンが訪ねると、女性は笑った。

「ああ、ごめんねえ。私はラクシャータ。ラクシャータ・チャウラ。黒の騎士団の技術開発がメインの担当だけど、一応医者だからねえ、ここにもたまに来てるってわけ」

「日本人じゃないの？」

黒の騎士団で日本人じゃないのはゼロくらいのものだと思っていたコナンには、けっこうな驚きだった。彼女は笑って答える。

「あんまりいけないけどねえ、そりやゼロじゃないわよ。ナイトメアや技術関係は私が責任者だし、情報操作や諜報関係の責任者は、ブリタニア人だしねえ。まあ、あいつくらいの変わり者は、ブリタニア人にもあんまりいなさそうだけとお？」

やっぱり間延びした喋り方のその女性は、コナンの包帯の具合をみると、

「んー、やっぱり数日は安静にしてなきゃだめねえ。すっごい動きたそうな顔してるけど、まア死ぬよりはましと思って、我慢してなさいねー」

そう言っつて、さっさと去っていきそうなラクシャータに、コナンは思わず声をかけた。

「お姉さん！ちよつと聞きたいことがあるんだけど……」

「ん？」

45 もうひとつの可能性（後書き）

なんかすごく不評を買いそうだなあとはいつつ、ここまで書いてきたらもう突っ走れ！と自分を鼓舞（？）しました。

ラウンズとは会わせておきたい（例の会話をさせたい）、でもラブアタックには入れたくない、と思ったらこのタイミングになりました。

んなこと聞いてねえよ！という声が聞こえてきそうですが、裏話でもすれば気がまぎれるかなって・・・（自分が）

そういえば、やっとセブナイレブンのコナン検定やりました。戦慄のフルートだけがわからなかった……。にしてもああいうエピソード集はいいですね。通勤中に読むではうるうるしております。書店ともタイアップしたキャンペーンがやっていますが、あれ困り者です。コミックスも小説も買いまくって、もはや買う本がないんですけど・・・（汗）「お金払うからスタンプだけ押してよ本は返すよー」と思いながらロマンチックセレクションを買いましたとさ。

4 6 変化の先（前書き）

サブタイトルは気にしないで下さい（汗）

46 変化の先

数日たって、やっと起き上がれるようになって、コナンはラクシヤータに教えてもらった部屋を指して艦内を歩き出した。

言われた階で降り、角をいくつか曲がると、いやに嚴重なロックのかかったドアが目に入った。

（暗証番号をどうにかすれば開く、ってわけでもなさそうだな……）
ロックの重さから、おそらくこの部屋で間違いないだろう。コナンは半ば開き直って、コンコンとノックした。

「取り込み中だ」

答える声は、どうやらCCのものらしかった。

「こつちも重要なんだけど」

少し大きめの声で言い返してみると、しばしの間を置いてドアがシュツと開いた。出てきたCCは……またずいぶんと開放的な恰好をしていた。コナンを見る目には、まさか、という驚きが見て取れる。

「お前……もう起きてきたのか。もうしばらく休んでいた方がいいと、ラクシヤータも言っていたが」

「あいにく、ぐずぐずしてらんねーんだよ」

言いながら、コナンは許可もとらずに部屋に上がりこむ。広めの部屋はすっきりと片付けられていて、テレビとソファとクローゼットがあるほかは、調度品なども見当たらない。

そのテレビに映っていたのは、意外にも学生服姿のルルーシュだった。どこか表情が硬いというか、様子が変な気がするののは気のせいか。バックはクラブハウスの彼の部屋らしい。その彼も、コナンを見て少々驚いた様子だった。

『お前……そちらにいたのか。一体、なにがあった？』

その言葉にピクリとわずかに眉根を上げたコナンは、数拍の沈黙

ののちに口を開いた。

「その前に、一つ確認したいことがある。――ギアスを解除する方法ってのは、本当にないのか？」

今度は、画面の中のルルーシュが眉根を上げる。何を言っているんだ、と顔に書いてある。

「いいから答えろ。やつば、ない、んだよね……？」

語尾だけ、頼りなさそうな響きになったのは仕方がないと思う。しかし、それならそれで他の方法を考えなくてはならない。目の前のこの男を利用することも含めて。だから。

『……なくはない』

この答えが返ってきたときには本当にびつくりした。思わず、「本当か！？」と食らいついてしまうほどには。

「なんで、ユフィさんの時にそれを……！」

『あの時には、まだなかった力だ。あのあと、例の嚮団きやうだんで実験が繰り返され、偶然に生まれた力だそうだからな。そして、その使い手は今、俺に忠誠を誓っている』

「なんでオメーに……いや、それはこの際いい。その人の力を借りてーんだよ」

『……お前がそこまで必死になるとは……誰がかけられたんだ？まさか……』

困惑している様子の彼には悪いが、コナンは首をふった。

「悪いけど、可能不可能で答えてくれ。その人がオメーに協力してもらわねーと――」

『いいだろう。これから重要な作戦行動があるから、その後になるが、手は考える。少し待て』

コナンの様子だけで、だいたいの事情は察したらしい。しかも、何か手を考えるとは、彼にしては破格の対応だ。どうやら、彼のほうにもギアス関連で何かあったらしい。

「……どうも、あつちも様子が変だな。あの教団つてやつに関して
は、徐々に情報を集めるって感じじゃなかったか？」

「あちらはあちらで、犠牲者が出たんだ。あいつ自身がギアスの使
い手なだけに、心中は複雑だろうな」

「……誰のギアスかつてのでも、事情がまた変わりそうだな」

コナンは、ちらつとCCに視線を移した。

46 変化の先（後書き）

嚮の字が、やっと出せるようになりました……。前に嚮団を出したときのパソコンでは出せなかったんですが、壊れたことが幸いした感じです。

このへんの展開としてはまあ予定通りなんですが、ジェレミアを出すつもりはなかったので、書きながら自分でびっくりしております（笑）こういうところに計画性のなさが出る……

この話にコメントを下さるのはギアスもご存じの方ばかりなので、たまーにギアス側の説明を忘れそうな今日この頃です。

47 Change the angle for CC(前書き)

謎解き前半です。

47 Change the angle for CC

「……何にも聞かねーんだな」

投げかけられた視線に、CCはふんと答えた。

「ルルーシュとが、そういう関係だからな。余計なことは言わない、聞かない。そうしたほうが上手くいく関係もあるさ」

コナンは「ふーん」と気のなさそうな反応のあと、つぶやくように爆弾を落とした。

「……………オレを殺すのは、やっぱやめたんだな」

「なんのことだ？」

とぼけながらも、CCの視線が自然と鋭くなった。それを受け止めつつ、コナンはさらっと言った。

「誰が何の目的でオレを殺そうとしたのか、だいたい見当はついてる」

「ほう。それが私だと？」

コナンが首をふった。

「あんたは直接関わってないはずだ。ただ、オレの身に何か起こるくらいは知ってたんだろう。しかも、あんた自身は別にオレの死を望んじやいない。だからこそ、オレが死ぬまえに拾われたのを手当てさせて、この斑鳩…だったか？ここに入れた」

「ほう。なぜ私が知っていたと思うんだ？」

「オレが気づいたとき、あんたが言った言葉だよ。正直、2人の容疑者のうちどっちが実行したのかは、推測でしかなかった。あんたはルルーシュとも、『もう一人』とも関わりがあるみてーだからな。あのとき、あんたはこう言ったな。『なんだってこんなことになったんだ』って。で、さっき話したルルーシュはこう言った。『何があった？』この台詞の違いに気づけば、おのずと答えは出る」

「……同じような言葉に思えるがな」

コナンはまた首をふって、続けた。

「同じようで、確実に違うんだよ。『どうしてこうなったんだ』は、『何が起こったのか』はちゃんと把握して、その上で現状を嘆いたり、呆れたりするときの台詞だ。」

それに対して『何があった』は、文字通り、何があったのかまったくわからないときの台詞。つまり、あんたが何も知らなければ、ルルーシュと同じこっちの台詞が出てくるはず。あんたはオレが意識を取り戻した時すでに、何があったのかはわかってたって事になる」

「……それで？私からなにを聞きたい？言っておくが、答えたくない質問には私は絶対に答えないぞ。ルルーシュに対してもそうだからな」

「別に聞きたいことなんてないさ。言ったら、だいたいのところはわかってる。しかも、あんたに話すとそっから『その人物』に筒抜けになりそうだしな」

「『その人物』とは誰のことだ？」

答えはほとんどわかっていたが、少年の口からは少々回りくどい答えが出てきた。

「オレがまだ会ったことのない、ギアスの使い手だよ」

47 Change the angle for CC（後書き）

本編でジエミア再登場から嚮団襲撃までの期間がわからん……。本当に2期はシーンがブツ切れです。

ちなみに、シャーリーのことを前話で入れなかったのは、「コナンが経緯を聞いたら、絶対嚮団の襲撃に反対して、それこそスザクとかも巻き込んで阻止しただろう」と思うからです。ストーリーが変わっちまうぜ（汗）

あ、でもシャーリーのこと自体は後程ちゃんと説明しますので、これ読んで「何のこっちゃ」と思われたギアスをご存じない読者様も、ご安心下さい。

48 真相（前書き）

長い謎解きです。というか単なる推理です。

48 真相

——容疑者は、最初から2人しかいなかった。

蘭を操り、『一人で』コナンを突き落とすなんてさせられるギアスを、コナンは2つしか知らない。ルルーシュの『命令を遵守させるギアス』と、——『他人の記憶を書き換える』という皇帝のギアスだ。記憶を書き換えてある人物を恨んだり憎んだりする設定を入れれば、都合よく殺させる事ができる。

だから、目覚めたときは、とつさにルルーシュの仕業かと思った。ただし、それはCCの姿を見つけたときはかなり薄らいだ。——ルルーシュがコナンを殺そうとしたなら、CCが助けるとは考えづら。しかも、運び込んだ場所は黒の騎士団の内部だ。まあ、もうひとつには、スザクが保護している蘭を、そうそうルルーシュが操れるとは思えない、というのもあったが。

そして、CCの様子から、犯人は皇帝だろうというのはほぼ確信できた。おそらく、CCにはルルーシュも知らない皇帝とのルートがあり、そこから皇帝の意向を知ったんだろう。元々、CCを捕まえるために学園を一つ使うくらいだ、彼女とは親交なり利害関係なりがあったと考えるほうが自然だ。

（そして、その目的は——）

最初は、コナンを殺すことだろうと思った。が、すぐに疑問がわいた。

——皇帝がコナンを殺したいなら、スザクに殺させればいい。わざわざギアスを使うよりも、権力を使って部下に命じたほうがよっぽど手っ取り早い。それとも、アッシュフォード学園に派遣してあるルルーシュ監視グループでもいいか。どっちにしろ、蘭を使うのは手間こそあれ、メリットがない。

（……ただし、目的が他にあるなら、別だ）

仮定を一つしてみれば、簡単だ。——コナンが死ぬこと自体は、重要じゃなかったとしたら？

蘭がギアスにかけられたということを、コナンが思い知ること。これが目的だったとしたら、すべて辻褃^{つじつま}が合う。

皇帝は、コナンが死ねばラッキー、死ななくても構わないと思っていた。だから、コナンの死を確かめる前に黒の騎士団に拾われても放っておいたし、CCもコナンを手当てした。

なら、どうしてそんなことをする必要があったのか。——考えられるのは、コナンとある人物を疎遠にすること。

（オレが事態を把握したら、まっさきに怒りをぶつけるのは……スザクさんだろうな）

蘭を皇帝のもとに連れて行っただろうスザクに、コナンは恨みにも近い感情を抱く。電話で会話するのも嫌になるだろう。そうなれば、コナンはブリタニアの権力側から遠ざかることになる。おそらく、狙いはそれだ。

皇帝が、どうやってコナンの存在を知ったはわからないが、皇帝には、侵略主義以外に何か秘密の目的がある。それにコナンが感づく前に、政府から遠ざけてしまおうという事だろう。皇帝にすれば「邪魔な芽は育つまえに摘む」ということだろうが、墓穴を掘ったわけだ。

医務室で考えをまとめたコナンが出した結論は、一つだった。

（なら、オレがするべきなのは、密かにスザクさんとのラインを確保する事……かな）

携帯電話を取り出すと、ちょうどいいタイミングでそれは鳴り出した。

「！」

発信者を見て、コナンはさっとその部屋を出た。周囲に誰もいな

いことを確認した上で、通話ボタンを押した。

「何？スザクさん。あの話なら、何か手を考えてまた僕から――」
言葉は途中で切れた。受話器から聞こえてくる言葉に、一瞬止まったコナンの表情は、別の意味で驚きに染まった。

「……シャーリーさんが？」

48 真相（後書き）

はい、やっと種明かしです。一応筋は通った動機になった・・・はず。

正直、これ以上いじくり回すと本当にカオスになりそうで、そこそこ理屈が通るうちに強引にまとめました。平伏。

ちなみに、シャルルさんの壮大な（？）計画については、コナンは深く踏み込まない予定です。（だってどーしようもないじゃんあんなの・・・汗）

知らないうちにアクセス数が10万を突破しておりました。こんな拙い話に付き合って下さって本当にありがとうございます。また感想など頂けると励みになります。

49 動く事態

それを告げる彼の声は、かつてコナンを捕縛しようとした、あの洞窟のときのように低く、表情をなくしていた。

『発見されたのは、イケブクロ駅の構内。拳銃で腹部を撃たれて、鑑識は自殺だと言っている』

スザクが語った始終はこうだった。

その日、シャーリーは話があるとスザクを池袋の駅に呼び出したが、この時点ですでに、彼を見て怯えるような様子だったらしい。そこに偶然、ルルーシュもやってきた。彼女はさらに思いつめたように、「嘘つき」「偽物」と言いながらビルの上から自殺をはかった。しかし、それが落ち着くと、すっかり元の彼女に戻った。誰からかかかってきた電話に出たルルーシュを残し、駅から離れてシャーリーがスザクに告げた言葉は、「私はルルーシュが好きで、すでに彼を赦した」という妙な言葉だった。

詳しく意味を聞こうとしたとき、駅ビルで騒ぎが起きた。スザクはテロの可能性を考えて現場に向かい、彼女のことは警官の一人に任せた。結局、ただ煙幕がたかれただけで、そこでその騒ぎは収まった。しかしその後——その駅ビルの中で、撃たれてこと切れている彼女が発見された。

ちなみに、ルルーシュはそれから一度も姿を見せず、葬儀にも出席しなかったため、事情も聞けないのだという。

『……そろそろ、はつきりさせよう』

事情を説明したスザクは、やっぱり低い声で続けた。

『ゼロは……復活したゼロは、ルルーシュなんだろう？機密情報局のメンバーがギアスにかけられていた』

「……なら、もう誤魔化す必要もないね。——それで？」

『？』

コナンの言わんとすることがわからなかったらしい。先を促したのはスザクのほうだった。

「……あのさ、なんでルルーシュがずっと学生生活を続けて、自分がゼロだとバレないようにしてたかわかんない？あと、なんで僕がずーっとそれをスザクさんに言わなかったのか、わかんない？」

『……………』

「ゼロの正体がわかって、真っ先に矛先が向くのは誰かってこと。

——ナナリーさんのことだよ」

『！』

電話口で息を呑んだような反応にコナンは溜息をつき、かつて自分が言った言葉を思い起こした。

——兄がまた反逆者になったとわかった日には、理由もわからず殺されるのかな。それも、兄の友人として信じてた人に——

そう——ルルーシュが、本来なら必要のない二重生活を続けていたのは、ナナリーの身の安全を確保するため。そして、コナンがゼロの正体を言わなかったのも、スザクがナナリーを殺さないという確証が得られなかったからだ。

しばしの沈黙は、彼がそれを考えていなかったという事か。

『……僕はただ、あいつの正体を突き止めようと……ユフィの敵を討とうと……………』

「ユフィさんの敵さえとれば、他の人間はどうなってもいいってこと？」

言葉が出てこないらしい彼に、コナンは話題を戻した。

「にしても、シャーリーさんが言ってたっていうのは気になるな。

「嘘つき」や「偽物」はともかく、「ルルーシュを赦した」っていうのは、彼女が記憶を取り戻していた、ともとれる」

『……そうだ。だから、彼女が自殺でないとすれば、1番あやしいのは――』

「ただし、引つかかる点もある。スザクさんにすら怯えていたというなら、ギアスの記憶改変が解けていた可能性が高い。けど、そんなことができる人間がいるのかどうか。そして、「ルルーシュを赦した」という相手……しかもとても親しい人を、あいつが口封じするのかどうか……あれ？」

さてよ、とコナンは自問した。

確か、ルルーシュとの通信のとき、彼は言っていた。ギアスを解除する能力がある人物がいる、と。

——もしかしたら、池袋での騒動はその人物に関係していて、それに巻き込まれてシャーリーのギアスが解けた……？

「……あいつが戻ってきたら、何か知ってるかどうか確認する。近いうちに、シャーリーさんのお墓詣りも兼ねて日本に戻るよ。じゃあね」

通話を切って、コナンは一息ついた。

天井を見上げれば、彼女の笑顔が浮かんでくる。

「……なんで、あの人が……」

歯をくいしばる代わりに、コナンの口からは、ただ息が漏れた。

49 動く事態（後書き）

あの状況で「犯人はルルーシュ」だと思うのは、スザクぐらいでしょうねー。

第三者からみたら、動機はないわ証拠はないわ。普通はリヴァルミ
たいに「恋人が死んだショックで部屋にこもってる」と思うわな。
私はシャーリー好きだったので、マジでショックでした。シャーリ
ーが死ぬことを初めて知ったのは小説版からだっんですが、丁度
そこで本が終わったので、1か月くらいは「何故に!？」を頭の中
で繰り返ししていましたよ。でも1番残念だったのは、お腹を撃たれ
て今にも死にそうっていうシャーリーがペラペラ喋ってた事でした
けど・・・。

50 変容

翌日、戻ってきた彼は、またどこか様子が変わった。——けれど、彼女はもつと変になっていた。

「……………えーっと、何があつたんだ？」

声をかけたらあつさりと開いたあのゼロの部屋で、CCはまるで別人になっていた。終始おどおどし、わずかな物音にもびくつき、口調は丁寧というより卑屈。あの傲然とした彼女と、同じ人物とは思えない。

「…あ、あの、ご主人様のお知り合い、ですか？」

開口一番こんなことを言われたコナンがしばし呆氣にとられたのは、無理もない。

「……………CCは、記憶を失つたんだ」

そうルルーシュに言われても、「いや、なんか違うだろ」と思つてしまったのも。

「……………それで、なんでこんなに性格変わつてんだよ」

拳句メイドカフェみたいに『ご主人様』呼びになつてんだよ、と付け加えるのはやめておいた。この世界にそんなものが例えあったとしても、正直この男には通じてほしくない。

「オレも記憶喪失の人には会つたことがあるけど、様子が変わにはなつても、こんな別人みたいな態度にはならなかったぜ」

それが蘭だという事はこの際措いておく。ルルーシュはしばし言葉を探していたようだったが、

「CCの過去は色々複雑でな……………とはいえ、俺もあまり詳しくは知らないが。幼い頃、あいつは奴隷だったようだ。ギアスに出会つて生活は改善されたが、今はその奴隷のままであいつの記憶は止まっている。——あいつのことはしばらく、他の団員には伏せておく。」

「お前も口外するな」

それ以上説明する気はないらしく、彼は顔つきを変えた。

「ところで、お前は以前の通信で話したときに言っていたな？ギアスを解除する能力がほしいと」

「……ああ。あいつにかけられたギアスを解除したい。もしくは、その前後の記憶を消したい」

迷いない言葉に、彼は少し驚いたようだった。

「……ギアスの解除はともかく、記憶を消したい？それはまた、お前らしくない願いだな」

言いたいことはわかった。

——コナンはずっとギアスを忌み嫌っていた。そのギアスの解除は当然望むとしても、その記憶を消すということは、新たなギアスをかけるということだ。

「あいつは、オレのせいでギアスに巻き込まれて、今も苦しんでいるんだ。ギアスに苦勞するなんて、オレだけで十分だ」

それだけで、ルルーシュはだいたいの事情を察したらしい。考え込むような仕草をしたが、結論はすぐに出た。

「そうだな——今はナナリーの安全もさしあたって確保された。次の戦闘まで、多少の余裕はある。……ジェレミアをしばらく貸してやろう」

「ジェレミア……って、ブリタニア人なのかその人。あいつは日本人なんだけど」

「ああ、心配ない。前にも言ったが、俺個人に忠誠を誓っている男だ。俺の命令にならなんでも従う」

「……なんで、オメー個人に？」

それこそギアスでも使わないとそんな風には——と訝るコナンに、ルルーシュは、今度はつまらなそうに思案したが、長くはなかった。「元々は、俺の母に忠誠を誓っていたんだよ」

「……オメーの母さん？って、何者……？」

前に調べたときは、第5后妃としか載っていなかったはず。そんな激烈な支持を受けるような聖人だったのか——と思えば、返ってきたのはびっくりな答えだった。

「母さんは元軍人で、ナイトメアの騎士として有名だったからな」

「どうも、人間ってのはわかんねーもんだな……」

以前、ルルーシュの過去を調べたときに、一度だけ見た后妃の姿を思い浮かべながら、コナンはしみじみつぶやいた。どこからの遺伝なのか、黒髪を美しくたらしめた上品な女性、という印象だったのに。

部屋を出たコナンは、一息をついて表情を改めると、ある番号を押した。

「——あ、もしもし？僕。コナン。ゴメンね、しばらく連絡なくていや、会いたいなーと思って。……今度は、ちゃんと正面からさ」

50 変容（後書き）

話が進まなくて。本当にすみません。んー・・・なんでこんなにトロイのか。いや、本編がぱっぱと進みすぎなんですよね！きつとそうだ！（おい）

いつも読んでくださって、ありがとうございます。

「——話がついたよ。明後日、エリア11にいったん戻る」

そう告げられ、ルルーシュは見ていた書類から少しだけ目を離した。

「ジェレミアを、連れて行くつもりか？」

コナンは肩をすくめた。

「政庁に直接行くつもりだよ。前もってナナリーさんに頼んで、オレが乗るナイトメアを攻撃しないようにしてもらおう。この人が行くのはマズイなら、外でそのキャンセルってやつだけ使ってくれればいい」

ジェレミアを示しながら語るコナンだが、さりげなく混ぜられた言葉に、ルルーシュは顔をしかめた。

「……。……待て、『お前が乗るナイトメア』だと？」

「ああ、ナイトメアを1機貸してくれるように、ラクシャータっていうお姉さんに頼んである。とはいえ、使いたい機能は飛行と基本的な動作、あと通信機能くらいだけだな」

むしろ、下手に高性能なものを借りたくない——と、小声で付け加えるコナンだが、そんなことはもう聞いていなかった。

「……待て。ラクシャータは許可したのか？」

「ああ、今は大規模な戦闘もねーから、1機ぐらいなら大丈夫だろうって言ってたぜ？どうもオメー、戦闘より外交にかかりつきりみてーだな」

いきなりの事態に、ルルーシュは一瞬気が遠くなった。

「……ジェレミア。お前のあのサザーランドに、こいつを乗せることはできるな？」

「はい」

唐突に振ったにも関わらず、ジェレミアの答えには淀みがなかつ

た。

——ジェレミアの専用機である、改造型サザーランド。子供一人くらいなら、運ぶことは容易だ。

「オメーがそれでいいなら、オレは構わねーけど。そうすると、面倒なのはオメーとこの人じゃねーか？」

視線でジェレミアを指すコナンに、ルルーシュは言わんとすることを察した。

——ナナリーの客人としてこいつが招かれるというなら、到着時のナイトメアはひとまず攻撃対象から外れる。ただ、コナンが何日滞在することになるかはわからないし、下手をしたらスザクの介入で、戻れなくなることも考えられる。何より、ジェレミアと彼のサザーランドが直接政庁に接近するというのは、今後の戦闘のことも考えると、できるだけ避けたい。

結局、量産タイプのナイトメアを1機、設定を多少変更してコナンに与えるのが、1番最悪の事態になりにくい、ということになる。

「まあ、ナナリーさんの様子見がてら、カレンさんにも会えたら会ってくる。……そのくらいはしてやるよ。とはいっても、作戦の手助けはしねーけどな」

「ブリタニア軍の手助けも、するつもりはないのか？」

「オレは、戦闘に直接かわる気はない」

断言しておいてから、少年はわずかに雰囲気を変えた。

「……ところで、行く前に確かめておきてー事があるんだけど」
「何だ」

彼は、少しの沈黙の後、その名前を出した。

「シャーリーさんを殺したのは、誰だ？」

51 Change the angle for LeIouch4(後書き

やっと後書きの前フリ(?)が一つ実現しました・・・。あかん、
コナンとジェレミアって絡めづらいです(汗)

引き続き、ルルーシュ視点です。

「……俺だとは、思わないのか？」

質問に質問で返す形にも、コナンは構わないようだった。

「その可能性はあるが、そうじゃない可能性のほうが高い。オメーに彼女を殺せるか？ かつたら、微妙に疑問符がつくんだよな。――

とはいえ、関わってること自体は確信してるけどな。特にこの人」

投げられた視線の先にいたのは、ジェレミアだった。

「スザクさんが言うには、彼女には記憶が戻ってたような様子があったらしい。そこだけ考えれば、オメーはクロだな。でも、こないだのテレビ電話でオメーの様子がおかしかったのは、彼女のことが原因だろ？ 自分で殺したなら、それは覚悟の上。平然としてるはずだ。―― いったい、池袋の駅で何があったんだよ？」

「……………」

長い沈黙にも、少年は待っていた。知らず顔が歪んだのは、仕方がないことだろう。

「……俺が、殺したも同然だ」

ジェレミアは、何を思っているのか、痛ましそうに顔を曇らせた。対照的に少年は顔をしかめた。

「同然…… ってことは、実行犯は別にいるんだな。誰なんだ？」

一息ついて、ルルーシュは答える。

「―― ロロだよ」

さすがにコナンが怪訝な顔をした。自嘲的な笑いが漏れる。

「…… 動機は何だ？ ロロさんに、シャーリーさんを殺す理由が？」

「俺の秘密を守るため、だ」

今度こそ、痛い沈黙が流れた。自分が一気に疲れた顔になったことに、ルルーシュは気づいていない。

「お前の推察通り、シャーリーはジェレミアのギアスキャンセラー

に巻き込まれて、記憶が戻っていた。

スザクを呼び出したり、ビルの屋上から飛び降りようとしたのは、その混乱からだ。……まあ、当然だな

。ある時、突然、思い出してしまったのだから——ナナリーが学園にいたことも、俺が父親を殺したことも。

そして、それに気づいたロロが、秘密保持のためにシャーリーを殺したんだ。彼女の口から、俺の……ゼロの正体が外部に漏れることを恐れてな」

「……………」

コナンは動揺しつつも、頭の中で整合性をとろうとしているようだった。

「…………それは、本人がそう言ったのか？」

「ああ、悪びれもせずに話してくれたよ。……俺の大切な人を殺したことをな」

「ルルーシュ様……………」

ジェレミアの気遣わしげな言葉にも、ルルーシュは構わなかった。原因が自分にあることに、変わりはない。

しかし、その事実を消化すると、すぐに別の懸念が出てくるところは、さすがと言っべきか。

「…………おい。ってことは、ロロさんはどうしたんだ！？まさか——」

「殺してはいないさ。……残念ながら。あいつは騎士団に入れて、ヴィンセント——ブリタニア軍から、前に鹵獲ろかくした機体に乗せている」

それを聞いても、コナンの顔は晴れなかった。

「…………いずれは、彼を殺す気か？」

「そうだな。用が終われば」

「……………」

手をぐっと握りしめ、しばし何かの感情をこらえたような仕草の後、コナンは静かに口を開いた。

「……出会ったのがオメーでなければ、彼にだって、まっとうな幸せってもんがあっただろうにな」
強い眼差しを向けてくるわりに、コナンはそれ以上何かを言うことはなかった。

このへんの口口は、また絡めづらいですね。コナンが完全に傍観者になつとる・・・。

更新遅い上に、話進まなくてごめんなさい(汗)

53 不審（前書き）

「ちょっと一休み」の話です。

「……あの、どうかされたんですか？」

その言葉にはつとずる。見上げると、心配そうな顔で『CC』がコナンを覗き込んでいた。とはいえ、双方の間に少し距離はあるがどうやら『ご主人様』はルルーシュだと決めたらしく、彼女がコナンに話しかけることはほぼなかった。…というか、自己紹介したにも関わらず、まともに名前すら呼ばないのは、今の人格に原因があるのか。

最初は思いつきり面食らった彼女の豹変ぶりだが、半日も一緒にいればさすがに慣れてくる、順応性は高いコナンだ。

現在、『ゼロの私室』だったはずのこの部屋は、完全に『ルルーシュが表に出したくない人間の隔離部屋』となっていた。

「……ううん、別に。明日からしばらく出かけるから、そのことでね。——にしても、本当に別人だね……」

しみじみと見るも、彼女は不思議そうに首をかしげた。整った容貌だけに、例えば帝丹高校のクラスメイトなんかにはモテるだろう。

「……ねえ、聞いてもいい？」

「はい？」

「ここに来てから今まで、ルルーシュ…あのご主人様以外に、誰かに会った？」

「誰かに…？あの、ご主人様にお仕えしている方とあなたには、お会いしていますか？」

いや、そういうことじゃなくて…と、コナンは苦笑した。

「誰かから、何か連絡があったりしなかったかな、と思って」

コナンの考えが正しければ、CCには皇帝——つまり、ブリタニ

ア側の誰かとの独自のラインがあるはずだ。それも、スザク達と違って表舞台に出ない方向の。

しかし、コナンの見るかぎり、ここ数日彼女が誰かと接触した様子は無い。しかも、どうやら携帯電話などの先端機器には慣れていないようだ。——となると、疑問が出てくる。

（CCさんが連絡をとってた皇帝さん付近の人物は、ここんど彼女から連絡が途絶えているのに、不審に思っ
てねーってことになる……）

ルルーシュの話を聞くかぎり、この間の出撃の時も、彼女はほぼずっとルルーシュか、もしくは黒の騎士団と行動していたらしい。となると、ここに戻ってくるまでの間に連絡することはできないだろう。なら、別の方法で彼女に接触しようとしても不思議じゃないのに、その様子がない。

（……一体、どういう事だ……？）

仮に騎士団に内通者がいたとしても、コナンやジェレミアに気づかれずにここに入出入りするなんて事ができるとは思えない。——この部屋に入るには、いくつものロックを解除するか（番号やパスワードは定期的に変えられているだろう）、中にいる人間に開けてもらうしかないんだから。幹部ですら、無断で入ることはできないはずだ。

（どうも、それがこの事態を動かす鍵になりそうな気がするんだけどなー……）

ナナリーと約束した対面の日は、明日だ。

54 出発

『暁』という種類のそのナイトメアは、ずいぶんと目立たない、暗色系で統一されていた。よくあるロボットアニメではかなり派手なイメージだったが、ロボットといっても色々あるらしい。

使用目的からいってゴツイのは当たり前だが、それでもコナン仕様に、彼女——ラクシャータは多少いじってくれたらしい。コックピットに乗るためのワイヤーも、普通のよりかなり長いようだった。説明書は読んだあ？

「うん、大丈夫。お姉さん日本語書けるの？」

彼女はころころと笑った。

「そりゃあ、日本人の組織とけっこう付き合ってきたからねえ。ゼロだってトライリンガルだし。このご時世では当然よー？」

「まあ、そりゃそうか……。にしても、ありがとね、わざわざ」

「あらあ、ボウヤは素直なのねー。あっちの新入り君とか、ほんと無口でねえ。どうして黒の騎士団に入ったのかしら」

そういった彼女の視線の先には、無表情なロロがいた。コナンがいることに驚いている様子だ。ダイビングスーツみたいなものを着こんでいるが、多分あれがパイロット用スーツなんだろう。

「ロロさん——」

「君も黒の騎士団に？」

いつも通りの、あまり抑揚のない声で、先に話しかけてきたのはロロのほうだった。

「色々あって、今はこっちに居候。…丁度いいや、ちょっと話がある」

ラクシャータが、意外な組み合わせに不思議そうに首をかしげていた。

「シャーリーさんを殺したっていうのは、本当？」

その名前を出されても、彼はたいして表情を変えなかった。

「そうだよ。シャーリーさんはゼロの正体を思い出していた。放っておくと、兄さんにとって危険だから」

淡々とした口調に、コナンは思わず叫んだ。

「ロロさんが尽くすほど、あいつはロロさんを大事に思っていない！前にも言ったでしょ！？…あいつは、ロロさんを憎んでる。殺したがつてるんだ！」

「兄さんは、僕に『よくやった』って言うてくれたんだ」

動揺を隠すためか、声音が若干かたくなっている。コナンは首をふって否定する。

「利用価値のあるロロさんを、あいつが素直に『殺したい』とか言うわけないじゃない！僕が前に『自分で考えるべきだ』って言ったのは――」

「僕には、兄さんしかいないんだ」

コナンの言葉を遮るように、ロロはつぶやいた。コナンを視線から外し、独り言のように続ける。

「僕は兄さんとともに進む。君にだって、邪魔はさせない」

「あ、ちよつと……！」

返事を待たず、ロロはコナンの横を通り過ぎて去った。

「つたく……」

『暁』に乗り込むと、コナンは渡されていたメモリースティック型のキーを差し込む。と、目の前のモニターや、周囲の機器に次々と光がともった。表示が全て日本語なのがおかしいところだ。

「えーっと、起動…に、これが手足……」

動作を確認しつつ、まわりを見渡す。いいタイミングで屋根が取り払われた。ラクシャータが操作してくれたようだ。飛翔させると、すでにジェレミアらしきナイトメアがそばに浮いていた。

『動作に問題はないか？』

通信機から聞こえた問いは、メカの機能のこととコナンの操作の

こと、両方の意味だろう。

「大丈夫、イケそうだ」

少々長い旅が、始まった。

54 出発（後書き）

ようやっと出発・・・遅。本当は、この後1話ぐらいかけてコナンのナイトメア超テクをやらせたかったんですが、断念しました（涙）ちょっと事情がありまして、来週からは更新頻度がまた落ちそうです。

毎日アクセスして下さる読者様、遅筆でごめんなさい。

55 繋がったピース（前書き）

更新遅くなってすみません。

55 繋がったピース

『もう一度聞くが、計器に異常はないな？』

子供相手でも砕けない口調。ジェレミアは、生粋の軍人のようだった。

「大丈夫だよ。マニュアル説明書も頭に入ってる。……ところでさ」

『何だ？』

「お兄さん…ジェレミアさんは軍人なんだよね？どうしてルルーシュに従うの？」

ルルーシュの話では、彼の母親の影響で、彼個人に忠誠を誓っているらしい。にしても、憧れの人の子供だからって、そんなこと簡単に決意できるとは思えない。

黙殺されるかと思っただが、彼はしばしの沈黙の後、律儀に答えた。

『ルルーシュ様の母君——マリアンヌ様は、私たち騎士にとって太陽のような方だったのだ。庶民の出であつたにも関わらず、その才能から騎士となり、ラウンズにまで見いだされた方だ。后妃となられたことで戦場からは退かれたが、その雄姿は今なお、我らの語り草なのだ』

「ふーん……」

本当に有名人だったらしい。にしても、すごいナイトメア乗りとルルーシュでは、あんまりしっくりこないのはコナンだけなのか。

「祖国と天秤にかけても、勝っちゃような忠誠心なんて、僕にはよくわからないけど……それより」

『何だ？』

本題に入り、コナンは口調を変えた。

「ナナリーさんには、ジェレミアさんのことは通してないんだ。さすがに攻撃される前になんとかするけど、色々確認させてくれる？」

——まず、そのキャンセラーってやつの効果範囲」

その範囲は、コナンの予想よりもかなり広がった。

「それはナイトメアの装甲越しでも、ビルの壁越しでも有効なんだね？」

「ああ。それは間違いない」

「……にしても、なんでそんな不用意にキャンセラーを乱発してたの？どこにギアスの影響があるかわからないんじゃない？」

「それが、嚮団の当主の意向だった。どこに、ルルーシュ様にギアスで操られた者がいるかわからないから掃除しろ、とな。とはいえ、心服していると思わせるために従っていただけだが」

「……じゃあ、どうして今は堂々とあいつに従ってるの？」

通信機からは、驚きの事実が飛び出した。

「嚮団はすでに無いからな。先日 of 戦闘で、黒の騎士団の一団が殲滅した。当主もすでに死んでいる」

「……」

——シャーリーの不審な行動と、その死。様子がおかしかったルルーシュ。彼が口にした『作戦行動』。ギアスキャンセラー。そして、人が変わったCC。……バラバラだったパズルが、どうやら繋がった。

ジェレミアのキャンセラー乱発に、シャーリーはたまたま出くわしてギアスが解け、記憶が戻った。不審な様子はそのせいだろう。しかし、スザクの話を考えて、シャーリーはゼロのことも諸々含め、ルルーシュを受け入れたのかもしれない。そんなことは知らない口口は秘密保持のために彼女を殺した。——ルルーシュは、怒りの矛先を嚮団に向け、黒の騎士団を使って彼らを潰した。そして、その時何かトラブルがあつて、CCは記憶を失ったんだろう。

「……なるほど。つまり、あいつはしばらく協道にそれたって事か。だから、蘭のギアスを解くためにあなたを貸してくれたのか」

同じようにギアスの被害で命までも落とした、シャーリーのこと

を思い出して――。

「じゃあ、もう一つ。ジェレミアさんは軍人みたいだけど、黒の騎士団のメカといっしょに政庁に行ったりして大丈夫なの？」

「私は、公的にはすでに死んだことになっている。政庁にも当然、知り合いはいるが、ナイトメアから出なければ、私だとはわかるまい」

「……なんだって、そんなことになってんだよ」

思わず地の声が出た。

『色々あつてな』

どうやら、そのあたりを詳しく話してくれる気はなさそうだった。

2機のナイトメアは、エリア11――かつての日本の領空に入ろうとしていた。

55 繋がったピース（後書き）

このへんは完全に創作できる分、まだ書きやすいですね。でも、この先で意外に手こずってます（汗）つか、ナナリーはシャーリーの死を知らされたのか？

最後まで知らなくても本編の展開には影響なさそうですね。でも、さすがに知っというてほしい気もする・・・。

そして、コナンとジエレミアの絡みが個人的にもすごいミスマッチで、書いてて楽しかったです（笑）

56 再会2（前書き）

やっとここまできました。

56 再会2

「あ、ナナリーさん？もうすぐ、そっちから見えると思うけど――」
ファクトスファイアと呼ばれるカメラからの映像を見ながら、話しかけた携帯電話からは、少々懐かしい声が聞こえた。

「はい、もう監視網に捉えていますよ。ところでコナン君、あなたの近くを飛んでいるナイトメアがあるそうですが……」

「ああ、それはただの付き添い。用が終わったらすぐに帰ってもらうから、大丈夫だよ」

「用……？」

不思議そうに首をかしげていそうなナナリーの問いかけは流して、コナンは本題に入った。

「ナナリーさん、蘭姉ちゃんは来てる？」

「ええ、先程から付き添ってもらっています。もちろん、警備の方もいますけど」

コナンは、一呼吸おいて言った。

「できたら、蘭姉ちゃんの顔を1番に見たいんだ。……いい？」
なるべく意図した伝わり方になるように、ためらいがちな口調をつくる。「……内緒で」と付け足したら、コナンの言わんとするところは伝わったらしい。くすつと笑うナナリーの声が聞こえた。

「わかりました、内緒にしておきますね」

政庁の裏口が見えてくると、人影がひとつ、先行して出てきた。コナンはカメラのズーム機能で、それが蘭だということを確認する。小さな体の動きだけでも、戸惑っていることがわかる。……だから、ナナリーが気をまわして蘭を先に出してくれるよう頼んだのだ。蘭にコナン直接「一人で出てきてくれ」と頼んだところで、未だに混乱して不安定な蘭が出てきてくれるかどうかわからない。

「……あの人が効果範囲に入るように。できる？」

『了解した』

通信機から応答があった直後、妙な感覚がコナンを襲った。

——かつて、録音だけで聞いた会話。威圧的な、しかし動揺したルルーシュの表情と声、そして答える自分。その自分をじっと見て、最後に名前だけを訪ねてきたCC——。

頭の奥から引っぱり出されるように、記憶が入り込んできた。それは、かつてルルーシュにギアスをかけられた時の、コナン自身の記憶。

ジェレミアが、キャンセラーを発動させたのだと、実感した。

『では、これで失礼する』

別れの言葉までも律儀なジェレミアに、返答する余裕は残念ならなかった。

もうズーム機能を使わなくても見える蘭が、膝をついている。コナンは急いでナイトメアを着陸させると、銃を向けてくる警備の軍人にかまわずコックピットを開け、蘭に駆け寄った。

両腕をかかえた蘭の瞳には、涙がみるみる溢れてこぼれた。コナンへの負の感情は消えたんだろうが、かえって「コナンを崖から突き落とした」という事実だけが残ったのか。

「蘭姉ちゃん！大丈夫だよ、もう大丈夫！」

「……コナン君、私……」

「僕、もう大丈夫だよ。痛い所もない。蘭姉ちゃんが気に病むことなんて、何もないんだ」

蘭の瞳からはまだ涙がこぼれ、顔もくしゃくしゃになっていく。

「でも、私……私、コナン君を……！私、どうしてあんなことを——」
「蘭姉ちゃんは何もしてない！悪いのは、蘭姉ちゃんにひどいことさせた奴だよ！」

肩を揺さぶって蘭の顔を上げさせる。膝をついたままの蘭と、立っているコナン。視線がまっすぐに絡み合い、蘭は震える瞳でコナ

ンを見つめた。コナンも、それをまっすぐに見つめ返す。

「……本当に、もう大丈夫なの？」

「うん！」

コナンがにつこりと微笑むと、ようやく蘭は落ち着いたようだ。ぎこちないながらも、笑みを返してくれた。

「……あの、コナン君？何かあったんですか？」

不安そうに声をかけてきたのは、事情を知らずに戸惑うナナリーだった。いつからいるのか（さっきの電話の時にはいなかった気がする）、かたわらにはスザクが控えている。

「うん、ちよつとね。でももう大丈夫。ナナリーさん、久しぶりだね。スザクさんも」

56 再会2（後書き）

最近フルで働き始めたので、なんかもう時間がないです。

続きを書くために、いい加減次のDVDを見直さないとなーと思いつつ、レンタルする時間がなかったり。ということで、トロトロ更新続きます。次は来週か再来週か・・・日々アクセスして下さる方々には、本当に申し訳ないですが、見捨てずにお付き合いいただけたら嬉しいです。

57 ひとつの真実（前書き）

サブタイトルは気にしないで下さい・・・。

57 ひとつの真実

「あれから、色々うまくいってるみたいだね。僕もニュースとかで見えたよ」

「ええ、1番大きかったのは、ゼロが国外に出たことによる治安の向上なんですけどね。あと、国内法を少し改善して、日本人…イレブンの方々に住みよいようにしているところです」

「……ふーん。それが原因の一つ、か」

「原因？」

「……うつん、こつちの話」

一行は現在、ナナリーを先導するスザクを先頭に、その後を蘭、コナンという順ですすんでいる。

スザクも蘭も聞き逃したコナンの独り言を拾ったナナリーは、さすがというべきか。視力に頼れない分、聴力が驚くほど鋭くなっている。

「そういえば、今はどこに住んでいるのですか？もしかして……」

「学園じゃないよ。色々あって、今は黒の騎士団に居候中」

「えー!？」

スザク以外の全員が、素っ頓狂な声をあげた。コナンは苦笑する。真っ先に反応したのは蘭だった。

「ちよつとコナン君、大丈夫なの!? 確か、黒の騎士団ってテロリストで……」

「大丈夫だよ。あそこの人たち、日本人っただけで結構甘くなるから。それに僕子供だし」

「……そうなの？」

黒の騎士団を無法のテロリストとしてしか知らない蘭が、心底不安そうに確認する。うん、と笑うコナンを、スザクは無言で見つめ

ていた。

「そういえばナナリーさんも、学園の人たちに全然連絡してこなかったね」

まあ、していたら、色んな意味で大変なことになってただろうが。なにげないコナンの言葉に、ナナリーは少し寂しそうな顔になった。

「……お父様に、学園への連絡は禁じられているんです。お兄様のことも、表だっては探さないように言われていて……」

「だろうね」

その言葉にナナリーが首をかしげるのと同じだった。

「お兄様って？」

ルルーシュとナナリーのつながりを知らない蘭が、コナンに尋ねる。スザクがはつと振り返るのを無視して、コナンは答えた。

「ホラ、こないだ蘭姉ちゃんが学園にきた時、黒い髪のきれいな男子生徒がいたでしょ？」

「ああ……って、あの人がナナリーのお兄さん！？似てないね……」

「本当ですか！？」

ナナリーのあまりの剣幕に、蘭がたじろぐ。コナンは予想していたことなので、驚きはしなかった。

「お兄様は学園にいるのですか！？本当に？ご無事なんですね！？」

「う、うん……元気そうだったよ」

その答えに、一瞬呆然としたナナリーは、数拍おいて脱力し、閉じられたまぶたの間からは、何度も涙の滴が落ちた。

「お兄様……本当に……よかった……」

「……素直な人だね、ナナリーさんは」

よくも悪くも、とは言わずにおいた。コナンはさりげなくスザクに近づくと、彼にしか聞こえないような声で言った。

「学園との接触を禁じるくらいやってるとは思ってたけど、律儀に

従ってたんだね。……それとも、それを条件にして、スザクさんを同時期にこのエリアに送ったり？」

「いや、それは関係ないよ。ナナリーは、父君の言いつけを守っただけだ」

「じゃあ、もうひとついい？」

コナンはスザクと目を合わせず、会話している様子を見せないまま尋ねた。

「皇帝さんが、どうやって学園のことを知ったのか、知ってる？」

「……いや。でもアッシュフォード家はルルーシュの母さんとながりがあつたというし、そういう関係からわかったのかと思うけど」

「そっか……」

相槌をうちながらも、コナンはその考えを否定していた。

——皇帝が、ブラックリベリオンの時にはもうアッシュフォード学園とルルーシュ達の間係を知っていたとすれば、その情報源はおそらくCCだろう。けれど、そうなる——。

（彼女は父親と連絡をとりながら息子の反逆を手助けし、父親は父親で、息子のそれを知っていながら放っておいたって事になる……）
まったく、よくわからない親子関係だ。

57 ひとつの真実（後書き）

本編ではすっ飛ばされてますが、あの超合衆国なんちゃら（笑）ができるまで、数か月はたつてゐるはずなんですよね。ということで、このへんは制約がなくて書きやすいです。

この際なので、ローマイヤさんに色々ぶつかるナナリーに一言。

「総督は自分だ」と豪語するなら、政策の是非くらいは嘸見器に頼らず、自分の頭で判断しなさいな。

ユフィもそうでしたが、ナナリーの生活を支えているのはブリタニア人や名譽が払った税金だと思ふのですよ。（ゲットーで徴税がきちんに行われているとは思えない）理想として「ナンバーズを助けない」と思ふのは構いませんが、それだけで行動するのは政治家のすることじゃない。

・・・とまあ、つまらない話になりました。

知らない間にまたアクセスが沢山・・・本当にありがとうございませう。

58 墓前にて（前書き）

奮発して2話更新です。

58 墓前にて

その墓は、学園からほど近い共同墓地の一角にあった。

途中で買った花束を手に、先を行くスザクに蘭とコナンがついていく。

日本の墓と違ってブリタニア式（欧米式？）の土葬なので、墓石どうしの間隔がけっこうある。

コナンと蘭は、「SHIRLEY FENNET」と刻まれたその前で手を合わせた。十字を切るのが正式なんだろうが、仏式に慣れたふたりにはこの方がしっくりくるし、シャーリーも気にしないだろうと思った。

「……シャーリーさんね、蘭姉ちゃんにちょっと似てたんだ」

「私に？ そうだったけ？」

凧いだ海のような、しかし寂しげなコナンの表情に、蘭は胸が痛んだ。

——そう。一度しか会っていない蘭と違い、コナンは長い付き合いがあったのだ。悲しくないわけがない。しかし、コナンは泣いてはいなかった。

（……そういえば、コナン君の泣き顔って見たことないな……）

思考が脱線していた蘭は、コナンの次の言葉で我に返った。

「顔は、そうでもないんだけどね。明るくて優しい雰囲気や、誰とでも仲良いところとか、なんか似てた」

「そうなの……」

「だから——シャーリーさんの死を止められなかったのが、……悔しくてね」

いつの間にか、コナンの眉間には皺がよっていた。歯がぎりつという音が聞こえそうだった。

思わず、蘭はコナンを抱きしめた。びくつと揺れたのは、感情を

こらえて体が固まっていたせいか。

「……コナン君のせいじゃないよ」

正直、蘭はシャーリーの死因を詳しく知らない。けれど、目の前のこの少年のせいではないと思った。

……思えば、前にもこの子がかんな顔をしていたことがあった。

——あの10億円強奪事件の主犯、広田雅美が自殺した現場。あの優しそうな人がなぜこんなことを、とコナンを見てみると、彼は蘭よりもっとつらそうな顔をしていた。歯を食いしばりながら、それでも涙は流さない彼を思わず抱きしめたのは、いったい誰のためだったのだろうか。

「そう……かな」

いつになく自信なさげなコナンの応答に、蘭はもう一度、深くうなずいた。

「だからね、コナン君」

「？」

少し体を離して顔をみると、コナンは心なしが赤くなっていた。

窒息させてしまっていたか。

「悲しいときは、泣いていいんだよ？コナン君、米花町でも全然泣かないけど……」

「——」

「コナン君はこんなに小さいんだから、もっと私たちに甘えてよね」

「……ありがとう」

だいぶ楽になったようなコナンの顔から、涙の滴がこぼれることは、最後までなかった。

その様子を、少し離れたところから、スザクが静かな目で、じっと見守っていた。

58 墓前にて（後書き）

書いてるうちに、ノリで出てきた宮野明美さん。そういえば、蘭は明美さんの真実を全然知らないんですよね。いずれ元の体に戻ったら、話す時が来るんでしょうか。

思いがけずお盆休みに両親の旅行と、気楽に執筆できる日ができました。

にしても、本当に進まないですね・・・。

「……いいのかい？あのまま別れて。ナナリーとも、ほんの少し会っただけなのに」

政庁の回廊を歩きながら、スザクはコナンのほうを見ずに尋ねた。コナンが「んー……」という声とともに布がこすれる音がする。振り返ってみると、頭の後ろで腕を組んでいた。

「そりゃもつと話したいけど、僕があんまりナナリーさんと一緒にいると、ナナリーさんに悪いでしょ。——ただでさえ、評判あんまりよくないだろうし」

「……どうして」

確かに、政庁内にもナナリーの方針をよく思わない人間は多い。しかし、なぜこの少年が――。

コナンは、なんでもないことのように続けた。

「だって、ナナリーさんって元々、皇女だっていう以外に総督になれる理由ないでしょ。しかも体が不自由で、どっちかというとお荷物。だったら、みんなはおとなしくお人形でいてくれて思ってたはず。なのに、本人はやる気満々で、しかも日本人に気を遣った政策ばかりしてる。煙たいと思わないブリタニア人のほうが少ないでしょ」

「……」

実をいうと、『名誉ブリタニア人』と呼ばれる市民権のある日本人の生産率が上がり、エリアー1としての評価は格上げされる予定なのだが、そのために苦労している政庁関係者はあまりよく思わないだろう。

「だから、身元もはっきりしない日本人の僕がくつついてると、ますます印象悪くなるでしょ？」

明るくいうが、この少年はブリタニアでの差別構造を、スザク以上によくわかっているようだった。

「……でも、それならどうして蘭さんを？」

浮かんでくる当然の疑問をぶつけてみると、返答には一拍、間があいた。

「……それは、僕の我がまま」

いきなり沈んだ口調に思わず振り返ると、コナンは組んでいた腕をポケットに突っ込んでいた。

「蘭姉ちゃんが大事だから。……だから、蘭姉ちゃんの安全のために、ナナリーさんの『総督』とか『皇女』っていう肩書を——利用したいだけだよ」

スザクは、以前から感じていたことを口にしてみた。

「……君、蘭さんのことが好きなんだろう？」

一瞬、彼の体が硬直した。それが答えだった。

「学園の生徒会室でのらしくない君を見て、そうじゃないかと思っていたよ。君は蘭さんが好きなんだろう。可愛がってくれるお姉さんとしてではなく、ひとりの女性として」

「……何言ってるの。そんなことあるわけ——」

「——だから、蘭さんが好きだという新一という男に嫉妬して、『忘れてしまえばいい』なんて言っただろう？そして、あの言葉で蘭さんを傷つけたと思ったから、冗談として誤魔化したんだ」

コナンの足が止まった。しかし、それもわずかな間のことだった。彼の口元が歪む。それは笑ったようにも、歯を食いしばったようにも見えた。

「……それを聞いて、どうするの？僕にもう牽制されないように、蘭姉ちゃんを人質にとる気？」

「そんなことはしないよ。けれど……いいのかい？彼女は、君の気持ちにまったく気づいていないんだろう？伝えるだけでもしたほうが……」

表情がよく見えないまま、彼ははっと笑った。……いや、自嘲^{わら}った。

「言っでどうするのさ？『弟のように可愛がつてる子』からの愛の告白なんて、蘭姉ちゃんを困らせる以外に何かあるの？好きな人がいるのに？そんなのは、ただの自己満足だよ」

そこまで言うと、彼は一つ息をつき、スザクの背中を押した。

「下らない話はここまでにして、さっさと行こうよ。もうすぐなんでしょ？」

「……………」

結局、彼の表情はよく見えないまま、ふたりは進んだ。

そして、その扉が開いた。

一度やってみたかった話の一つがこれです。

スザクって、他人の恋愛に敏いんだか疎いんだか。いや、多分疎いのかな。でも、さすがにコナンが蘭を好きだという事ぐらいは気づくだろう、だったら書いてみたいな、が発端。

コナンが告白できない理由はもちろん「新一は他人じゃねーし」もあるんですが、新一のことを知らないスザクに言ってもしゃーないやん、と思い割愛しました。

60 意外な再会場面（前書き）

更新遅くなりました・・・。

60 意外な再会場面

「……………」

コナンがしばし呆気にとられたのは、別に彼女がクスリを打たれてラリっていたからでも、拷問で全身ボロボロになっていたからでもない。というより、最悪の事態として予想はしていた。……しかし、この状況はまったく予想外だった。

（…………いや、普通ありえねえだろ。反乱軍の人間として捕まったはずのカレンさんが——）

「——なんで、きれいなドレス来て、空調完備の個室で悠々椅子に座ってた……？」

もちろん個室の鍵は頑丈にかけられ、天井はどうかんばつても登れないくらい高く、スペースの四方はくぼみに包まれて一本道しか通れなくなっているが。

それでも、部屋自体はきれいに整えられ、広ささえ気にしなければ至極快適そうな空間に、胸元がバッチリ開いたドレスを着たカレンが座っていれば、この人ここで何してんだろ、と思うのも無理はない。

連れてきたスザクが、なんともいえない顔で弁解する。

「…………いや、ナナリー…総督がね。たとえ捕虜であっても、手荒な扱いはしないようにと手をまわして……………」

「いや…………手荒とかそういう次元じゃなくねーか……？」

多分、この光景だけを写真にとったら、カレンのお見合い写真か、^{ゲットー}貧民街の人向けの住宅情報誌と言われても納得できる。

「……………」

銜いのないコナンのツツコミに、地が出ていることにもスザクは気づかない。

まあ、おおかたナナリーが、知り合いであるカレンに特に気を遣った結果だろう。思いっきり顔をしかめてこっちを見つめてくる力

レンのほうに、コナンは近寄っていった。

「……アンタ、どうやってここまで……」

「ナナリーさんの伝手。僕をあつさり政庁に入れちゃうんだから、カレンさんのこともあんまり酷いことにはなっていないとは思ってたけど……いや、びつくりしたよ。別の意味で」

肩をすくめつつ、遠慮なく胸元を見てやると、カレンは視線に気づいたのか、あわてて胸元を両手で覆った。

「な、何？その年で変態！？」

赤くなるどころか半目になったコナンが、溜息とともに反論した。
「見られて嫌なんだったら、なんでそんな服着たの。まあ安心してよ、カレンさんの胸には別に興味ないから」

コナンの場合、カレンじゃなくても、約一名をのぞいて裸にはさして興味がないのは、ここだけの話だ。

意味不明な咳払いをしたスザクが、目つきを変えた。

「……さて、本題に入ろうか」

「本題？」

スザクがコナンを見る目が、にわかに険しくなった。

……どうやら、コナンがここにいるのはコナン自身の希望というよりも、スザクの目的の意味合いが濃いらしかった。

「シャーリーのことだよ。君は、ルルーシュから聞いたはずだ」

「……」

「……あー、なるほど。道理で、お墓の前で言い出さないと思った。つまり、2人とも疑ってるわけだ。ルルーシュがシャーリーさんを殺したんじゃないかって」

墓地では墓参りでとどめ、犯人についての話はまったく出なかった。どうやら、ゼロのことを知らない蘭の前だと遠慮なくコナンを問い詰められないので、同じようにルルーシュを疑っているカレンの前で尋問することにしたようだ。

「答えてもらおうか……シャーリーを殺したのは誰なんだ？」

スザクと、カレンの鋭い視線がコナンに刺さる。コナンはしばし考えてから、少々回りくどい解答をした。

「とりあえず――」ふたりが疑ってる、ルルーシュは殺してないよ」

60 意外な再会場面（後書き）

あのカレンを見たら、誰だってこういう反応するだろ、と思って書きました。

捕虜とお兄ちゃん談義をするナナリーもすごいけど、あの服を黙って着たカレンも大概ですよ。

知らない間にアクセス数がまたすごいことになってました。なのにこの遅筆・・・本当にお待たせしてごめんなさい。話の構想はだいぶ固まってきたんですが、どこまでコナンを絡めるかは未定なんです。↑なんだこの無計画。

また感想など頂けると嬉しいです。

61 実行犯（前書き）

多少（いやかなり？）理不尽な展開がありますが、軽く流しても
らえたら幸いです。

61 実行犯

「何で、そんなことがわかるの？」

反論したのは、意外にもカレンだった。コナンはポケットに両手を突っ込んだ、いつもの姿勢になる。

「実は、彼に聞く前から、その可能性は低いと思ってた。——僕は、ブラックリベリオン前から、彼の正体もギアスのことも知ってたからね」

「……………」

話が見えないように首をひねる2人に、コナンは続けた。

「彼には、一度シャーリーさんにギアスをかけたっていう事実がある。これは、シャーリーさんの当時の様子からして、僕は間違いなと思うてる。理由は、彼女にゼロの正体を知られたがゆえの保身そして、そのギアスの命令内容は、『ルルーシュのことを全て忘れること』——」

息をのむ2人を見ながら、コナンは続ける。

「その彼女が、とあるギアス関係の事件——って言うていいのかなあ——に巻き込まれて、そのギアスが解かれ、彼の正体をすべて思い出した。となれば、ルルーシュがしそうなのは、また彼女の記憶を操作し、もう一度すべてを忘れさせること。さすがに、もう一度解除される可能性は低いからね」

その可能性があるとすれば、ルルーシュの敵である『誰か』が、彼女を意図的に狙ってやった場合だけだ。元々、シャーリーは黒の騎士団にも日本人にも関係ないし、高い可能性じゃない。

「……………では、いったい誰なんだ？彼女を殺すような人間が、他に——」

「話すのはいいけど……………信じる気ある？僕、証拠も何も出せないよ。しかも、原因がルルーシュであることに変わりはないし」

「証拠が出せない？」

納得いかない顔をしたのはカレンだ。コナンは頷いた。

「そんな証拠が残っているくらいなら、警察だって自殺と判断したりしないでしょ。僕が真実を知ることができたのは、ギアスのことを前もって知っていたからだよ。しかも、僕はそれで納得できたけど、2人ともその件でルルーシュと話してない。彼から直に聞かないと納得できないんじゃない？」

——おそらく探偵として、この言い草は間違っている。本当は、知っていることを全て話し、『ルルーシュが望んだことじゃない』ことも伝えるべきだろう。……けれど、それでこの2人が納得するとはコナンには思えなかった。再起したゼロに従っても、カレンはルルーシュを完全に信用していないようだし、シャーリーとルルーシュの関係を知っていながら、スザクは彼を第一容疑者として考えていた。

しばしの沈黙ののち、スザクが静かに口を開いた。

「……原因はルルーシュだと言ったね。じゃあ、あいつのせいで死んだことに変わりはないのか」

「彼の考えが甘かったために起きた悲劇ってことは確かだけど。彼が籠絡したその実行犯が、彼のために過剰反応してしまったことが原因だから。……スザクさんは知ってる人物だと思うけどね」

「……………」

——その時、シュツという小さな音とともに空間の扉が開いた。

「……あれ？」

ぼろっともらした一言に、彼女は敏感に反応した。

「やはりこちらだったんですね、コナン君」

「ナナリーちゃん……」

「総督、どうしてこちらに？」

2人の疑問を、スザクが代弁する。

「コナン君に確かめておきたいことがあって、もしかしたらこちらかと思ひまして」

「僕に？」

ナナリーは閉じたままの目を、コナンに向けた。

「コナン君、私に何か……隠し事をしていませんか？」

61 実行犯（後書き）

作者の限界を見たな、って思ってもらえばいいでしょうかね。カレ
ンと会わせたいけどロクのことは言わせたくない、と思ったらコナ
ンらしからぬ内容になってしまいました（涙）。

いや、最初は実行犯はロクだとコナンが明言する展開で書いていた
んです。が、それを知ったスザクが後にルルーシュをあそこまでボ
ロクソいつて足蹴にするか？（ギアス未視聴の方には何のこっちゃ
でしょうが）・・・と考えると、いくらなんでも不自然っつか理
不尽かな、と。急遽、名前までは明かさない方向で書き直しました
（それで先週は投稿を見送りました。汗）そしたら、なんか「・・・
」なことだ。

この話は熟読玩味せず、さーっと流していただいた方がいいような
気がします。

62 隠し事

しばし、沈黙がその場を支配した。

(……それだけを聞きに来たのか?)

コナンは彼女の続く言葉を待ったが、どうやら用件はそれだけじゃなかった。

スザクとカレンの、意味ありげな視線がコナンに向けられる。2人とも、コナンがナナリーにすべての事実を話していないことを知っている。

「……僕がナナリーさんに話してないことを『隠し事』っていうなら、……してるね」

ナナリーの表情が、少し曇った。

「なぜですか?」

かなり直球な質問に、コナンは「んー」と、顎に指をつけて考えてから。

「——真実を知ることが、いつでも良い事なわけじゃないからね。たとえばナナリーさんも、学園にいた間、生徒会の人たちに『私は皇女です』って言わなかったでしょ?」

「!……それは……」

「うん、話しちゃったらしいろ微妙な事になりそうだし、何より巻き込んだじゃうもんね。無理もないよ」

実際には、彼らは別の形で巻き込まれているが、それはナナリーに言っても仕方ないことだ。

「僕も、似たようなもんだよ。もちろん事情は違うけどね。——あ、でもはつきり『隠してる事があります』って言われちゃうと、もっと信用できないかな?」

別のことにコナンが気づいて尋ねてみると、なぜか斜め前の位置にいたスザクが気まずそうな顔をした。ナナリーは少し考えてから、「いえ」と答えた。

「隠し事があるのに『ない』と嘘をつかれるより、楽です。……そうですね、コナン君にも事情がありますよね……」

後半は、どことなく彼女自身に言い聞かせているような口調だったものの、そこから硬さが抜けた。

「いつか、話して下さいますか？」

簡潔で、それでいてまっすぐな質問に、コナンは一瞬だけ虚をつかれた。

「……約束はできないけど、できたらね」

精一杯、正直な返答をすると、ナナリーは少し首をかしげて「そうですね」

「やっぱ、目が見えないと、そういうことに敏感になるものなんだね」

「そうだね……」

どこか上の空なスザクの答えに、コナンは彼の白い背中を見上げた。が、コナンが口を開くより先に彼の言葉が飛んできた。

「君は、これからどうするんだ？まだ会う予定のある人物がいるのか？」

その口調と、微妙に低いテンションに違和感を感じながらも、コナンは答えた。

「シャーリーさんのお墓詣りはしたし、話したかった人とは話せたから、そろそろ黒の騎士団に戻ろうかなって感じだけど。ねえスザクさん、あのナイトメアってさ——」

言葉は途切れた。前を歩いていたはずのスザクがいない。

（しまった——！！）

とっさに振り返った時には、もう遅かった。

……首筋に鈍い痛みを感じたのを最後に、コナンの意識は途切れた。

62 隠し事（後書き）

周りに「嘘はつかない」という嘘をつかれまくっていたナナリーに、コナンだけは「嘘つつーか隠し事してるよ」と言わせたかったがために、ナナリーを再登場させました。けっこうな人が、ナナリーの嘘全否定に「いや、アナタも隠し事してたやん」とツツコンなので、は？と勝手に思っています。

ゼロの私室に戻って仮面を外したルルーシュは、ふっと息をついた。

——このところ、外交折衝で息つく暇もない。

ブリタニアに対抗するため、ルルーシュが目指しているのは「連合国家の樹立」だった。ブリタニアは1国で、すでに世界の半分近くを支配している。それに対抗するには、似たような苦汁を吞んでいる、または吞まされそうな国々を、組織としてまとめること。もちろん仮面をかぶって、ゼロとしての外交交渉だが、その構想——『超合衆国連合』ができあがるまで、あと少し。

ふと、ソファから自分を見上げる魔女を見やる。相変わらず、記憶はなくなっただけだ。

「あの、ご主人様……？」

その呼び方に、感じる違和感もだいぶ薄らいだ。時間というものは恐ろしい。

「……なんでもないよ」

同時に、自分を見てこの女が怯えることも減った。これも慣れというものだろう。

「あの子供——」

「え？」

「コナンという子供がいただろう。まだ戻ってこないか？」

「あ、はい。あの子なら、出て行ったきり、見ていません」

「そうか……」

そのとき、「失礼します」という声とともに、タイミングよくジエレミアが入ってきた。

「ルルーシュ様、何かありましたか？」

考え込んでいる様子に彼は首をかしげたが、ルルーシュは「いや」と答えた。

「あのコナンという子供、確かに政庁に行っただんな？」

「はい。私はキャンセラーを発動させ、すぐに離れましたが。子供は降り立ったはずですよ」

はず、とは言いが、確実に降り立っているだろう。

別に何日で帰る、なんて子供じみた約束はしていないが、あれからもう1週間ほどが経つ。ルルーシュの予想では2、3日で戻ってくると思っていたが、何かが長引いているのか。

（それとも、ブリタニア側に協力することにした、か——）

そうしないという確約など元々ないし、別にそれでも構わないが、それならそれで戻ってくるはずだ。——ルルーシュの、黒の騎士団の動向を探るために。

（まだ政庁にいるのか、それとも……）

「あの、ルルーシュ様……？」

「いや、何でもない。今はあんな子供一人にかまっている暇はないしな」

手を振って思考を切り替えると、ルルーシュは『超合衆国連合』の話に戻った。

そのうちに戻ってくるだろう、という考えは——外れることになる。

更新遅かった割に、短くてしかも進んでなくてすみません。

最近仕事がいっぱいいっぱい、やたら眠くて筆(手?)が進まなくて・・・って言い訳ですね。

次の話から一気に進めていくつもりですので、もうしばらくお待ちください(汗)

64 見知らぬ部屋で

「……………はあ」

知らずについたため息に気づき、うん、仕方ないな、と自己肯定する。

コナンは装飾というものと無縁な、殺風景な部屋を見渡した。

——今コナンがいるこのベッドは粗末というわけじゃないが、マットにシーツが敷いてあるだけ。対面には簡易キッチンがあるが、使われた形跡はほとんどない。新一の背丈なら届きそうな窓には鍵がかかっている。ツマミ式なので開けることは可能だろうが、そもそもコナンに、今のところ脱出する気はない。

——政庁に着いてからというものの、スザクの前は歩かないように常に気をつけていた。とくに、前もって話していた人たちとの対面を済ませてからは。しかし、ほんの一瞬、油断した隙をつかれて気絶させられた。さすが軍人、といったところか。

考えているうちに、部屋のドアが開く音がした。入ってきたのは、騎士服姿じゃない、随分ラフな格好のスザクだった。持っている袋の中には、どうやらコナンの食事が入っているらしい。

「……………逃げなかったんだね」

「……………そっちこそ、拘束する気ないでしょ」

「脱出路がないだろ」

「今、逃げなかったのかって言ったのに」

かみ合ってるのかよくわからない会話は、すぐに終わった。

そう、コナンは拘束されていなかった。手錠もロープもない。窓はコナンには高いが、開ける方法がないわけじゃない。正直いって、これは監禁といえるのか微妙なところだった。

スザクは一息つくと、本題らしい話に入った。

「あのナイトメア、……君の仕業か？」

うん、とコナンがうなずく。スザクはまたため息をついた。

「どうしてあんな事を？」

「スザクさんが、そうやって変なことにチャレンジするかもしれないと思っただけ」

「……別に、変なことに使ったつもりは……」

「でも、実際いじろうとしたよね」

「……」

コナンは、政庁にナイトメアを降ろしたとき、その設定を色々いじっていた。戻さないと動かせないように、コナン以外の人間が勝手に操作しないように。

もちろん、ナイトメアに関しては別に詳しくもないコナンのこと、軍の技術者など、詳しい人間がいれば動かせるようになるだろう。

しかし。

（非公式に黒の騎士団のナイトメアが政庁に着た、なんて、そうそう他言できる話じゃねーもんな）

動かすためには、どうしてもあのナイトメアが政庁にあるのか、乗っていたパイロットは誰で、どこにいるのか、うまく説明する必要がある。そしてコナンが読んだとおり、スザクは軍の技術者レベルの人間には、今回のことを話していないようだ。

「……君は、こうなることまで読んでいたのか」

気を取り直した様子のスザクの問いに、コナンも顔つきを改めた。「できればなってほしくなかったし、ならないように気をつけてただけだね」

腕を頭の後ろで組んで、続ける。

「けど、こうなった以上は、しばらくここに居てもよさそうだと思う」

ってるよ。どのみち、あのナイトメアがないと、騎士団あっちに戻るのは
難しそうだし――」

「戻る、ということとは、君は騎士団に入ったのか？」

コナンは首を振った。

「さしあたっての居候先が騎士団っていうだけ。ゼロ――彼も、僕
が色々知ってるから、迂闊に騎士団内をうるつかないように、ほと
んど私室へやに閉じ込めてるしね……。……スザクさん、一つ頼みがある
んだけど」

怪訝な顔をしたスザクは、しかしその内容を聞き、また思案顔に
戻った。

64 見知らぬ部屋で（後書き）

やっとここさここまで来ました。遅い。トロイ。いや、もう言い訳はするまい。前回の後書きも言い訳でしたよね確か（汗）

部屋は適当に創作しました。政庁のどのへんとか考えないで下さい。鍵ツマミなの？あの世界で？とかのツツコミもなしの方向でひとつお願いします。

ナイトメアについては、んなことできるのかよ、とか自分で思わないでもないですが、パソコンだって時々フリーズするわ訳わからん表示出るわで色々あるので、ナイトメアも精密機械だから多少いじれるんじゃないかなー、とか考えた結果です。

あとすいません、来週の月曜は更新できません。次の更新は再来週になるかと思っています。

65 どんでん返し（前書き）

更新遅くなりました。

65 どんでん返し

その様子は、いつかの式典のように、全チャンネルで生中継された。

会場は、あの『蓬莱島』。島自体は建物や設備も立派なものになり、上空はマスコミのヘリがいくつも飛びまわっている。モニター越しでも十分にわかる物々しさだ。

『——つまり、この合衆国憲章を批准することで、我が国に匹敵する巨大な連合国家が誕生する、というわけで——』
説明しているアナウンサーがどうやらミレイらしいことは別にして、コナンは顔を歪ませた。

今コナンが見ているのは、携帯TVの画面だった。スザクにせがんで持ってこさせたものだ。当のスザクはいない。まあ、この時にここに来ている暇なラウンズなんていないだろう。

『放送をご覧の皆様。ただいま、47か国すべてが、合衆国憲章への批准を終えました』

そう視聴者に向けて語る声は意外にも幼く、実際、映されたのは10代半ばくらいの少女だった。竜宮城の姫のような、コスプレとは思えない衣装はご愛嬌か。そして、日本代表というその少女の横には、あの中華連邦の天子がいた。

少女は言葉を続ける。

『最後に、合衆国憲章17条——合衆国憲章を批准した国家は、固有の軍事力を永久に放棄する。』

そのうえで、各合衆国の安全保障については、どの国家にも属さない戦闘集団・黒の騎士団と契約します』

「ふーん……国連形式にしたわけか。まあ、そうくるよな」

『契約——受諾した』

そう答えたのは、あの仮面をかぶった漆黒の男——ルルーシュ本人で間違いないだろう。彼は画面の中で続けた。

『黒の騎士団は、超合衆国より資金や人員を提供してもらおう。その代り、我らはすべての合衆国を守る盾となり、外敵を制する剣となる』

ここで、画面には長い字幕が流れた。新たな黒の騎士団の構成人員らしいが、上位の、それも事務方にはずいぶんと漢字の名前が多い。日本人と中華の人間が、かなり食い込んでいるようだった。

式典はその後も順調に進み、最初の決議を出す段階になった。この決議の内容は、あらかじめ代表たちに許可をとったものだろう。少女が告げる。

『超合衆国決議第一号として、黒の騎士団に日本解放を要請します！』

それを合図にして、蓬萊島には「日本万歳」コールが巻き起こった。『日本を解放するのはあくまで足掛かりで、これは反ブリタニア同盟だろう』というツツコミは、どうやら無用らしい。

——その時、『それ』は起こった。

『残念だったな……ゼロよ』

わずかな砂嵐の後、画面に映ったのは、意外な人物だった。

中世ヨーロッパの音楽家たちの髪型をバージョンアップしたような頭、これまた中世ヨーロッパのコスプレのような重厚な服に身を包んだ姿。もう壮年といっていい歳だろうに、圧倒的な威圧感。

——そこにいたのは、神聖ブリタニア帝国皇帝 シャルル・ジ・ブリタニアだった。

「……え……？」

呆氣にとられるコナンの前で、彼は世界の情勢について、流れる

ような声で話し出す。この戦いに勝った方が、世界を手に入れるのだと。そしてこう結んだ。かかって来ればいい——と。そして。

『オールハイル・ブリタニアァ!!』

「日本万歳」のブリタニア版だ。おそらく、これをきっかけにして、あちこちでブリタニアコールが巻き起こっているんだろう。皇帝はたった1回の唱和を終えると、しばらくして振り上げた腕を下げ、笑みを浮かべたまま画面から消えた。

そして、その後映し出されたのは、戸惑う各国代表と、負けじと「日本万歳」コールを続ける黒の騎士団。主に日本人団員だろう。

コナンは画面を見据えたまま、ぽつりとつぶやいた。

「……皇帝が電波ジャック、か。となると、考えられるのは——」

事態は、コナンの予想とは少しだけ違う形で、また動いたようだった。

65 どんでん返し（後書き）

やっとあの式典まで行きました。これまでこの話でシャルルパパは出してなかったので、今さらながらコスプレ解説（笑）。つーか、シャルルパパと大滝警部が同じ人だって、最近まで気づかなかったんですけど。若本さんすごいですね。

あまり関係ない話ですが、パパとルルーシュの年齢差もすごいですよね。40代でできた子ですもんね。そりゃ下いないわな。ナナリーなんて未っ子で当然ですね。

にしても、コーネリア・ユフィ姉妹のお母さんはついに出てきませんでしたが、どんな人だったんでしょうかね。基本、后妃一人につき子供一人までだったようなのに、（マリアンヌさんは特別として）2人子供つくったくらい気に入った人だったんでしょうか。……とまあ、どこかの考察サイトにありました。

物語はいよいよ難しい所へ！（汗）読者様には、のーんびりお付き合いいただけたらと思います。

66 幕間く蘭の思いく（前書き）

ちよつと脱線します。

66 幕間く蘭の思い

はつと振り返った蘭は、その感覚に溜息をついた。

——最近、ふと誰かに呼ばれているような気がすることがある。

声がはつきりと聞こえるわけでもないのに、振り返ってしまう。

米花町でいつも感じていた『新一がそばにいるような感覚』に、似ているかもしれない。

ここ数日、蘭はこの部屋からほとんど出ていない。世の中の情勢がどんどん悪くなり、社会的地位のあるナナリーやスザクはそれにかかりつきりで、蘭にかまっている暇はないらしい。

それをとにかく言う気はない。蘭と同じくらいの年で、もうあんなに立派に働いている2人を、逆にすごいとさえ思う。

「コナン君、どうしてるかな……」

ふと口をついて出た言葉に、我ながら苦笑する。まったく、自分のはあの子に頼ってばかりだ。

スザクから、コナンとどうやって知り合ったのかは聞いた。たまにこの世界に放り出されたコナンの前に、スザクが当時属していた部署の人といっしょに、通りがかったらしい。2人が随分と長い知り合いだとわかった時は、コナンは一体いつからこの世界にいるのかと驚いたものだが、よくファンタジーである——時空が違ふと時間の経過も違ふのかもしれない、と思うことにした。

コナンは学園に帰ったとスザクは言っていたが、この不穏な世相に、彼は戸惑ったりしていないだろうか。大人びてしっかり者ではあるけど、あの子はまだ7歳の少年だ。

（こんな時、新一がいたら……）

いつもの思考回路に戻ったことに気づき、蘭は思わず苦笑した。本当に、自分の考えることはいつも一緒だ。

——それでも、新一がいたらコナンくらいは守ってくれただろうと思う。正義感の強い彼のこと、仲のいいコナンのために何かしら、手を打ってくれただろう。残念ながら、実際にはないけれど。

そんなことをつらつらと考えていたら、ふいにドアがノックされた。返事をする、空気圧のプシュツという音とともに、騎士服を着たスザクが入ってきた。いつになく、硬い顔をしている。

「どうかしたんですか？ まさか、もう戦争が始まりそうなんですか？」

「今、宰相閣下の指揮のもと、迎撃の準備が進んでいます。ナナリ——総督も、じきに避難される予定です」

迎撃——その言葉に、蘭の鼓動がどくと高まった。始まるんだ。本当に、戦争が。

「……そう、ですか……」

戦争なんてやめてくれ、と言いたかった。ただ歴史で学んだだけの蘭ですら、その悲惨さを知っているというのに。今回はどれだけの人が傷つき、泣き、絶望するのか。

そんな蘭の表情を読み取ったのか、彼は痛ましいような顔になった。しかし、何かを言うことはなく、かわりに重苦しい口調で切り出した。

「今回の戦闘では、この政庁が狙われる危険性が高い。そこで、相談があります」

それを聞いた蘭の表情が、ぎゅっと引き締まった。

66 幕間く蘭の思いく（後書き）

たまには蘭の話も書きたいな、と今しがた書いたこの話。一応、後の展開のための布石モドキにはしてありますが（ギアス知ってる方にはネタバレですかね）。

蘭の部屋は、コナンの監禁（？）部屋以上に何も考えてません。まあ、政庁の近くのアパートっぽい所を、スザクが職権濫用して借りてる、とも思ってた下さい。

次から、また本題に戻ります（↑これも本題だろうが）

67 Change the angle for Suzaku4 (前書き)

奮発して2話更新です。

「――2人きりで、会おう」

通話を切ったスザクは、ナナリーの総督執務室とは違う方向に向かった。どのみち、ナナリーに聞かせられる話ではない。

あまり意味のないロックを解除して部屋に入ると、少年は考えこむような顔でテレビ画面を凝視していた。

スザクが口を開く前に、コナンの質問が飛んできた。

「あの電波ジャック……ブリタニア側の仕業？」

訪ねながらも、コナンは答えをわかっているようだった。スザクの顔を見もしない。

「……いや、僕たちも驚いたよ。そもそも、ここしばらく陛下は行方不明だった」

初めて、コナンの瞳がこちらを向いた。

「……行方不明？それを知ってたのは？」

「本国でも各エリアでも、わずかな人たちだけだ。宰相閣下、総督、あとはその補佐官くらいで」

「その前に、黒の騎士団と戦闘があつたりは？」

「いや、特には」

「ふーん……」

納得したのかしていないのかよくわからない反応をして、コナンは黙りこんだ。スザクは本題を切り出す。

「ルルーシュと、会うことになったよ」

てつきり驚くかと思っていたコナンは、「そっか」とだけ反応をしてから、続けた。

「ナナリーさんを守ってくれ、って？」

「あ、ああ」

「やっぱりね。……とはいえ、もうちょっと信用できる確実な手も

あつただろうに。あいつも相当テンパってるのかな」

独り言のようなつぶやきに、スザクは首をかしげた。

「テンパってる……？」

「なんだ、わかってなかったの？ どうして今になって、彼がスザクさんを頼ってきたのか」

初めて眉間から力を抜いたらしいコナンは、いつものテンションになって体ごとスザクのほうを向いた。

「あの『式典の途中』というタイミングで皇帝さんが電波ジャックなんてする理由として考えられるのは、誰かに——それも敵方の人物に——シヨックを与えること。でなきゃ、圧力をかけて式典自体を中止、もしくは放送させない方が、反ブリタニア側の士気を上げなくてすむからね。」

そして、皇帝の行方不明が極一部の人間にしか知られていなくても、『実際それに関わった人間』なら話は別。そう——恐らくあの父子、ブリタニア政府とは関係ない所……つまりギアス関連で接触があつたんだろうね。そんな素振りもあつたし。そこで悶着もんちゃくがあつて、ルルーシュは皇帝を死んだ——もしくはしばらく動けなくなつたと思つた。それで、急いであの連合を成立させたんだ。ところが、予想外に早く皇帝が復活してしまい、ルルーシュは大混乱。ジャックが終わつても彼が反対演説をしなかつたのは、そのせいだろうね。しかもギアス関連での接触となれば、『ゼロの正体が知られたかどうか』が鍵になる。恐らく、皇帝はもうゼロの正体を知ってるかあるいは以前からわかつてたか……とにかく、それがお互いに確定的になった。そうしたら、彼にとって1番の問題は、人質であるナナリーさんの安否の確保だ。

混乱した頭で考えた結果、ナナリーさんに近い所にいるスザクさんに、それを頼むことにした。……ってトコロだと思つよ」

矢継ぎ早に吐き出される言葉に少々混乱するも、だんだんと理解した。そうか、彼の、あの腰の低さはそういうことだったのか。

先ほど電話で吐き捨てたのと同じ言葉を、スザクは口にした。

「身勝手だな……」

「とはいえ、ナナリーさんが危なくなっていることも事実だよ。いつスザクさんが、ナナリーさん暗殺を命じられてもおかしくない。

——むしろ、今スザクさんがそんな顔をしてることの方が、考えが甘いと思うけど」

言われて初めて、スザクは自分の顔が強張っていることに気づいた。

そんなスザクを見て、コナンは小さく息をつく。

「前にも言ったけど、ルルーシュがゼロに戻っていないフリを必死でしていたのは、ナナリーさんのためだよ。僕がスザクさんに、全て話さなかったのもね。彼を追いつめるなら、最低限その手でナナリーさんを殺すくらいいの覚悟はしておくべきだったね。今になって狼狽^{うろた}えるくらいなら、ギアスのことを知った上で『ナイトオブブラウンズ』になんて、なるべきじゃなかった——」

そこまで口にしてから、彼はいったん言葉を切った。

「……いや、今はそんなことを話してる場合じゃないね。それで？」

「………え？」

彼の言わんとすることがわからず、スザクはいささか間抜けな声を出してしまった。

次の彼の言葉は、予想外のものだった。

「ルルーシュを、捕まえられる？」

あの電話の後、こんな会話ありそうだな、って感じで。前々から考えていた話ですが、投稿の遅いこと（汗）

最近遅筆で、スランプか！？と思いながらこの後のDVDをレンタルしてみましたら、単にしばらく見てなくて記憶が薄れてただけのようです。一気に4話くらい下書き書けました。

ところで、あの電話のシーン見て、ルルーシュの「ジェレミアと口を使えば・・・いや、皇帝にギアスを通じない」を聞いて、「いやジェレミアと口口でいんじゃない？」と思ったのは私だけでしょうか？だって、ギアスを通じないのは皇帝1人。だったら基本口口、万一皇帝に鉢合わせした時用にジェレミアつけとけばいいんじゃない？と思うわけです。皇帝がジェレミア以上に戦闘能力強いとも思えませんか。

ご意見頂けたらうれしいです。

68 Change the angle for Suzaku (前書き)

引き続きスザク視点です。

数分、沈黙が流れた。スザクが驚きを露わにしている間も、コナンはスザクを見つめていた。

「捕まえる……？」

スザクの反応に、コナンは逆に意外そうに、言葉を続けた。

「あれ？そのつもりで呼び出したんじゃないの？——彼を捕まえれば、さしあたって東京での戦闘は、先延ばしにできる」

口から言葉が出てくるまで、さらに少しかかった。

「……君は、ルルーシュを捕まえたくないものと思っていたけど」

「状況によるよ。——というより、捕まえなくなかったんじゃなくて、捕まえても意味がないと思ってただけ。少なくとも、彼の味方だっ
て言った覚えはないし。……まあ、付き合いも長いし、気が進まな
いのは確かだけどね」

口元に自嘲めいた笑みを答えるコナンの表情は、およそ子供のものではない。前から思っていたが、この少年、魔女と言われることに通じるものがある気がする。

でも、と彼は続ける。

「彼を止めておいて、僕のあのナイトメアをうまく使えば、戦闘開始を多少延ばすことはできる。——とはいえ、問題はそこからなんだけどね」

「そこから……？」

テレビ画面に視線を戻した彼は、それを凝視しながら、腕を組んで答える。

「事態がここまで大きくなった以上、もう彼一人を捕えて済む話じゃない。国際的な連合までできてるし、彼がいなきや別の人間が指揮をとって、いずれ戦闘は始まってしまう。……元々、ブリタニアを恨んでいる人や国は沢山いるし。たまたま彼に突出した才能があ

ったから、彼がリーダーになっただけだ。

ブリタニア側が変化しないと、この状況は変わらない。……とはいえ、こんなことになるまで何もできなかった僕も、相当情けないけどね。できれば、彼のことは捕まえずに止めたかった」

そこまで言うてから、コナンはスザクに視線を移した。

「彼の身柄を確保できたら、一度話をさせてくれる？あと、僕が乗ってきたナイトメアの場所も教えといてくれるとありがたいんだけど」

部屋を出て、廊下を歩きながら、スザクはコナンの言葉を反芻はんすうしていた。

『彼を捕まえられる？』

（……彼は、ルルーシュを捕えるものとして話をしていた）

そこに、スザクは違和感を覚える。コナンの話は理屈に合っていて、彼自身も世界の趨勢について真剣に考えていることは伝わってきた。しかし。

——何か、ズレている気がする。

彼の話は、どこかスザクの基準とズレている。このままでは戦争がまた始まる。それは避けたいことだ。……けれど、その前に。

（僕は、ただ——真実を知りたいだけだ）

ルルーシュに会いたかったのは、復讐のためではない。……いや、復讐はしたいが、まずはそれだ。彼によって死んだ人たちがなぜ死ななければならなかったのか。

ユフィ。シャーリー。彼女たちの死の真相を、コナンは知っているはずだ。なのに。

「結局……聞けなかったな」

自分に気を遣ったのか。だとすれば、よほど残酷な真実なのか。
——ルル―シュに直接聞けば、わかる。そう思ったから。

回廊を歩くカツカツという音が、静かに響いていた。

69 コナンの推測（前書き）

またしてもサブタイトルがズレているような・・・気にしないで下さい（汗）

69 コナンの推測

「……あの人も、変なところで甘いよなあ」

スザクが去ったドアを頼杖について見ながら、コナンは呟いた。ゼロだとわかったルルーシュを呼び出しておいて、捕まえる気がなかったとは驚きだ。というか、敵将とほいほい会いに行くこと自体、彼の立場からしたら相当問題だろうに。

コナンが思うに、ルルーシュが本当に身一つで来るかどうかは、五分五分だ。少なくとも、捕まらないためのギアスによる仕掛けは何かしらしてくるだろうが、はたしてそれが通じるかどうか。

——気になるのは、宰相でもあるシュナイゼル・エル・ブリタニアという皇子が、どこまでつかんでいるか、だった。

テレビやネットで見るかぎり、金髪を短めにカットした、温厚な貴公子といった風体の皇子だが、帝国宰相を務めている事からしても、ただ者じゃない。むしろ、温和な顔は絶好のポーカーフェイスだろう。

彼は、コナンが最初にこの世界に来たとき、すでに宰相だった。そして、当時の総督コーネリアが倒れば黒の騎士団と対峙するのは彼、と目されていた。政治家としてだけでなく、戦闘指揮官としても一流。そういう所はゼロ——ルルーシュに通じる。ルルーシュが以前、彼を苦手そうに評していたことからしても、それは確かだ。

そこで、コナンには一つ疑問がある。

（そんなに優秀な人間なら、ギアスの存在にうすうす気づいたりするんじゃないのか？）

ゼロを取り巻く情勢は、たまにものすごく不可解な動きになる。

それがギアスのせいだとコナンには想像がつくが、そのあたりの情報を含めて拾っているだろうその皇子なら、その不可解さから、何かを感じ取るかもしれない。……いや、すでに感じ取っているかも。（そうになると、あの皇子様も、何かしら動いてくるかもしれないな――）

実際のところ、コナンの考えは当たっていた。しかし。

コナンの知り合いであった人物が、ゼロ憎しの一念でとんでもないことをしでかし、事態を大きく変えることになるなんて、さすがのコナンでも予測できなかった。

69 コナンの推測（後書き）

後の展開がわかっていると、こういう引きもできますね。うん。
ただ、読者様にも展開がわかっているの、布石が布石にならない
事がちよつとせつないです。

70 秒読み開始

その結末は直接じゃなく、電話でもたらされた。

取り上げられなかったコナンの携帯電話にスザクからの着信が入った時点で、嫌な予感を感じた。

「スザクさん？こっちに來れないってことは、やっぱり彼は――」

「逃げられたよ。といっても、僕が捕まえようとしたわけではないけどね」

いや捕まえようとしろよ、とツッコむ間もなく、スザクは続けた。
「僕はシュナイゼル殿下にマークされていたようですね。ルルーシュは一時拘束された。しかし……」

「やっぱり、軍内部の人間にギアスがかけられてたんだね」

「ああ、よりによってギルフォード卿にかけられていたようだ。彼がルルーシュを奪って逃走した」

ギルフォード……確か、コーネリア皇女の騎士。なるほど、ゼロと何度も戦い、妹ユーフェミアを殺された彼女の騎士をギアスで奴隷にするとは、確かに「よりによって」かもしれない。

彼の話によると、大筋はコナンの予想通りだった。

ルルーシュを呼び出し、ゼロのこと――ユーフェミアのこと――シャリーのこと――諸々問い詰めたスザクだが、結局、納得いく答えは得られなかった。しかし、スザクはユーフェミアのためにも、と思い直し、彼と手をとろうとした。そのとき、絶妙なタイミングでブリタニア軍が介入。指示したのはシュナイゼルで、ナイトメアまで用意してルルーシュを捕らえたのだという。

「……つまり、戦闘を止める道筋は断たれてしまったわけか。戦闘開始はいつくらいになりそう？」

「殿下の話では、今夜にでもゼロが襲撃してくるだろうし、本国が

らの増援も呼んでいる、と』

コナンは一つ舌打ちすると、

「とりあえず、僕は僕で彼と話してみる。いざとなったらここから出てくから、そのつもりでね」

通話を切ると、コナンはまたボタンに指を走らせた。ここ数週間、話していなかった人物の携帯電話に。

『何だ』

短い応答にも、彼の声のトーンの低さが感じられる。これは相当キレているだろう。

「今は戦闘準備中か？」

『いきなりかけてきてそれか。——ああ。ナナリーを助け出すためにも、事は迅速に行わなければならない』

抑揚の少ない声。コナンはぐつと気を引き締めた。

「——ナナリーさんの安全が確保できたら、戦闘を延期してくれるか？」

『……何？』

「予想はしてるだろうが、オレは今政庁の中にいる。恐らく、ナナリーさんもまだ政庁にいるだろ。オメーも当然救出班は出してるだろうが、すでに中にいるオレの方が、確実にナナリーさんの所へ行けると思わねーか？」

突然の提案に、ルルーシュは虚を突かれたらしい。しばらくして返ってきた言葉には、多少落ち着きが戻っていた。

『…黒の騎士団の部隊よりも、ただの子供にすぎないお前の方を信用しろと？第一、お前はナナリーの傍にいないようだ。そもそもたどり着けるのか？』

ここからが正念場だ。コナンは言葉を続けた。

「ただの子供じゃねーよ。『総督とも、ナイトオブブラウズとも知り合いの子供』だ。今、ナナリーさんはすげー弱い立場にいる。当然だよな、元々が皇女っていう以外に長所がない上に、体まで不自

由なんだから。しかも東京が戦場になりそうで、ますます蚊帳の外に追いやられてるだろ。だったら総督には子供のお守りでもさせて、一緒に避難させちまおうと、ナナリーさんの側近が考えても不思議じゃない」

『……………』

「オメーは戦争という選択肢を好きでとってるわけじゃない。だろ？ だったら、ちよつとの間だけでもいいからオレを信じて——」

『もういい』

言葉を遮るように飛んできたその声は、台詞とは裏腹に、ずいぶん穏やかなものだった。

一拍おいて、さらに落ち着いた声が電話機から聞こえた。

『………… お前はよくやったよ。お前が、俺の本当の『仲間』であればよかったのにな。』

けれど、もう遅いんだ。俺はナイトメアでお前のいる政庁に向かっている。早くそこから逃げろ。あの女——ランといったか、彼女を守ってやれ』

通話は一方的に切られた。コナンは文明の利器をしばし見つめたあと、壊しておいた鍵を開けて部屋を飛び出した。

70 秒読み開始（後書き）

ナナリー云々の所を書いていて、「やべ、このままだとコナンがナナリーの所に行っちゃまう！」と気づいて急遽ルルーシュを「話を聞かない男」にした次第ですが、まああの仕打ち（？）の後なら仕方ないよなあ、とギアスファンの方には思っていただければいいです。ギアス本編で「信じる事をやめた」と言っているルルーシュですが、正確には「信じる事に疲れた」感じでこの連載では書いています。常に本音で本気でぶつかるコナンを、ルルーシュは結構気に入っている、というのがこの話における設定です。

また、感想など頂けたら嬉しいです（すぐには返信できないと思いますが）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0028/>

DC × CG 2

2011年11月15日03時24分発行